臣土屋惣藏、弓ヲ持テ數十輩ヲ射殺シ、比類ナキ働シテ即チ討死ス、武田太郎信勝、容貌美麗ノ若武者ニテ、十文字ノ鑓ヲ提ゲ、三箇度マテ突懸リ、無雙ノ働キ目ヲ驚ス、前ヨリハ河尻勢、後ヨリハ瀧河勢、立ハサミ攻戰ヒ、郷民等案内シテ、甲州カケ落ノ侍モ、辻彌兵衞ト云者ヲ下知人トシ、五千餘人ウラ切シテ上ノ山ヨリ横合ニ切テ懸ル、是ニ於テ勝頼・信勝戰ヒ疲レテ討死セシム、時ニ勝頼三十七歳、信勝十六歳、供ノ侍土屋惣藏二十七歳、其外秋山紀伊守・同三十郎・小山田平左衞門・同彌助・金丸助六・土屋御兒・秋山民部・同彌五郎・同下總守・同惣六郎・岩下右近・同惣九郎・小笠原下野・多田新藏・同角助・寺島藤藏・伴刑部・同又市・甘利采女・同彦五郎・曾根内膳・小尾五郎助・同十兵衞・安田十郎左衞門・同源三郎・安西平左衞門・川村五兵衞・雨宮織部・同善次郎・禪僧關山派麟岳和尚、是ハ勝頼從弟ナリ、其弟子圓首座、是ハ秋山子息ナリ、鷹匠ニ齋藤作藏、歩行ノ者ニ、山名源藏・山下木工・皆井小助・椎名新藏・淺波右近等、彼是上下四十七人悉ク討死ス、時ニ今日巳刻ナリ、勝頼父子ノ頸、瀧川方ヨリ中將殿ヘ指上申候處ニ、關加平次・桑原助六兩使ヲ以テ、早々先ツ大臣家ヘ指上ラレ候、

甲斐ノ士討死ス

勝頼父子ノ首級

○〔上杉年譜〕二十六　天正十年壬午三月九日、信長ノ軍士勝ニ乘テ信・甲ヲ攻撃スレハ、防戰ニ利アラス、勝頼ノ從者悉ク離散スレハ、勝頼ハ進退度ヲ失ヒ、田野ノ奥ニ入ントス、軍將土屋摠藏・秋山紀伊守、勝頼ノ馬ヲ引、阿部加賀守・溫井常陸介鎗ヲ携テ相從フ、長坂長閑跡部大炊助等皆逃レ隱ル、同十一日、勝頼田野ノ奥、天目山ニ匿居ル、郷人等來テ田野ヲ襲フ、信忠ハ瀧川左近・河尻肥後守ヲシテ田野ヲ攻メ圍ム、勝頼・信勝父子、及ヒ土屋摠藏等力戰シ、數輩ヲ戮ス、左近等急ニコレヲ責討ケレハ、勝頼・夫婦・信勝皆自殺ス、摠藏等奮擊シテ戰死ス、左近ハ勝頼父子ノ首ヲ取テ信忠ニ獻ス、信忠太刀馬ヲ玉フ、同十三日、信長ハ信州禰羽根ニ至ル、時ニ信忠ノ使介關加平次・桑原助六郎來テ勝頼父子ノ首ヲ獻ス、信長悅テ云ク、信忠國ヲ出テ纔ニ三十日、甲・信・駿ヲ平テ、且勝頼父子カ首ヲ得ル事、可レ謂奇策ナリト、兩使ニモ賞賜アリ、同十五日、信長信州飯田ニ至テ勝頼父子ノ首ヲ梟ス、信忠諸將ニ命シ、兵ヲ分テ武田カ餘黨ヲ悉ク誅罰ス、武田道遙軒・同男左馬助・一條上野介・小山田左兵衞佐・朝伊奈駿河守・今福筑前守・長坂長閑・跡部大炊助等數十輩皆所々ニ於テ害セラル、馬場美濃守カ居城眞木島（信濃）ヲハ、美濃守カ家臣相守ル、美濃守ハ勝頼ト共ニ戰死ス、信長、津田藤三郎ヲ軍將トシテ、眞木島城ヲ攻ム、此時平林藏人・村越志摩守潛ニ相談シ、美濃守カ家臣ト相計リ、何レカ藤三郎ヲ討取リ、越後ヘ御味方ニ屬ント云、尤然ルヘシト同意シ、兵馬急ニ接シ、終ニ藤三郎ヲ討取リ、平林藏人ハ眞木島城ニ入、村越ハ越府ヘ赴ク、島津淡路守ヲ以テ言上ス、

武田氏滅亡ノ狀態

信長勝頼父子ノ首ヲ飯田ニ梟ス

眞木島城將馬場美濃守田野ニ戰死ス

信長ノ將津田藤三郎眞木島城ヲ攻ム

平林藏人村越志摩守藤三郎ヲ討取リ景勝ニ屬ス

景勝芋川正元ヲシテ眞木島城ヲ守ラシム

卽眞木島ノ城代ニ誰ヲカ仰付ラレ遣ハサレ然ルヘキト申シ上ル、尤ニ思召シ、卽芋川(正元)越前守ヲ仰付ラル、五十騎計ノ兵士ヲ引率シ、眞木島城ニ入ラル、是ニ於テ重テ加勢トシテ、三俣九兵衞ヲ遣ハサル、

勝頼沒落ヲ聞キテ越後ノ士民落膽ス

○〔越後古實聞書〕　武田勝頼御沒落に付て、越後の民百姓迄力を落し、皆隣國にて、信長勢入籠り、越後斗り信長と敵對なれは、耕作の心もなく居る也、殊に柴田(重家)は引込、五六ヶ所の城引付て居なれは、無心許なるも理り也、當國の武田の事は、信玄の末の御子也、信玄御咄相手一向宗長遠寺(延イ)と云寺有り、信玄末の御子二歳の時、長遠寺に被賴、成人の後に、長遠寺の娘に取合て子一人有、勝頼沒落の時、高野山へ行て無量院(光脫カ)に忍て居給ふ、其後太閤(豐臣秀吉)の御代に成て、文祿元年、高麗御陣の時、俗になり、高麗へ可被立と て太刀なければ、佐竹の家方奥の院へ納し信國の小太刀、無量光院方被申請、肥州名護屋へ行、景勝公御賴候得共、此所不叶、故に御歸陣之上、上田の者(マヽ)ネうしたのみ、此取次にて景勝公御抱被成、今の武田之他方に、壹人武田有り、是は長遠寺にて持賜ふ子也、

信玄ノ末子上杉氏ニ倚ル

上條宜順、信濃大日方佐渡守等ニ命ジ、國境ノ地下人ヲ召集シテ、信長ノ軍ヲ防ガシメ、金子中務丞ヲ遣シテコレヲ監セシム、

大日方佐渡守ニ敗ル

海津ヨリ案内者ヲ添フ

小河衆

〔大日方文書〕○信濃

急度啓之候、青柳(信濃)之地江、先日敵覃行候、被越節所無恙退散、各御油斷故候歟、自彼表一調儀成度定之由候條、甲・越山際之衆有相談、地下人等迄被押立、助勢可相稼之儀肝要候、爲見使金子中務丞、井從海津被添案内者候、委細口上申述候、恐々謹言、

小河衆江も如斯之旨申度候、以上、

(天正十)三月十一日　(上條)宜順(花押)

大日方佐渡守殿　進之候

上條宜順、長松權三郎ト協議シテ、所領ノ境堺ヲ定ム、

〔魚沼三郡誌徵考書〕

定

一井のくゝ林ハ、大長崎川南ハ、上條分之事、

一大長崎ハ、相のミゝ迄、原分也、下ハ林之内也、

一相のミゝハ、狸岩迄、長松分事、

右、山さゝいの事、少も相違有之間敷者也、

井のくゝ林大長崎

相のミゝ狸岩

天正拾年

天正十年三月十一日

三月十一日　重野内藏之助殿

重野内藏之助

十三日、辛未、泉澤小四郎、佐渡世尊寺ニ、土地ヲ寄進ス、

〔世尊寺文書〕○佐渡

於永代而、諸役なく、此地を進申候處、爲後日也、仍如件、

泉澤小四郎（花押）

世尊寺様参

天正十年三月十三日

〔参考〕

〔新潟縣寺院明細帳〕雜太郡竹田村　日蓮宗　世尊寺

寛元元年三月創立、開基遠藤四郎盛國入道下江房日增ニテ、開山ハ白蓮阿闍梨日興タリ、盛國、初メ順德上皇ニ奉仕ス、崩御剃髮シテ、畑方村ニ當寺ヲ建テ禪門ヲ修ス、後日蓮、日興ニ歸依シ、當寺ノ開基ヲ日興トス、大覺世尊寺ト稱ス、第三世日久ノ代、弘安七年九月、四日町ノ西、國府川ノ東、字千束ニ移リ、後泉澤小四郎城址寄附、天正十年三月今ノ地ニ轉ス、

岩井信能、景勝ニ忠勤センコトヲ誓フ、是日、直江兼續、誓書ヲ信能ニ送リ、事成ルノ日、斡旋センコトヲ約ス、

〔岩井文書〕○上杉家記所收

信甲正體ナシ

敬白天罰起請文

一今度信甲無二正體一罷成、既ニ當國御難儀相植付（ママ）而、貴所御事、無二無三可一有二御奉公一事、

一如レ斯以誓詞一申合候上者、浮沈共可一爲二一趣一事、

一貴所・某間之以侯說一如何樣ニ申妨候共、全不一可一有二信用一候事、

以上○神文略　仍起請如レ件、

直江與六兼續ト稱スル初見

天正十年三月十三日　直江與六　兼續（花押）血判アリ

岩井民部少輔殿（信能）

〔上杉家古文書〕

信能ノ苦衷

尚々、如何之時分上様以御意光(威)、とさ(外様)ものの共ニも、先代成ニ令馳走、父ニも一所ニ
さんろう(談合)申、上さ(様)御めふろけ申ゝや佛神を頼入候、此表ニ祢まり、在所(飯山)之儀をは
存候ハす候事、無是非次第候、御取成候て見候、めしろへさせられ本意ニ被成候て
被下候、けん日、上さ(様)又ろさ〳〵さ(様)無二御不うこう可申存候も、一度上様御光(威脱カ)
以本意申度存分候、さやうニ無之候へ者、近年忠信水致之申事候、奉頼候、已上、

信濃ノ兵飯山城ヲ攻ム

態以飛脚申達候、仍而昨日御書中被下候、令參著候、外様之もの共如先代御忠信申、飯(信濃)
山之地取ゟめ申候之由、自何以可然候、如何落城申候哉、ろやう之時分、爰元江被差越
候故、信州へ出陣申候ハて無是非次第候、定備(昌能)中守も、一はいふ(類譜)代召使者、外様面々力
有間敷候、一度上様(景勝)御前を無二まゝり申(護)儀候、ろやう之時、御意光以本意申、外様もの
共御取成申度候ニ、爰元在陣何事候哉、能々御分別候て、めしよせられ、外様之先御歸
被成候迄、御越候様ニ頼入申外無他事候、萬吉恐々謹言、

岩井昌能

卯月一日　　岩民(岩井民部少輔)

與六殿參人々御中　　信能(花押)

二十日、戊寅、景勝、宿舍ヲ造營スベキ、作事衆ノ傳馬ヲ管内ニ命ズ、

宿送二人

〔上杉古文書〕八〇羽前

爲御宿作、御作事衆御越候、宿送二人可相調者也、仍如件、

天正十　　景勝(朱印)

三月廿日

所々領主中

木場城將蓼沼友重・山吉景長、新發田重家ト戰ヒ、勝ツ、是日、景勝、コレヲ褒ス、

〔志賀槇太郎氏所藏文書〕〇羽前

今般向其地凶徒相動之處、堅固之及防戰、敵數多之由、粉骨無比類候、足輕共も別而相
稼之段、直江(兼續)所へ之注進披見、感悅候、自然於相支者、彌一廉之擬可爲專用候、巨細直江
可申屆候、謹言、

三月廿日(天正十)　　景勝(花押)

山吉玄蕃允(景長)殿

蓼沼藤七(友重)殿

○右文書、年次詳ナラザレドモ、姑ク茲ニ掲グ、

二十四日、壬午、景勝、越後山寺地主別當ノ、信濃仁科口ニ戰ヘルヲ賞シテ、寺領ヲ郡

司不入地トナス、

〔山寺文書〕○越後

今般仁科(信濃)口之義(儀)、被相稼、無比類、右就之寺領分爲郡司不入者也、

天正十年
三月廿四日　(景勝)朱印

山寺地主

〔參考〕

〔西頸城郷土史料〕二　山寺村　山寺ハ、往時水穂村ト稱ヒ、三保トモ、山口・別所・山寺ハ一村ニシテ、日吉社ノ所領ナリト、○中略日吉社ハ、本村ノ村社ニシテ、元、根知谷郷ノ惣社ナリ、所領ハ、水穂ノ外大久保・大神堂ヲモ領セシ由、寛文年中、村高五十五石餘、内二十石ハ社有、外ニ除地九石一斗二升七合、付屬寺院、古ハ十二寺、其後衰廢シテ、其名ノ殘レルモノ八ケ寺、千手院・金藏院・水穂寺・宰相坊・玉藏寺・玉萬寺・光釋寺・塔仙坊等ニシテ、天和檢地ノ時、字名トシテ存セリ、獨リ千手院ハ、維新ノ際マテ日吉社ノ別當ニシテ、所領ヲ管理セリ、○中略天正十年、武田氏滅亡ニ際シ、國内大ニ亂ル、當時信州ヨリ、小谷峠ヲ越ヘ土寇ノ侵入スルアリ、土人此難ヲ恐レ、四方逃散セントス、山寺ノ住僧、奮テ

根知谷郷ノ惣社日吉社

衆ヲ募リ、數百人ヲ集メ、討テ大ニ之ヲ破ル、上杉氏感狀及ヒ薙刀ヲ贈リ、其功ヲ賞セリ、

〔附錄〕

〔千手院文書〕○越後

山寺御領分之内、棟役段錢永代奉寄進候、於神前、御祈念奉願候、依如件、

天正十年(十一カ)
未五月二日　西片房家(花押)

南水穂寺○本書、便宜參ニ附收ス、

西片房家棟役段錢ヲ南水穂寺ニ寄進ス

〔歷代古案〕六○羽前

從牧島(信濃)如注進者、仁科洞中之者共、自其元不慮之行可有之間、是非待請可及其擬由申來候、自然聊爾ニ動ふと有之候而ハ、不可有曲候、雖可被成御書候、從拙者可申越由堅御諚ニ候間、其心得尤候、爲其申屆候、恐々謹言、

牧島仁科洞中

二月十四日　直江
西方二郎右衛門殿(房家)　○年次詳ナラズ、姑ク、茲ニ附收ス、　兼續

天正十年三月二十四日

景勝、越中守將上野九兵衞尉ノ戰功ヲ褒シ、且ツ、須田滿親ノ指揮ニ從ヒテ堅守セシム、

〔歷代古案〕五羽前

重而總軍爲差上候間、乍太儀、打返須田(滿親)如差圖走廻肝要候、永々在陣勞兵雖痛入候、此度之儀候間、可抽粉骨事、肝要候也、

(天正十)三月廿四日　　景勝

上野九兵衞とのへ

柿崎ノ人數ハ他國ノ者

永々在陣、辛勞之至候、重而加勢差遣之間、萬端須田差圖次第可走廻事肝要候、此度之儀といひ、柿崎事ハ、自他國之人存候儀候間、得其意、別而可抽粉骨事尤候也、

三月廿九日　　景勝

上野九郎兵衞とのへ

安城

其元永々在陣、各太儀不申及候、殊今度安城(越中)表、敵相働ニ付而ハ、人體衆御歸之處ニ、其家中踞殘之由、自(須田相模守滿親)相州被仰上、一段奇特之由、御感候、雖無申迄候、彌於何事も相劣御下知次第可被走廻事、專用ニ候、去而又、信州口之儀、如何ニも御仕置堅固ニ被仰付候、是又可心安候、猶重而可申候、恐々謹言、

追而、各以別帋可申候へ共、急候間、無其儀候、此由傳達尤候、以上、

三月廿四日　　直江　兼續

上野九兵衞尉殿參

二十九日、亥、越中ノ守將須賀盛能・秋山定綱等、屢〻援ヲ景勝ニ請フ、景勝、海上風波ノ爲メ、且ツ、信濃及ビ關東ニ事アルヲ以テ出馬スルヲ得ズ、是日、盛能等ニ返報シ、出馬ノ遲延ヲ告ゲテ、姑ク堅守セシム、

〔歷代古案〕九羽前

脚力到來、仍、自此方も度々雖及飛脚候、無參著候哉、書面不相見、無心元候、然者出馬之儀、依無據子細、延引口惜候、雖然舟數相催候、近日可令渡海候、將又、好箇之時分、吾分等楯籠候故、堅固之段感悅候、出馬之內彌手堅可相拘事肝要候、謹言、

天正十年　　景勝

三月八日

天正十年三月二十九日

須賀修理亮（盛能）殿

秋山伊賀守（定綱）殿

〔畠山文書〕○上杉家記所收

先度以書札申屆候キ、參著候哉、然者其元珍敷儀も候歟、爰許上下無違儀候、越中行可急由候處、一圓舟不調故、先以令滯留候、其以後魚津之儀無替儀、堅固之由候、可御心安候、雖無申迄候、藤田有談合、其表御稼簡（肝）心候、猶、萬吉重而可申越候、以上、

（天正十）三月十六日　　景勝（花押）

上條（宜順）殿

上條宜順

信濃關東ニ事アリテ延引ス四月五日出馬十日頃魚津ニ著陣セン寺内織部法橋水越左馬助江口式部丞

〔歴代古案〕三○羽前

先達兩使到來、具及回報候キ、仍於其國遍可令出馬之處、信劣關東表無據有子細延引候、然者來五日時分者、必魚津表可打立候、縱海上不成我儘順風次第ニ候共、十日頃ニ者可令著馬候、令得其意、始中終走廻此時候、猶寺内織部法橋水越左馬助可有口上候、恐々謹言、

三月十九日　　景勝

江口式部丞殿

〔歴代古案〕九○羽前

萬方無據依子細出馬遲々付而、越中之仕合無念至極候、乍去吾分共於彼地稼用心以下無比類故、皆々身命無別儀由候、此上再興も案中候、山下爲仕置歴々指置候間、吾分等休息尤候、謹言、

三月廿九日　　景勝

須賀修理亮殿

秋山伊賀守殿

〔管窺武鑑〕　景勝公越中國魚津城後攻ノ事

信長ノ國分手柄次第切取信長ノ部將等ノ計議

天正十年壬午三月十一日、織田信長公、甲州武田勝頼公ヲ攻亡シテ、勝頼公ノ郡國ヲ被裂割、先是天正六年謙信公逝去ヲ聞テ、信長國分ハ、越前ハ柴田修理勝家、加賀ハ佐久間玄蕃（盛政）、能登ハ前田又左衞門利家、越中ハ佐々内藏助成政、此外ニモ多シ、手柄次第ニ可切取トアリ、右ノ通故、武田滅却ノ砌、柴田修理越後ヘ望ヲカケ、信長ノ士大將關東ニ留リタル面々相談ハ、甲州家ノ譜代新參者共、定テ上杉景勝カ北條氏政ヘ賴附クヘシ、上杉ハ隣國ニテ、殊ニ景勝强將ナレハ、大形越後ヘ隨ヘシ、景勝サヘ攻亡サハ餘國ハ手間取間敷ト存候、然間佐々ト柴田トハ越中ヨリ働入、森勝藏（長可）ハ信濃ヨリ大

天正十年三月二十九日

田切口ヘ働、瀧川ハ甥ノ義大夫沼田ヨリ三國峠ヘ懸リ働入ヘシ、然ハ景勝此口々ヘ手配スヘシトイヘ共、被官ノ柴田(新發)因幡守逆心シ、阿雅(揚川)北二郡ノ内、蒲原郡ハ過半因幡領知ニテ取敷ナレハ、瀨波(岩船郡)ノ者共大形景勝ヲ見放ヘシ、一方得勝利ナラハ、三方共ニ可レ得レ利、景勝滅セハ信濃・上野ハ云ニ不レ及、能登・加賀・越中迄モ治ルヘシト相談シテ、諸方ヨリ近々働入トノ注進アル故、景勝公柴田ヘノ御働ヲ先被レ閣、信長衆ヘ向手配手分ヲ被レ仰付、

目標ヲ景勝ニ置ク

四月小盡 己丑朔

一日、己丑、是ヨリ先、景勝、上條宜順ヲシテ新發田重家ヲ諭サシム、重家肯ゼズ、是日、宜順、景勝ニ、菅名綱輔ヲ越中ヨリ召還シテ新發田ニ向ハシメ、本庄繁長ヲ更ニ激勵センコトヲ勸ム、

〔上杉家古文書〕

猶々、自貴所使者被仰付、口上懇比ニ被仰含尤候、以上、

一筆申遣候、仍而先日も如申屆、新發田ヘ自其方人ヲ被差越可レ然旨存候、其以後自何之筋も手引無之候條、御才角(覺)有之而使被仰付、いろん共聞別候樣ニ書中可レ被差越候哉、兎角〳〵今夜有工夫、明日早々御越、可レ請御意見候、以上、

（宜順）上條殿　參

（附箋）「景勝直筆」

（景勝）實城○日付闕ク

景勝宜順ヲシテ重家ヲ勸説セシム

尙々、下筋ヘ御使之儀、相意得申候、委曲明日可申上候旨、可レ預御取成候、以上、

御書謹而頂戴仕候、仍、新發田江自愚方使者可申付之由被仰出候、可レ然使雖無御座候、奉レ任御諚候、御口上明日罷出奉得御意、可申付候趣、宜御取成奉賴存候、恐惶謹言、

（上條政繁）宜順（花押）

即刻

（表書）「直江與六（兼續）殿　上條入道　宜順」

繁長ヘ重テ使ヲ遣スベシ

尙々、雖無申迄候、世間之批判被聞召、御工夫專用ニ奉存候、如何樣直江所罷越、笑候(止脫カ)事ふゝら、可レ致雜談候由奉存候趣、御取合奉賴存候、本庄ヘも重而御使被差越、兼日被仰越候筋目、無相違彼口可レ致馳走之由、以御入魂被仰屆尤ニ奉存候、此等之趣、御取成奉賴存候、以上、

富永新發

謹而言上、今朝者油斷仕、遲罷出令迷惑候處、被召出奉忝存候、仍而富長(永)、新發田之儀致

田ノ形勢ヲ語ル

雑談候、口惜存候、兎角御覺悟之前候、此上者物色出申候時分之御工夫ニ相極申候、越中表へ御番替被差遣、菅名(綱輔)被召寄候而、自然下筋及行之由申來候者、爲御手向ニ被差越可然候歟、安田(治部)下條・水原(満家)家中へも、越・信御備可然御座候間、彌可抽忠信之段、被仰下尤奉存候、信州口へも折節可然候者、急度被及御行、其上之隨模様、地利之御普請被成定、境目之御仕置被仰付肝要奉存候旨、御取成奉賴存候、恐惶謹言、

安田下條水原等ニ備ヲナサシムベシ

宜順(花押)

四月一日

(表書)「直江與六殿　上條入道宜順」

○重家、景勝ニ抗スルコト、正月二十七日ノ條ニ、綱輔、越中ニ在リテ同國ノ動靜ヲ直江兼續ニ報ズルコト、二月十八日ノ條ニ、景勝、重家ヲ擊タントシテ春日山城ヲ發スルコト同月十九日ノ條ニ、景勝、新發田城ヲ攻擊スル爲ニ、三條ニ到ルコト、八月二十日ノ條ニ見ユ、

二日、庚寅、越後小川莊ノ小田切彈正忠、蘆名盛隆ニ、越後ノ形勢ヲ報ズ、是日、盛隆答書シ、彈正忠ニ、命ヲ俟タズシテ、兵ヲ出スコトヲ禁ズ、

〔伊佐早文書〕○羽前伊佐早謙氏所藏

越國口之事、則到來祝著ニ候、猶珍敷儀候者、重て到來可待入候、自爰元身不申越間ハ、双方へ間々爲屆も、一騎一人越候事不可然候、何邊自爰元之作事次第ニ可有之候、恐恐謹言、

(天正十)四月二日　(蘆名)盛隆(花押)

小田切彈正忠殿

四日、壬辰、景勝、長沼城ヲ略取セシム、會〻、新發田重家離叛ノ狀報ヲ聞キ、是日、木場城將山吉景長・蓼沼友重ヲシテ、守備ヲ嚴ニシ、出馬ノ日ヲ待タシム、

〔蓼沼文書〕○羽前

態用飛脚候、仍新發田(重家)露武色由、自方々告來候、無心元候、何へも申屆之間、各令相談、如何ニ取懸候共、堅固之仕置尤候、去而又、信州口之儀、長沼之地、昨二日則(乘取)候、彼仕置申付之上、人數差遣候歟、令出馬、新發田退治案中ニ候、千言萬句其地用心相極候、謹言、

信濃口仕置ノ上ハ新發田退治案中ニアリ

(天正十)卯月四日　(景長)山吉玄蕃允殿　(友重)蓼沼藤七殿　景勝(花押)

五日、癸巳、織田信長ノ將森長可、信濃海津城ニ鎭シ、稻葉貞通飯山ニ陣ス、越後ノ將芋川正元飯山ヲ攻ム、是日、織田信忠其報ヲ得、尋デ、長可、正元等ヲ破ル、

織田信忠モ援軍ヲ出ス

正元大藏城ニ籠ル

長可長沼及ビ大藏城ヲ屠ル

〔信長記〕　四月五日、森勝藏（長可）川中島（信濃）海津に致在城、稻葉彦六（貞通）飯山ニ張陣候之處、一揆令蜂起、飯山を取卷之由注進候、則稻葉勘右衞門（重通）・稻葉刑部・稻葉彦一・國枝（頼母）、是等を爲加勢、飯山江被差遣候、三位中將信忠卿ゟ團平八（景春）、是又被差越、然而御敵山中引籠、大藏の古城拵、いも川（正元）と申者一揆致大將、楯籠候也、

四月七日、御敵長沼口へ八千計相働候、則森勝藏懸付見合、噇と切崩り、七八里の間追討に千二百餘討取、大藏の古城にて女童千餘又切捨、以上首數二千四百五十餘有、此式候之間、飯山取詰候人數勿論引拂、飯山請取、森勝藏人數入置、稻葉彦六御本陣諏訪へ歸陣也、稻葉刑部・稻葉勘右衞門・稻葉彦一・國枝等安土へ歸陣仕、右之趣言上也、森勝藏山中へ日々相働、所々の人質取固、百姓共還住被申付、粉骨無是非樣體候也、

長可川中島四郡ヲ領ス

〔惣見記〕二十二　森勝藏一揆退治事

（天正十年四月）同月五日、信州河中島一揆合戰有之、抑當郡主森勝藏長一（可）、今度四郡拜領仕リ、貝津（海）ノ城へ入部セシメ候、且又、同國飯山ト云所ニ、稻葉彦六郎貞通張陣仕候處ニ、河中島ニテ一揆蜂起シ、浪人武者土民百姓都合一萬餘人、飯山ヲ取卷ク由注進有之、即加勢トシテ稻葉勘右衞門・同彦市・國枝頼母等數輩、幷中將殿ヨリ團平八郎指遣サレ候、然レハ、一揆等長沼口へ相働キ候處ヲ、森勝藏手勢ヲ以テ一戰ヲトゲ、勝利ヲ得、一揆ノ奴原二三千討捕、其後一揆等、山中ニ引籠リ、大藏ノ古城ヲ構ヘ、楯籠リ居候處ニ、勝藏又彼城へ押詰攻落シ、一揆ノ大將分芋川ト云者ヲ初トシテ、又數輩討捕候テ、城ヲ引崩シ、當表悉ク退治申候、此注進中將殿聞召サレ、御感狀ヲ成下サレ候、（○正元ハ戰死セズ、十一日ノ條參看、）今度、於其表、一揆駈催、數千騎令蜂起候處ニ、早速馳著、遂一戰、悉討果之旨、尤以神妙之至也、殊大藏城乘取、彼是頸數三千餘到來、誠ニ謂遠國、謂其方一人之覺悟、謂己之地而多勢之敵、旁以不淺處也、仍如件、

織田信忠長可ニ感狀ヲ授ク

天正十年四月十一日　信忠（織田）

森勝藏殿

六日（甲午）、新發田重家、越後篠岡・水原・下條等ノ地ヲ攻擊ス、蓼沼友重・富所定重等、邀擊シテ之ヲ破ル、是日、景勝、友重等ノ戰功ヲ褒シ、三條城將等ト協議シテ守備ヲ嚴ニセシム、

〔蓼沼文書〕○前　羽

新發田出武色篠岡（北蒲原郡）之地へ取懸候處ニ、彼地之者共爲思儲儀候間取合、手負死人無際限仕出之由候、翌日又、水原・下條成働候處ニ、是も兼日之覺悟儀候間、及其擬得利之由心地好候、如此之間令越河儀者有間敷候、自然皆々留主中ニ候間、其隙ニ成働儀も可

重家阿賀

野川ヲ渡ルコトナカルベシ

有候歟、然者三條其他示合、堅固之防戰肝心候、謹言、

（天正十）卯月六日　景勝（花押）

蓼沼藤（友重）七殿

〔伊佐早文書〕○羽前伊佐早謙氏所藏

新發田出武色、篠岡之地へ取懸候處ニ、彼地之者共爲思儲儀候間取合、手負死人無際限仕出候之由候、翌日又、水原下條へ成働候處ニ、是も兼日令覺悟儀候間、及其擬得利之由心地好候、如此之間、令越河儀者有間敷候、自然皆々留守中ニ候間、其隙ニ成働儀可有之候歟、然者其地用心堅可申付事、專一候、謹言、

卯月六日　景勝（花押）

富所伯者（定重）守とのへ

景勝、尾崎重元ニ、鴨居村ノ地ヲ知行セシム、

〔歴代古案〕六○羽前

五十五貫九百文　鴨居村

此内

二十貫文之分、被仰付者也、仍如件、

二十貫文

天正十年　卯月六日　直江（兼續）

尾崎孫十郎（重元）殿

○景勝、重元ノ年貢ヲ改定スルコト、六年八月二十日ノ條ニ見ユ、

七日、乙未、新發田重家、援ヲ蘆名盛隆ニ請フ、

〔歴代古案〕三○羽前

如貴翰之、先段者御使節忝奉存候、仍而此表樣子、栗村藤兵衞迄申屆候キ、猶以、先達而御使者彼是ニ付而、以使者申述候キ、定而可爲參著候、於樣體者、富田美作（富作）・栗藤・須江大隅（須太）兩三迄申屆候旨、可得御意候、恐々謹言、

（天正十）卯月七日　新發田因幡守　重家

栗村藤兵衞

○以下斷簡

○本書、宛名ヲ闕クト雖モ、蘆名盛隆ニ宛テタルモノトシ、姑ク玆ニ掲グ、

景勝、信濃長沼城主島津忠直（昔忠）ノ功ヲ賞シテ、上田加野ノ地ヲ附屬セシム、

〔上杉年譜〕二十六　天正十年四月七日、島津淡路守忠直、最前ヨリ信州長沼ニ居城シテ、志ヲ越後ニ屬ス、然ル處ニ今般武田勝頼父子生害ニテ、甲・信紛亂シテ稻麻ノ如ク

ナレハ、忠直籌略ヲ廻シ、信州ノ諸士ヲ語ヒ、御味方ニ屬セシム、其忠義尤深厚ニ感シ思召レ、忠賞トシテ前代ノ如ク、長沼城ヲ下置レ、特ニ加祿トシテ食邑ヲ玉フ、其御書云、

名取分
上原分

上田加野之内、名取分幷上原分如前々、長沼之地附置之間、相當之役給人見繕可召仕候者也、仍如件、

天正十年　四月七日　（忠直）

島津淡路守殿　景勝

魚津松倉
兩城堅固

八日、丙申、本願寺光壽、五ケ山邊ニ到ル、越中城ケ端善德寺之ヲ景勝ニ報ズ、是日、景勝、答書シ、善德寺ヲシテ一向一揆ヲ催シ、能登・越中ノ一揆ト策應シテ、柴田勝家ノ軍ニ抗セシム、

〔善德寺文書〕○越中

飛脚到來得其意候、仍而先達柴田（勝家）・山内相動之處、及防戰、數千討捕之由、心地好候、次彼徒越中表相動候、魚津・松倉如何ニも堅固申付之間、可心安候、然者門跡（光壽）至于五ケ山邊御下向之由候、幸之儀候間、任兼日之首尾、國中相催、可被揚放火事肝要候、有遲々者不可然候、越中・能州其國御門徒中於發向者、當國差合、今般凶徒之根切可成之條有其心得、一刻片時茂早々被揚火先、尤候、恐々謹言、

（天正十）卯月八日　景勝（花押）

善德寺

〔善德寺由緒略記〕　天正十年三月下旬、信淨（光壽）院（教如上人之事）按察法橋・富井佐渡守・豐前淨喜寺等、被爲召、當寺江御潛入、十有餘日、御滯在有之候節、上杉家より被指越、返翰文面なり、○文面略

〔參考〕

〔城端御坊善德寺由來〕　其後天正十三酉三月下旬、教如上人、飛州白川越ニ當國ヘ御下向有テ、當坊所ニ十四日御逗留遊ハサレ、善德寺住職ヲ御身近ク召サレ、大坂石山十一年ノ間合戰、御心痛ノ御物語等遊ハサレ候内、其頃越後ノ上杉景勝味方致サレ、○中略上人北國御下向ノ事、上杉ヘ御知ラセニ及ヒ、景勝返書當御坊ヘ向ケテ書簡到來致ス也、此文中ニ、上人此度五ケ山御通リ下向ノ由、猶又内談モ有ヘク旨等於有之、其國ニ龍勢立ラレ候ヘハ、夫ヲ相圖ニ、越中善德寺ヘ向ケテ登ルヘシ、依テ夜々相圖見合ノ者申付置モノ也トナリ、

日夜ノ攻撃ニ屈セズ
中條景泰ト共ニ第一廓ヲ守ル

九日、丁酉、越中魚津城守將蓼沼泰重、戰況ヲ家人ニ報ジ、決死ノ志ヲ告グ、

〔吉江文書〕○羽前

天正十年四月九日、越中魚津ゟ到來之文談（讀カ）寫し置候、

あより（便）候間、ふミ（文）して申こし候、日やせめ（夜攻）候へとも、いまニおち申さす候、そもゝしハ

あゝちう（中條景泰）とのと一つニ、いちのとゝりニ祢まり（堅固）申候、ついて、いてをしゝらい申候ゝ、

こゝもとよてをき申者二人てを（手負）い申候、よの物ハけんこニ候、おゝゝ（母）とも、與三・藤八

郎けんこニ候や、與三ちきやう（知行）とり申さぬうちニ志ゝ（死）ゟ申すへきとむゝんニ候、志ゝ

候とも、太郎さへとりさて候へゝ、かん（肝）なう（要）ニ候、このさひいゝんともめてゝくゝふり、

御めにゝけ申さく存候、恐々謹言、

返々、御こゝろやすくおゝし召候へく候、以上、

四月九日　　ゝもん（蓼沼掃部泰重）

お太郎との

十一日、己亥、上條宜順、信濃守備ノ狀況ヲ、直江兼續ニ答報ス、尋デ、景勝、守將等ノ勞ヲ慰問ス、

〔讀史堂古文書〕○羽前伊佐早謙氏所藏

信濃ニ新城ヲ築ク
人脚不足
鷗閑齋
飯山長沼ノ武主

御書謹而頂戴奉忝存候、仍而此表之御普請、先日以繪圖被申上候所ヨリ、三里近ニ可然所令見、各見立候而、則普請仕候、水も御座候、少も無油斷申付候間、乍恐可被御心安思召候、併人脚漸々卅計御座候間、迷惑存候、於樣子者鷗閑齋（道喜）可被申上候、隨而兩地武主之儀、誠推參ニ雖可被思召、不顧憚申立候ヲ、謙信樣御代ニも、堀江新地ニ被差置候條、彼者ヲ可被仰付候間、尤寶藏院、芋川（正元）ニ被差添候者、大略五百餘可有御座候由奉存候、如御意候、萬事御急相極存候、當口被明御隙（越中新發田）上下被合御覽候而、無二被成御出馬、被直御備尤奉存候旨、可預御取成候、恐惶謹言、

（天正十）四月十一日　　上條入道
（兼續）直江殿　　宜順（花押）

猶々、越中表無相替儀候由、肝要候、殊下筋御仕合、御天道目出難申立候、又、小倉・村山・宇野相稼申候、以上、

〔歷代古案〕七○羽前

永々在陣、殊新地普請、苦勞心盡、別而下々勞兵痛入候、雖然、此度之儀無據事可爲校量候間、彌被入念、早速成就候之樣ニ稼肝要候、上下無替儀候可心安候、謹書、

天正十年四月十一日

卯月十八日

吉江與太郎殿
新津丹波守殿（勝資）
小倉伊勢守殿
與板衆
赤田衆
丸田伊豆守殿
村山善左衛門殿（慶綱）
河田軍兵衛尉殿
竹俣筑後守殿（房綱）
宇野民部少輔殿

吉江與太郎
新津勝資
小倉伊勢守
與板衆
赤田衆
丸田伊豆守
村山慶綱
河田軍兵衛
竹俣房綱
宇野民部少輔

十二日、庚子、蘆名盛隆、景勝ヲ存問ス、是日、景勝、盛隆ノ將金上盛備ニ答謝シ、且ツ、新發田重家討伐ノ事情ヲ告グ、

〔上杉年譜〕二十六

從是欲令啓之處、自盛隆預脚力、喜悅之至候、仍新發田事、信申備依無正體、出馬之儀有間敷之由思詰候哉、今般武色不苦候、假令彼者其以前抽似合之奉公之間垂不便候、於此度者無是非可討果候、爲不令通馬（直イ）、遂對治樣子共、兼而示置候間、餘最安候、自何以貴所内々入魂故、此度無二盛隆（蘆名）無御別條儀不淺次第候、將又、上口信州表仕置堅固申付候、縱、凶徒如稻麻竹葦襲來候共、於防戰者可御心易候、猶、自是以使者可申述候、恐々謹言、

（天正十）卯月十二日　景勝

金上兵庫頭殿（盛備）

景勝苦慮

十三日、辛丑、景勝、越中魚津城ノ危急ヲ聞キテ之ヲ救援セントシ、能登ノ諸將及ビ上條五郎ヲシテ先發セシメ、而シテ自身之ニ續カントス、是日、魚津城守將中條景泰等ヲ激勵シテ堅守セシム、

〔石母田文書〕○陸前

諸將ノ勞ヲ謝シ其事歷ヲ稱揚ス

其表敵于今長陣之由、辛勞心盡中〳〵痛入候、各心中之程思ひやり、心も心不成候、隨分之衆さてこもらさ候故、城中無思日も由、勿論左樣ニ可有之と令察候、織部父子三人・喜四郎事ハ、すてニ謙信御芳志、御眼力ヲ跡々けらさす候間、此度之義（儀）不殘候、長與次も謙信御介抱之者ニ候間、尤其恥ヲ可思候、若林蓼沼事ハ、はさ本ノさ多ニ候間、是

非無申事候、石口事、何も兄弟共兼而及聞ト云、此度籏本ニ召遣候上ハ、其ゑるし可有之と思詰候、安部事ハ不及沙汰ニ候、藤丸事ハ於賀州覺者ニ候間、是又無是非候、龜田事ハ若者之事ニ候間究而一ゝと可稼候、三河守先年之一亂ニも無二ニ候キ、其上年比と云、無申事候、山本寺事、名字と云、其身若きと云、代々弓箭之家ニ候間、此時究而是非と可思候、旁かゝは思日もなき事ハ有ましく候、將亦、信州口仕置隙明候間、此節令出馬、北國弓矢之手付、是非々々、依之爲先勢能州朝倉遊佐家中兩三宅、溫井幷其外上條五郎、齋藤下野守、河田軍兵衞尉、不働山城者境之城主、何も指越候間、能州衆打立候を彼飛脚見屆候間、可被爲才覺候、直馬ハ三日可爲跡候、直馬なき以前、まつくら其地重而指越人數ト合、一あてゝい肝要ニ候、目出度於其表可申候、謹言、

松倉城兵ト協力シテ一戰ヲ試ムベシ

天正十年　卯月十三日　景勝

中條景泰　中條越前殿
寺崎長資　寺崎六藏殿
吉江信景　吉江喜四郎殿
龜田長乘　龜田小三郎殿

藤丸勝俊　藤丸新助殿
安部政吉　安部右衞門殿
山本寺景長　山本寺松藏殿
竹俣慶綱　竹俣三河守殿
蓼沼泰重　蓼沼掃部殿
若林家長　若林九郎左衞門殿
石口廣宗　石口采女殿
長與次　長與次殿
吉江宗信　吉江常陸入道殿

〔上杉年譜〕二十六　天正十年四月十三日、越中魚津ヨリ脚力到來ス、信長下知トシテ柴田修理亮カ兵士、松倉魚津ノ兩城ニ向ヒ、小井手砦ニ屯シ、魚津ヲ攻ム、防戰ニ於テハ、城兵等身命ヲ捨テ相働クト雖モ、敵兵日々ニ增長ス、カクテ味方ニハ數日ノ籠城ニ兵粮モ缺乏セリ、早ク御出馬ナクンハ後難計リカタシ、速ニ後援ヲ促サルヘシ、此ニ依テ同十三日、加勢トシテ上條彌五郎・齋藤下野守ニ能州御味方ノ諸士ヲ差向ラル、公ニハ二三日遲引有テ御出馬有ヘシ、其内堅固ニ相守ルヘキ旨嚴重ニ公命アリ、

魚津城糧食欠乏ス

其御書云、○書狀、前揭ニ同ジキニ付キ略ス、

〔越登賀三州志〕故墟考ニ新川郡　魚津　在ニ加積郷ニ、相傳小戸・小津・魚津互ニ書シテ不ニ一概ニ、微妙公、明暦中魚津ノ字ニ定ムト也、小戸未レ可レ考、小津ハ、小瀨道喜ノ太閤記ニ、天正十年、越中小津城ニ、長尾家爪牙ノ臣六七人、其勢五千ニテ籠城ト記スヲミレハ、天正中ヨリハ小津ニ作ルカ、慶長十四年十一月二十日、細川越中守忠利ヨリ、瑞龍公ヘノ返翰トシテ、大音主馬マテ應セラル書中ニモ小津城トアリ、是卽チ、公、魚津ニ居玉フ年也、此書ノ寫ハ古案記ニ見ユ、深井彪カ廢城考ニモ小津ト載タリ、然レトモ、魚津ノ字面既ニ太平記ニミユレバ、古來ノ正字ナルヘシ、

要害

遺跡ハ、蓋シ東西六十間、南北五十三間、塹南北幅二間、二丸繞ニ本丸ニ、四方長各九十六間、幅十五間、平地ニシテ卽今米倉アル所也、角川橋ノ巳方ニ當テ、升形古城山遙ニミヘ、其向ニ鹿熊古城山ミユ、一書ニ、這城魚津町ノ南ニ當ル、大手西一方口也、搦ヘハ本丸ヨリ橋ニテ通ス、海ノ手ハ不ニ堅固ニ、城與海相去一町許、上口ニハ角川・片貝川・布施川流ル、山手所々艱難トアリ、或ハ松倉ノ支堡ト也、○中略

十年（天正）五月、景勝、三千八百ノ兵諸國廢城考、作ニ五千ニ、不レ是、ニテ這城ニ保ムヲ、信長公ノ諸將コレヲ圍ミ、柴田勝家奇計ヲ以テ、河田吉江ヲ欺キテ討取リ、城陷ツルコト、太閤記等諸錄ニ見ユ、是ヨリ佐々成政據レリ、○下略

○魚津城危ク、山本寺景長等連署シテ直江兼續ニ決死ヲ告ゲ、景勝ニ披露センコトヲ請フコト、二十三日ノ條ニ見ユ、

十七日、乙巳、景勝、使ヲ本庄繁長ニ遣シ、且ツ、築地資豐ヲ慰問ス、

〔築地文書〕○前羽

本庄（繁長）江有ニ所用ニ及ニ使者ニ候間染筆、仍、其表無ニ相替儀ニ候哉、無ニ心元ニ候、晝夜無ニ際限ニ劬勞痛入計候、雖ニ不レ及ニ申候ニ、彌、貞正之仕置專一候、猶可レ有ニ彼口上ニ候、謹言、

四月十七日（天正十）　景勝（花押）

築地修理（資豐）亮殿

○上條宜順・景勝ニ、使ヲ繁長ニ遣サンコトヲ勸ムルコト、一日ノ條ニ見ユ、

十八日、丙午、景勝、酒井新左衞門等ノ、新發田重家邀擊ノ功ヲ褒ス、

〔上杉年譜〕二十六

今度其表新發田相稼之處、手堅防戰、宗徒之者數輩討捕之由、粉骨神妙之至候、彌、於ニ勵ニ軍功ニ者、可レ感ニ之也、

天正十年　卯月十八日　景勝

酒井新左衞門殿○篠岡城將

今度其表新發田相働之處、手堅防戰、宗徒之者數輩討捕事、粉骨神妙之至候、彌、於ニ勵ニ軍

功者、可レ感レ之者也、

天正十年
卯月十八日
多功勘之丞殿

景勝

多功勘之丞

今度其表新發田相働之處、手堅防戰宗徒之者數輩討捕事、粉骨神妙之至候、彌於レ勵二軍功者、可レ感レ之者也、

天正十年
卯月十八日
青海川圖書助殿

景勝

青海川圖書助

○四月十八日、景勝ノ、柄澤十左衞門・田中小兵衞ニ授クル感狀ハ、前同文ニ付キ略ス、

十九日、(丁未)蓼沼友重、新發田重家ノ黨ヲ新潟ニ破ル、是日、景勝、其功ヲ褒シ、且ツ、重家ノ動靜ヲ探報セシム、

〔蓼沼文書〕○羽前

如二注進一者、新潟ヘ行成之、何も相稼候而、敵數多討捕之段、心地好次第候、雖レ無二申迄一候、其許近邊申合、其擬簡(肝)要候、扨又、信州口尤越中表無二違儀一候、可二心安一候、猶萬吉重而可二申越一候、謹言、

追而、新發田之樣子能々聞屆、細々注進尤候、以上、

卯月十九日(天正十)
蓼沼藤七(友重)殿

景勝(花押)

景勝、信濃芋川正元ノ眞木島城ヲ守ルヲ賞シテ、地ヲ宛行フ、

〔上杉年譜〕二十六　天正十年四月十八日(九ノ誤カ)、芋川越前守正元、武田勝賴滅亡ニ付テ、信州眞木島城ヲ相守リ、忠信ヲ勵ス由通達スレハ、超倫ノ勇神妙ニ思召シ、コレニ依テ感賞トシテ食邑ヲ增加ヘラレ玉フ、其御書云、

信州本意之間、十郎分出置之候、全可レ有二知行一者也、仍如レ件、

卯月十九日(天正十)
芋川越前守(正元)殿

景勝

十郎分

○正元ノ、織田信長ノ兵ト眞木島城ニ戰フコト、三月十一日武田勝賴滅亡ノ條ニ、森長可等ト戰フコト、四月五日ノ條ニ見ユ、

天正十年四月十九日

〔附錄〕

〔上杉家古文書〕

返々、桃井所よりの書中、爲御披見差越候、(直江)與六へさしこし候、(芋川正元)いも川もせいし(誓紙)ヲハ成し、昨日さしこし申候、

一筆申候、仍而今度信州有之いも川、此度當方へ可成忠功由申候、證人ふと相渡由申候條、深々與自境目可動由雖申越候、人體衆にふ〳〵よて、もとをらす(はかとらすカ)、ゆ、もく〳〵よて口惜迄候、やうて〳〵上より證人可取由、沙汰候間、其内ニと申こし候へ共、手前無人數故、延引口惜次第候、桃井宮内少輔ニ付而度々申越候、此上いろん成し可然候や、隨而工夫一途御意見待入候、以上、

正元景勝ニ屬ス

桃井宮内少輔

上條宜順ヲ信濃ニ派遣ス

(宜順)上條殿參

〔狩野文書〕

返々此度上條殿さのゝさしこし候、其上普請なとも早々出來之さめよ可然候、以上、

信州境之衆、餘りニのひ〳〵のやうよ候條、早々隙一方つゝもゐけへきさめ、上條殿可越由候間、外樣衆(芋川正元)いも川所へ、書中差越度候、此度其元爲仕置上條殿さしこし候間、

(景勝)實城

其筋案内を取可然樣ニ可相稼由、書中其元ニ而認さしこそへく候、以上、

景勝

(狩野新介)可新

○右文書二通、年次詳ナラズ、姑ク茲ニ附收ス、

二十三日、辛亥、越中魚津城危シ、是日、守將山本寺景長等、連署シテ直江兼續ニ決死ヲ告ゲ、コレヲ景勝ニ披露センコトヲ請フ、

〔上杉年譜〕二十六　天正十年四月廿三日、越中魚津籠城ノ將士ヨリ、書札ヲ以テ言上ス、當月五日・十一日ノ御書、昨日夜陰ニ及ヒ、松倉ヨリ相達シ、拜見仕畢ンヌ、當地ノ儀、最前言上ノ通リ、敵兵稻麻竹葦ノ如ク取詰メ、城壁マテ責寄ル、日々夜々四十餘日セムルト雖モ、城兵義節ヲ琢磨シ、今日ニ至ルマテ屈伏ノ氣色ニ非ス、シカレトモ兵粮甚乏ク、其上御出馬モ遲引シ玉フ故、城兵次第ニ神疲勞ス、助救シ玉ハスンハ、危急存亡此時ニアラン、此故ニ各樋口(直江)與六マテ連署ヲ呈ス、其書云、

當月五日・同十一日之御書兩通、昨夜亥刻自松倉到來、謹而奉拜見候、仍當地之儀、最前如申上候、壁際迄取詰、晝夜及四十日、雖相攻申候、到今日迄相拘申候、此上之儀者各滅亡與存定候、此由可然樣御披露奉賴候、恐惶謹言、

敵城壁ニ逼ル

防戰四十日

天正十年四月二十三日

（天正十）卯月廿三日

中條越前守　景泰
竹俣三河守　慶綱
吉江喜四郎　信景
寺島六藏　長資
蓼沼掃部助　泰重
藤丸新助　勝俊
龜田小三郎　長乘
若林九郎左衞門　家長
石口采女正　廣宗
安部右衞門　政吉
吉江常陸入道　宗信
三（山）本寺松藏　景長
若林家長
石口廣宗
安部政吉
吉江宗信
山本寺景長

（直江兼續）樋口與六殿

○魚津城防守ノコト、三月十一日ノ條ニ、景勝、越中ニ入リ、天神山ニ陣スルコト、五月十タシムルコト、四月十三日ノ條ニ、景勝コレヲ激勵シテ、自身ノ赴援ヲ俟五日ノ條ニ、魚津落城ノコト、六月三日ノ條ニ見ユ、

二十四日、（壬子）、景勝、佐渡潟上城主本間秀高ニ誓書ヲ送ル、尋デ、久知城主本間時泰ニ亦コレヲ送ル、

天正十年四月二十四日

天正十年四月二十四日

〔歴代古案〕○六羽前

敬白起請文

右意趣者

一越・佐如何様ニ變化候共、對ニ潟上・浮沈共末世末代可ニ爲一繕事、

一自ニ上方(織田信長)申來子細、無ニ表裏一、可ニ令一内通ニ候、又、上方へ和談候共、於ニ爲一一味者、潟上へ爲ニ知、可ニ致一其扱ニ候事、

一於ニ佐州之内一、鉾楯候共、潟上之寄手、惡方ヨリ嘱等賴候共、潟上心腹不ニ相應一之儀、萬不ニ可一加ニ異見一事、

此旨於ニ背者

上ニ者梵天・帝尺(釋)・四大天王、下ニ者堅牢地神、摠而日本六十餘州大小神祇・日光・月光、殊ニ者當國鎮守、關山三所權現・藏王權現・愛宕大權現・飯綱大明神・春日大明神・八幡大菩薩・天滿天神之可ニ蒙一御罰一者也、仍起請如ニ件、

天正十年

四月廿四日　景勝

本間歸本齋(秀高)

秀高ハ織田氏ヨリノ申來ヲ景勝ハ織田氏ト和談ノ時互ニ通知スルコト

〔木村正辭氏所藏文書〕○京東

敬白起請文○牛王

右意趣者

一越・佐如何様ニ變化候共、對ニ久知一、浮沈共末世末代可ニ爲一一統事、

一自ニ上方一申來子細、無ニ表裏一、可ニ令一内通ニ候、又、上方へ令ニ和與一候共、於ニ爲一一味者、久知へ及ニ注進一、可ニ及一其扱事、

一於ニ佐州之内一、鉾楯候共、久知之段(從カ)寄手惡方扱等賴候共、久知不ニ相應一之儀候者、萬不ニ可一加ニ異見一事、

此旨於ニ僞者、

上ニ者梵天・帝尺・四大天王、下ニ者堅牢地神、惣而日本六十餘州之大小神祇・日光・月光・愛宕大權現・飯綱大明神・殊當國鎮守・關山三所權現・藏王權現・彌彦・二田大井(サカ)春日大明神・八幡大菩薩・天滿天神之可ニ蒙一御罰一者也、仍起請如ニ件、

天正十年

四月廿六日　景勝(花押)(血判アリ)

本間下總守(時泰)殿

天正十年四月二十四日

〔上杉年譜〕二十六　天正十年四月廿四日、佐州潟上城主本間歸本齋ニ盟誓ノ御書ヲ玉フ、歸本齋ハ對馬守高秀（秀高）ト號シ、越府ニ志ヲ通シケレハ、公モ彼貞心ヲ感シ思召シ、一方ノ軍備ニ成ヘキト思惟シ玉フ、然レハ當國佐州イカヤウノ世變出來ストモ、潟上ニ對シ浮沈トモニ見除有ヘカラス、上方織田信長ヨリ申シ來ル軍議コレアルトモ、必表裏ナク內通アルヘシ、信長ト和談ノ事此アルトモ、元ヨリ佐州一味タルノ間、是又告報セラルヘシ、佐州ノ內鉾楯ノ事出來ストモ、潟上勝手惡キ異見ハ越府ニ於テ加フマシキ由仰下サル、其御書云、○前掲ニ付キ略ス、

〔參考〕

〔潟上彌太郎由緒并上杉家陪臣潟上代々之事〕

系圖

本間喜本齋秀高　當國ニ而卒ス、湖鏡庵ニ葬

代々家老本間左京

潟上彌太郎秀康（季直）　此代に上杉幕下と成て、米澤へ引越、其時千石を賜、當國退去の時、本間の二字并城跡山林竹木田地數ケ所家老左京に與ふ、秀康米澤に馴住して、近在に莫大の新田を起す、是より上杉家に於て、潟上を忠節の家とす、

忠節之家

同勘ケ由

村々地頭領分之事

潟上

本間左京

〔佐渡風土記〕　村々地頭領分之事

潟上喜本齋秀高　居城潟上

高七百六十九石今石高ニ直シ斗レハ五千百九十三石九斗五升三合　本間左京○家老

是も景勝ニ一味有て、澤根同前子孫今ニ彼家ヨこれあり、

澤根

領分八ケ所

潟上　正明寺　田野澤　長畝　野浦　月布施　住吉　谷塚

本間加賀守幕下（下總守）

本間孫三郎秀祿（源イ）（秋イ）　高不レ知同斷三千九百二石九斗一升二合五夕　本間右衞門左近（家老）　土屋左近　吉住住居、久知幕下

領分

吉住　鷲崎之內　白瀨　椿之內　北五十里之內　坊ケ浦　馬首　松ケ崎　北浦　見立　廿二貫（間イ）之內　黑姬　舟代　蟲崎

本間加賀守泰房（下總守時泰）（亮イ）　高不レ知同斷九千三百五十石壹斗五升八合　居城城之腰

城之腰

領分十九ヶ所

高崎　椎泊　兩尾　下久知　久知河内　城之腰　蛇　川崎　羽二生　大川

水津　片野尾　立間　多田　强清水　河内　丸山　松ヶ崎　赤玉

〔附錄〕

〔木村正辭氏所藏文書〕〇東京

輝虎本間下野守ノ物ヲ贈ルニ答謝ス

芳書殊更太刀一腰幷面一枚給候、快然之至候、猶、河田豐前守(長親)可申送候、恐々謹言、

七月廿日　輝虎(花押)

本間下野守殿〇佐渡久知城主カ、年次詳ナラズ、姑ク茲ニ附收ス、

二十六日、甲寅、景勝、秋山盛能ヲシテ、越中境城ヲ守ラシメ、且ツ、同國ノ動靜ヲ探報セシム、

〔上杉年譜〕二十六　天正十年四月廿六日、秋山伊賀守(盛能)ニ御書ヲ以テ仰下サル、先日堺ヘ引越ケル砌、吉田孫左衞門同前ニ、城ノ用心等申付ヘキ旨仰遣サルヽ處ニ、早々人數召シツレ打立ノ由、其聞ヘアリ、尤喜悅ニ思召ル、越中表ノ樣子細々注進アルヘシ、其元地衆ノ證人請取、疾實城ニ差置、堅固ニ勤番申シ付ヘキ由、嚴命アリ、其御書曰、先日者堺江(越中)打越、彼城用心、吉田者左衞門(源左衞門)共同前可申付由申越候處、早々人數召連打立由喜悅候、押詰人數可差越候條、其內用心堅可申付事肝要候、偖又、越中表之樣子細々注進待入候、其元地衆之證人取之置、實城堅固番可申付候、猶萬吉重而謹言、

地衆ノ證人ヲ徵セシム

四月廿六日(天正十)　景勝

秋山伊賀(盛能)守殿

二十八日、丙辰、景勝、信濃岩井昌能ニ命ジ、芋川正元ト共ニ、仁科方面ヲ警備セシメ、尋デ、西方房家ヲシテ同方面ノ往來ヲ禁ゼシム、

〔上杉年譜〕二十六　天正十年四月廿八日、岩井備中守ニ御書ヲ下サル、先達テ丸田掃部助俊次ヲ以テ仰付ラルヽ如ク、其方事ハ虛空藏山(信濃)ニ相移ルヘシ、然リトイヘトモ、仁科(信濃)表調儀ニ及ヒナハ、一變ニ手裏ニ入ルヘキ段、芋川越前守所ヨリ申遣ス條、早速眞木島ヘ相移リ、越前守ト相談シ、仁科表ニ行ヲ廻ラスヘキ旨公命アリ、其御書云、先達以丸田掃部助(俊次)、虛空藏山江可被移之由、雖申遣候、仁科表及調儀候者、可爲一變候、爲其重而申越候、謹言、

丸田俊次

仁科ヲ略スレバ形勢變ズベシ

卯月廿八日(天正十)　岩井備中守(昌能)殿

景勝

房家景勝ニ酒樽ヲ贈ル

房家兵ヲ仁科方面ニ出ス

〔歴代古案〕六 ○羽前

芳札披見仍、上様(景勝)御樽被差上、則令披露候、自分へも送給祝著申候、次、仁科筋人數被遣由ニ候、吉左右候ハヽ、重而御注進待入候、將又、先達而以書中申入候、其元ゟ敵地へ之往復、不通ニ可被相留由、堅御諚候間、左様御心得尤候、恐々謹言、

追而、青梅給候、賞翫申候、以上、

(天正十)卯月廿九日　　直江

(房家)西方二郎右衛門殿　　兼續

武田氏滅亡ニ付當國ノ爲メニ心ヲ勞スル勿レ

五月小 戊午朔

一日、戊午、景勝、織田信長ノ軍ト戰ハント、シ、使ヲ常陸佐竹義重ニ遣シテ舊交ヲ溫メ、且ツ、抱負ヲ披瀝シ、越後一國ヲ以テ、六十餘州ニ對シ、以テ死生ヲ決スルハ、無上ノ名譽ト爲ス旨ヲ陳ブ、

〔佐竹文書〕一

遙久絶音問、本意之外候、併萬方取籠故、乍存打過候、全不可被疎遠候、仍、甲州之儀、無是非次第候、依之當方可無御心元之條申述候、上口信州表仕置手堅申付、諸圖段々ト

關東ノ形勢如何

會津ト入魂

好時代ニ生レ武士トシテ一戰滅亡愧ル所ナシ若シ勝タバ日域無雙ノ英雄死生ノ面目タリ

賴朝以來名譽ノ貴家モ同篇

置條、於時宜者可御心安候、次、其表模樣曾不相聞候、東八州之儀、勿論無其唱條、令承知度候、將亦、會津之儀、爲先代首尾不相替、此節入魂奇特千萬候、就中景勝好時代出生、携弓箭、六拾餘州以越後一國相支、遂一戰可令滅亡事、死後之思出、景勝幅ニ者甚不相應候歟、若又、出萬死於令一生者、日域無雙之可爲英雄歟、死生之面目歡悅、天下之譽、人々其羨可爲巨多歟、兼亦、常州之儀、賴朝(源)已來承傳子細、今以可爲御同篇候哉、猶、彼僧可爲演說候、恐々謹言、

(天正十)五月朔日　　景勝

佐竹次郎(義重)殿

佐竹氏武田氏ト通謀ス

〔常陸誌料〕佐竹氏譜

天正十年五月朔日、上杉景勝、使僧至、遣書云、請戮力拒信長(織田)、以其嘗與勝賴通謀也、佐竹文書、

二日、己未、景勝、越中ニ出陣セントシテ、越後本誓寺ノ僧超賢ニ命ジ、僧俗ヲ召集シテ、織田氏ノ兵ヲ大田切ニ防ガシム、

〔本誓寺文書〕○越後

今般越中表江不斗令出馬之條、分國中之諸坊主、被駈集、急度走廻肝要候也、

天正十年五月二日　　(景勝)(朱印)

本誓寺

〔本誓寺記〕　天正十年四月、織田信長ハ、武田勝頼を攻亡し、駿河國ヶ御當家様之（德川）御領國ニ相成、飛驒・信濃・甲斐國等ハ、信長領分ニ成、信州海津之城ニハ、森勝藏（長可）被差置、同人を大將として、大軍越後へ攻入由之風聞ニ付、景勝ハ、信州境大田切之城迄出陣有之候處、信長勢柴田勝家を將帥として、大軍景勝持城越中魚津之城を取卷攻立候段、大田切江注進有之候ニ付、景勝ニハ急き春日山江歸城いさされ、超賢を被招、予ハ越中表之爲後詰致出馬候間、大田切之城を預り、信長勢を可防手段ニ事缺き候所、貴坊ふらてハ無之候間、國中之諸寺院、并七騎之面々、其外門徒等を引具し、將師ニ相成、大田切之城ニ楯籠、信長勢を防き可給旨御賴ニ付、早速領承いさし、敵勢一足も國内江ハ入立不申、乍去大勢を召集、大將ニ成、指揮いさし候ハハ、公之御朱印無之候而ハ難相成旨被申候所、景勝尤ふりとて、早速御朱印被下候、文言左ニ記、（○書、前掲ニ付キ略ス、）

武田氏滅亡後ノ織田德川氏ノ侵略

景勝大田切ニ出陣ス

七騎ノ面々

超賢信濃大田切城ヲ守ル

一國一寺ノ御朱印城主役

景勝超賢ニ武器ヲ給與ス

右御朱印ハ、一國ニ一寺之御朱印と申傳へ、本誓寺ふらてハ無之、法師武者被免、城主役ニ相成候事、他ニ無之候、尤大田切之城を持かさめ、敵勢壹人も國内へ不入立候、其節も景勝より超賢へ、鐵炮十挺、長柄十本、三ツ道具、幕等被下、隨身之僧俗江ハ、輕重によつて、品々被下物有之、

三日、庚申、本庄繁長・色部長眞、越後新發田城ヲ攻メテ、城外ヲ火ク、是日、景勝、之ヲ褒シ、且ツ、今後城兵ノ進出ヲ防ガシメ、自身ノ越中ニ出陣セントスルコトヲ告グ、

〔上杉年譜〕二十六　天正十年夏五月三日、本庄彌次郎ニ御書ヲ賜リ、今般新發田表ヘ相働キ、近邊ノ地悉ク踏破リ、利ヲ得ノ由、感悅ニ思召シ、彌彼表敵ノ自由ヲ押ヘ、味方周旋ノ擬尤疎略アルヘカラス、信州口ノ軍務手堅公命アレハ、必心肝ヲ勞スヘカラス、去ル三月中旬、越中富山事、先忠ヲ復スルノ處ニ、越前柴田修理亮（勝家）打出テ、彼地取詰ノ節、萬方手塞リ後詰ニ及ハサル事、今以テ無念ノ至リナリ、然ラハ富山地ヲ退キ、五箇山地ニ取除キケルニ、其後柴田、魚津・松倉表ヘ相働キ張陣ノ由相聞フ、信州口ノ軍策心元ナキ事コレナキ間、近日無二無三御出馬有テ、北國弓箭ノ是非ヲ付ラルヘキト定ラル、委曲外山縫殿助（縫殿助）見聞ノ通リ才覺有ヘシ、其御書云、

使者外山縫殿助

態以外山（縫殿助）申屆候、今般新發田表被相働、領中悉墟被成置之由、感悅之至候、彌、彼表之義（儀）不致頻（這）出之樣擬任入候、將又、信州口仕置手堅申付候條、可心易候、次三月中旬越中富山復先忠候之處、越前之柴田（勝家）打出、彼地取詰候節、萬方手塞故不及後詰、于今無念此事候、然者富山地令退、五箇山地江取除候、其以來、柴田、魚津・松倉表相働、令張陣、

富山城歸屬セルニ柴田勝家

天正十年五月三日

ノ爲ニ奪取セラレシヲ遺憾トス北國弓箭ノ是非ヲ決スベシ

候、於信州口無心元儀無之之間、近日無二無三出馬、北國弓箭之是非可付相定打立候、委曲外山見聞之旨可令才覺候、吉事重而可申候、謹言、

（天正十）五月三日　景勝

本庄彌次郎（繁長）殿

同日、色部修理亮ニモ御書ヲ下サルヽハ、今度本庄彌次郎同心有テ、新發田表ニ相働キ、敵地近邊摧ノ由、感悅ニ思召ル、彌以テ本庄入魂有テ、逆徒押詰ル擬怠ルヘカラス、誠ニ年來ノ貞心淺カラス、偖又、信州上口ノ儀、外山縫殿助演說有ヘキ旨仰下サル、其御書云、

今度本庄有同心、新發田表被相働、彼領中悉成墟之由感悅之至候、彌、本庄有入魂、新發田被押詰擬任入候、誠年來之忠信不淺次第候、偖又、信州上口之儀、具外山可令才覺候、謹言、

五月三日　景勝

色部修理（長真）大夫殿

〔參考〕

〔北越軍記〕二

○上略、織田勢、越後ヘ亂入ヲ謀ルコト、景勝ニ對シ、防禦ノ手配ヲナスコトニカヽル、扨又、新發田・井地峯・池端・新潟・

新發田押ヘノ諸將

（沼垂）乘足ノ敵城ヲ押ヘノタメ、阿（揚北）雅北二郡ノ内、神（蒲）原郡ノ者共ニハ、篠岡ノ酒井新左衞門尉・下條采女・杉（水）原左近・安田ノ城兵、瀨波衆ニハ、村上ノ本城越前守（庄）、色部修理正（大夫）・相（鮎）川治部少輔・黑川左馬助・竹股（俣）三河守ガ留主居ノ者共、其外築地薩摩守等ヲ指添ラル、此外古志郡（蒲原）ニテハ、護摩堂ノ宮島三河守、天神山ノ佐藤左衞門尉、頸（蒲原）城郡ニテハ、雷ノ丸田周防守、是等ノ人々ハ、蒲（新發田）原郡ニ近ケレバ、面々ノ居城々々ニ指置レ、又ハ留主居ヲ丈夫ニ殘シ置、御供ヲ承ルモ多カリケリ、

九日、丙寅、越中溫井景隆・江口式部丞等、將ニ能登ニ攻メ入ラントス、仍リテ、是日、景勝、各、其所領地ヲ安堵セシメ、且ツ、戰勝ノ日、景隆ヲ賞センコトヲ約ス、

〔上杉年譜〕二十六　天正十年五月九日、能州七尾城主畠山修理大夫義則カ八臣ノ内溫井備中守ハ、兼テ越府ニ志ヲ通シケル所ニ、今度織田信長ニ攻付ラレ、闔國一變ニ騷動ス、コレニ依テ備中守ヨリ、竊ニ越府ニ内通シケルハ、此戰陣ニ付、能州ニ亂入シ玉ハヽ、我一命ヲ輕ンシ、忠功ヲ勵スヘキ旨申上ルニ付、御書ヲ玉フ、其御書云、

今度到于能州亂入、無二輕一命可被勵勳功之由、感悅不淺次第候間、本領之儀者勿論、別而一功之圖於有之者、重賞可令褒美者也、仍如件、

天正十年

天正十年五月九日

五月九日　　景勝

溫井備中守（景隆）殿

〔江口文書〕○前羽

今度至能州亂入、無二無三、輕一命、可有忠信之由、感悅候、然間、本領之儀、如先規不可有相違者也、仍如件、

天正十年　　景勝（花押）

五月九日

江口式部丞殿

〔竹田久三郎氏所藏文書〕○前羽

今般能州へ亂入、無二輕一命可有忠信之由、感悅候、因茲本領如先規不可有違儀者也、仍如件、

天正十年

五月九日　　景勝（花押）

平加賀守殿

十五日、（壬申）景勝、越中天神山ニ陣シテ織田氏ノ兵ト戰フ、是日、戰況ヲ越後三條城ノ守將富所定重ニ報ズ、

〔上杉年譜〕二十六　天正十年五月上旬、越中魚津城ヲ信長ノ軍士相攻メ、急難ニ及ノ由注進ニ依テ、公御出馬ナサレ、同十五日天神山ニ著陣シ玉フ、敵兵御出張ト聞ヨリ、人數出サス、遠ク陣ヲ張テ兵士ヲ出シ戰フ色モナシ、今日御陣中ヨリ、富所伯耆守ニ御書ヲ下サレ、天神山ニ著陣シ玉ヒ、御一戰ヲ遂ラルヘキ所ニ、敵士城壘ヲ構ヘ、出テ接戰スヘキ色ナシ、斯ノ如クノ體ナラハ、本意ニ屬スヘキ事案ノ内タルヘシ、何ソ兵力ヲ費サンヤ、其表油斷ナク用心嚴重ニ沙汰スヘキ旨仰下サル、其御書云、

態申遣候、仍、此表出馬、號天神山（越中）地押付候、無二可遂一戰之儀、樣々帶引候得共、構陣地不取出候、敵取出候者不延歩行可討取候、其上彌引籠候、此上以一擬可屬本意事案之内候、可心安候、偖又、其表無異儀由肝心候、萬端之儀無油斷可申付事專用（要）候、謹言、

（天正十）五月十五日　　景勝

富所伯耆（定重）守殿

〔景勝一代略記〕越後二三ヶ年の亂に、上方信長諸國發向ニ付、御當方の御分國、能登・加賀・越中其々に被指置降參之侍衆皆越後へ牢人也、河田豐前（長親）死去ニ付、金山・大津（魚津下同ジ）

織田軍ノ戰法

對陣二十日

兩所番手ニ御持被ㇾ成、然處ニ信長ゟ大軍ニて推寄、大津七重八重ニまわ責由聞へ、御出馬被ㇾ成、番手之者共引取へき由被ㇾ仰、御出馬有、大津・金山の間天神山へ上り、御陣取也、明日御一戰可ㇾ被ㇾ成と被ㇾ仰、處、其夜中ニ此方へ向、悉陣城を構、ゝりをほり、筑(築)地つき、冊木(柵)ふる、やくら迄無ㇾ左右ㇾかゝるへき樣なし、廿日計御對陣也、〇下文ハ、六月三日ノ條ニツヾク、

〔村田清左衞門覺書〕上杉古文書所收

宗心樣御代之御事

春日山城進發

天正十年四月廿日、春日山御立、越中天神山之御陣、

〔參考〕

〔北越軍記〕六上　天正十年壬午、景勝廿八歳、四月、信長ヨリ、柴田勝家・佐々內藏助成政・前田又左衞門尉利家・佐久間玄蕃允盛政・德山五兵衞尉・柴田伊賀守勝豐一萬五千ニテ越中ヘ打入候、景勝方ヨリ、魚津城ニハ、寺島六藏・龜田小三郎(長乘)・若林九郎左衞門(家長)・沼掃部(脫カ)其外數人大將ニテ籠置候、魚津城ニハ川田豐前守(泰重)長親(故人)・安部右衞門尉(政吉)・中條越前守景資(泰)・竹俣參河守朝綱(慶)・山本寺勝藏(松)孝長(景)・吉江喜四郎(信景)・石口采女正實秀(廣宗)ヲ籠置候、信長衆魚津城ヲ取卷攻申候、折節景勝ハ關山ヘ出馬候テ、大田切城ヘ入、信濃境ニテ、信長甲州ヲ立、信濃ヘ被ㇾ打入ㇾ候ヲ待居ル所ヘ、越中表ノ事ヲ被ㇾ聞、景勝ハ早々春日山ヘ歸城、四月廿日ニ春日山城ヲ立、越中魚津城ヘ後詰有、天神山大岩寺ニ馬ヲ被ㇾ立、信長衆ト對陣ナリ、其勢纔ニ五千ナリ、謙信ヨリ相傳ノ紺地日ノ丸ノ旗ト、毗ノ字ノ旗打立テ、成願寺川ヲ阻テ、日々セリ合有リ、謙信ノ弓矢ノ威光ノコリ、備色見事ナリ、日々ノセリ合ニ、景勝方十度ニ七八度勝ヲ取ニ付、柴田修理亮勝家ハ功者ニテ、景勝侮ニクシト考、摠手ノ前ニ塹ヲ堀、土居ヲ築、用心專ナリ、前田佐々ハ、小敵ニ恐、事々敷用心ナリト笑候由、勝家ハ、景勝五千ナレ𪜈、謙信ノ武威殘ル故ヒ、侮ニクシ、上杉方ヨリ取懸候相色ニ隨テ可ㇾ戰、此方ヨリ不ㇾ可ㇾ取懸ㇾトテ、人數ヲ不ㇾ出、次第ニ暑天ニ成ニ付、信長方大將分モ士共モ四百騎、雜兵二千計ニテ、上杉陣所ノ下成願寺川ヘ馬ヲ入、足ヲ冷シ、乘マワル、是ハ景勝ヲ侮タル故ナリ、柴田勝家ハ、井樓ニ上リテ見物スル、如ㇾ案、景勝方ヨリ蓼沼日向守・落合清右衞門・三股(俣)九兵衞・中村但馬守以下悉甲三十二騎、轡ヲ竝テ木戸ヲ開懸リ候、アワヤト見ル所ニ、眞黑ニ乘ツレテ、信長衆ノ眞中ヘ乘込、三騎切テ墜シ、雜人十五六人馬ニテ蹴コロバスルヲ見テ、信長方大ニ遽騷デ崩逃ル、流石ノ佐々內藏助成政モ、三階菅笠ノ馬印ヲヒキツリテ逃ル、前田利家ハ味方ノ友道具ニテ、馬ノ太腹ヲ突セ、馬ヨリ駻落シテ漸ニ逃ル、佐久間玄蕃允盛政ハ馬ヨリ下立、片鎌ノ鑓取テ返シ合候ヲ、島津月下齋ガ子左京進、横馬ニテ蹴倒候ヲ、拜鄕治太夫ト申家人

天神山大岩寺ニ陣ス

景勝ノ陣容

柴田勝家ノ策戰

成願寺川ノ戰

前田利家・佐久間盛政危急

切拂テ玄蕃ヲ引除申候、其後ハ、景勝衆五騎十騎ニテ、信長方土手涯迄働候ヘ共、信長衆ハ出合不申候、彌柵土居四重迄架テ、城ノコトクニ致候、是ヨリ取懸レハ城攻ノコトク、殊ニ一萬五千ノ大敵、味方ハ五千ナリ、可攻様ナシ、信長方ヨリハ一人モ不出合、景勝モ無了簡月日ヲ被送候内ニ、五月中旬ヨリ魚津城中兵粮盡テ上下飢渇ス、

魚津城中糧食盡ク

〔北越家書〕　天正十年壬午三月、甲陽武田勝頼滅亡、織田信長此競ヲ以テ春日山ヲ相謀ンカ爲、森勝藏長可ニ川中島ヲ授ケ、越後口ノ魁首ヲ命セラル、柴田佐々・佐久間ニ下知シテ越中表ノ成功ヲ急シム、此砌魚津城ニハ城代吉江織部正定俊・同喜四郎・同姓中務丞定仲ヲ始、岩井備中守政房・竹俣三河守朝綱・山本寺松藏孝長（後伊豫守ト號ス）五百川縫殿助清國・鐵上野助安朝・蓼沼掃部助・尻高左京亮・龜田小三郎・鈴木藤丸・蕞爾神右衞門・若林九郎左衞門・寺林六藏以下三千餘楯籠テ在シカ、越府ヘ飛使ヲ馳テ後卷ヲ乞ニ付テ、四月廿日景勝主三千餘騎ヲ卒シ、名達（立）・浦本ヨリ鬼伏ヘ掛リ、親不知・子不知ノ切所ヲ妻手ニナシテ、宮崎ノ上ノ道筋ヲ傳ヒ、越中ヘ打入、同廿三日魚津ノ近邊吉田ニ著馬、天神山ヘ取登テ、先隊ハ成願寺川ヲ前ニ當、大岩寺ノ邊迄屯ヲナシ、上方勢ト對陣、敵モ向城ヲ堅固ニ架テ、卒忽ニ戰ヲ好マス、守テ味方ヲ蒸セント欲ス、此ニ於テ度々迫合アリ、五月廿五日景勝主進テ戰ヲ懸ラレ、侍大將齋藤下野守朝信、輕卒

二十三日吉田ニ著馬ス

魚津城ノ守將

ノ隊長本郷金七郎等討死ストイヘ共、敵方ノ武主蒲田主税介・伊丹右京亮・壺岡・中村・倉光ナト云覺ノ者ヲ始、七百五十三級ノ首ヲ捕テ、軍ヲ天神山ヘ收ラル、（○人名等ニ誤アリ、）

越中諸氏蜂起

〔前田金澤家譜〕　（天正十）二月、織田公甲斐ノ國主武田勝頼ヲ伐ツ、三月越中訛言ス、甲ヲ伐ツノ師大ニ敗スト、土寇競ヒ起リ、所在碁峙ス、上杉景勝兵ヲ出シ之ヲ助ケ、其將尻高左京・鐵孫右衞門等ヲノ魚津城ニ據ラシム、利家柴田勝家佐々成政・佐久間盛政等ト土寇ヲ平ラケ、五月兵ヲ進メテ魚津城ヲ圍ム、城兵急ヲ春日山ニ告ク、上杉景勝師ヲ率ヒテ來リ援ケ、天神山ニ次ス、利家諸將ト數騎ヲ以ヒ、出テ密ニ敵營ヲ覘フ、越後ノ兵士之ヲ覺リ、衆ヲ出シテ來リ薄ル、利家叱咤ス、敵敢テ前マス、諸將天神山ヲ襲ハント議ス、成政・盛政先鋒ヲ爭フ、利家曰ク、佐々氏既ニ此ノ國ニ主タリ、宜ク先鋒タルヘシ、然レモ佐久間氏モ亦人ノ後タル可カラサレハ、當ニ左右ニ陣ヲ張テ齊ク進ムヘシト、勝家以下之ヲ可トシ、日ヲ刻シテ天神山ヲ攻ム、

高坂彈正ノ批判

大將ノ强弱死後ニ知ル

〔甲陽軍鑑〕二十　高坂彈正存生之時申さるゝまハ、國持大將の弓矢つよ成弱ハ、死後まもなくとあるつるが、謙信の弓矢强威光ハ、景勝當五月の手柄ふる武勇也、子細は、能登の内に景勝のゝへの城あり、甲州勝頼公三月十一日より御切腹ありてより、信長、越後景勝を聽可有退治と有故、柴田修理を大將にして、前田又左衞門・佐々内藏助・

景勝ノ武威

佐久間玄蕃・德山五兵衞・柴田伊賀ふとゝ云衆を、都合四萬五千の積にて、加賀・越中・能登・越前拂て立て、景勝の抱の城をとりまく、景勝此年廿八歳より後詰なり、人數は五千にて出る、甲州勝頼切腹ありて、大身の北條家まで頭をかさむけ、奥州迄もむらをしと申、國を隔さは大身衆も、手を失ひ力を落さる體ふるに、景勝・越後・佐渡二ヶ國にても少も愁さる色なく、大事ハ喜平次我身よかゝるべたると思ひ、何樣一合戰と存つめ、七日路をゝりの處を後詰して、天神山大岩寺野に陣取らるゝ、其下に成願寺川として餘の大河よりもふく、中の川あり、是を柴田修理見て、信長より一の弓矢より功者故、

勝家持重ス

謙信の弓矢を能まり、摠軍へ觸をまハし、堀を不り土手を筑（築）まゝりある、前田又左衞門・佐々内藏助を始各申ハ、柴田修理何とてゝの樣より臆病なる事を申され候、喜平次人數ハ三千ふらでハ有まじく候とて謾、或時柴田修理下知を背き、景勝陣取の下、成願寺川へ遊き、五月の事なるより馬をひやし、馬をせめ、四百騎あまりつきて行候へど、雜兵二千餘よりてゝさつよかゝにて景勝を謾、柴田修理ハ功者故、西（井）樓より上りて是を見る、案のとく景勝衆只三十騎出て盡追散、二三騎切て落を、雜人ハ十四五人も馬よりて蹴ころゞす、さそゞれ内藏助なども笠のこゝとひをむきづりて逃る、土手ゝくハ大勢を切おとさるへきより、堀を堀、土手をにき候故大事なし、柴田修理、後各をよびゝの樣

織田方ノ失敗

より有べきと存候處より、土手をつき堀をほるとて柴田修理をゝしく仰らゝ候と、ゐん（怨）げん（言）申さるゝハ斷ふり、其時逃さる侍大將ハ前田又左衞門能登一國、佐久間玄蕃加賀、佐々内藏助越中、德山五兵衞柴田伊賀以下ふり、其後景勝衆五騎十騎よて土手ぎはまで度々働候、其時節神保殿家中より便て越中に罷在、此城を信長方よて委見申候、

〔越後古實聞書〕　景勝、越中ゟ御歸陣被成、御休足、又越中へ御出馬也、近江・若狹・能登・加賀四ヶ國の後詰より下りし者、□□□魚津の城遠卷きして有けると被爲聞て也、柴田よりハ、日夜に笹岡へ取懸、防戰隙なし、乍去上のほいち迄敵一人も通ぎ、夜廻り等迄油斷ふく仕ると御心元なく思召、鐵砲五十挺物主片桐内匠助被差添て篠岡へ被遣、越中へは五月廿日より御出馬也、魚津・松倉ゟ間天神山より御備へ、ちやうくわんじ片貝川を前よりゝてらる、此所より魚津へ上道一里有、物見を被遣て御見せあれハ、景勝公ゟ後卷を聞堀をほり、築地をつき、矢くらをゝけて待と申、夫ゟ四五日人馬を御休め被成、所より、前田又左衞門・佐々内藏助二頭よて、五百騎程雜兵三千餘り程川端より寄せける、〇下略

〔加賀藩國初遺文〕　生田四郎兵衞覺書

〇上略一、天正（十）九年、信長公越後國江働可申旨、利家樣與柴田へ被仰付、加賀・能州御人數

都合四萬騎に而御押候處に、小津之城（魚下同ジ）に、長尾喜平次者（山本）さんぼうじ（寺）・吉江織部・同喜四郎・鈴木・藤丸其外大將分拾人、五千のつもりに而持申處に、小津を取まき、毎日しよりにてせめ申候得共、殊之外鐵炮多く何も被打立申候、利家樣御仕寄、一度も追立られず、押詰〳〵堀切までしより申候、是御手柄之由申候、其後越後より長尾後卷に出申候、小津の近所天神山へ上り申處に、大將々々物見にのりつれ〳〵御出の處に、越後方より足輕出申候へば、何茂大將衆馬を被乘出候處、利家樣御馬の召ぶり、敵の足輕と入あひ〳〵馬召候、事外に御手柄と申候、其外長尾陣取あし〳〵に成、越後春日山に退申候、其跡に小津の城の者共、おしつめせめ殺申候事、〇中略

七月二日　生田四郎兵衛在判〇宛名略ス

〔越登賀三州志〕故墟考新川郡

天神山　布施保内、東尾崎村領也、此地加積郷小川ノ山入ニ在テ、片貝・布施兩河ノ間也、左右後ノ三方山窰堅固ノ地勢也、又、此邊深田多ク、海ノ方ハ平地也、自ニ魚津ニ一里東、古ヘ之ヲ荻城ト云事、泉達記ニ載ス、妄誕亡論、

天神山

天正十年五月、柴田勝家等上國ノ兵ヲ以テ、魚津城ヲ圍ムト聞キ、景勝這天神山マテ出張ト、織田軍記、太田日記等諸書ニ見ユ、愚按、甲陽軍鑑ニ、景勝我身ニカヽル大事ト思ヒ、一合戰ト、七日路許ノ處ヲ後詰メ、天神山大岩野ニ陣スト云者、這時也、土肥家記ニハ、此時後詰トノ五千許ノ人數ニテ、魚津ノ向ヒ、天神山ヘ取上リ、對陣、度々足輕迫合、大軍ニ向ヒ其働キ拔群トアリ、混目集此事ヲ八年庚辰ニ係ク、謬レリ、

景連雪辱ノ爲ニ死ヲ決シ後事ヲ家臣ニ託ス

十九日、丙子、長景連、景勝ニ請フテ海路能登ニ還リ、棚木ニ據ル、是日、決意ヲ家臣等ニ告ゲテ後事ヲ託ス、尋デ、前田利家ノ將長連龍ト戰ヒテ死ス、

〔加藩國初遺文〕

來札披閲、眞實以祝著候、今般渡海之義（儀下同ジ）、定入道無分別、可有覺悟候歟、右從（マヽ）一味故、正院之地退散比興之樣、於世上批判之由聞及候間、一度當國之地、一身ニ而も打越、遂切腹度願望故、以無人故、令渡海候、天下一統之御代、其身上越中さへ未落著之處、隔遠境、縱引卒大軍候共、不可成功事必然候、況愚老纔之以人數、投礫樣數百里之海路打越、不可遂本意事雖案內候、可散宿望、心中計ニて候、旨趣右申露候、抑、景連一身令切腹、家中之者共迄、身上可有安泰之旨、自何令滿足候、上方之義ハ不實候、先證多候間、幾も家來之者共、各以稼、已相果候樣ニ候ハ、愚入事ハ可得其意候、恐々謹言、

（天正十）五月十九日　景連（長）

太田小尉　太田小尉殿

河岸與一右衞門　河岸與一右門殿

小林平左衞門　小林平左衞門殿

〔長家譜〕　然處、能州之虛を伺、景勝家臣長與市入道景連（長氏庶流）並島倉吉藏・熊倉伊勢・劍見與十郎等、能州奥郡江亂入、棚木城江楯籠候付、奥郡爲平治、連龍魚津表を發、一手之勢を以、同（五）月廿二日棚木城江押詰、從高德公（前田利家）御檢使大井久兵衞被指添候處、城兵郭外江働出度々盡力戰、與市入道を初、島倉・劍見等悉遂戰死、落城、連龍家士高名死傷之者數多有之、高德公江右之趣、爲御注進以兩使、與一入道首並分捕之太刀、攻戰之始終委曲及言上處、御書兩通被成下、

尙々、其元手柄共無是非候、頸到來次第、其元之儀注進可仕候、尙以生捕之事、其國之者共助置申義有間敷候、自然、御尋之儀候得者、如何候條、一人も不殘早々爲率、可被懸御意候、

早々飛脚、殊御狀五通委細令拜見候、仍其表（棚木）去廿二日卯刻、彼持口押破、悉御討捕之由、併御苦勞故早速討果候事、大慶此時候、誠に無比類御仕合共無殘所候、則彼與一首、安土江爲持、右之通注進仕候（可脫カ）、就其生捕之者共數多有之由、一人茂無御成敗、此方へひろせ可給候、何も自是可申入候、恐々謹言、

五月廿三日　　前又左　利家　判

長九郎（連龍）左衞門殿　御返報

（○次ニ、五月廿四日付與一首到來云々ノ利家書狀アリ、略ス、）

〔參考〕

〔森田平治談話〕（○上杉家記所收）　五月二十一日、利家ノ將長連龍等來リ棚木城ヲ攻ム、我將景連之ニ死ス、是ヨリ前、連龍ノ臣小林某、景連ニ仕フ、連龍來リ攻ムルニ及テ、某乃チ連龍ニ復歸スルヲ請フ、景連義トシテ之ヲ許ス、軍敗ルニ及テ、景連首ヲ某ニ授ク、某乃チ其刀ヲ併セ、之ヲ連龍ニ獻ス、連龍又之ヲ利家ニ獻ス、其刀今前田侯爵家ニ存ス、棚木無銘ニ尺二寸太刀ト稱ス、

棚木太刀

二十三日、庚申、織田信長ノ將瀧川一益、上野ヨリ越後ニ迫ル、長尾伊賀守・栗林政頼等、コレヲ三國峠ニ防グ、

〔越登賀三州志〕　本月（五月）廿三日、瀧川一益、三國嶺（信濃・上野・越後三國分界ノ地、）ニ到リ、森長一（可）大田切越後ヨリ芋川城ヲ陷レ、（○下略）

瀧川儀太夫

〔北國太平記〕三　三國峠合戰并栗林肥前（政頼）守猿ケ京放火事　爰に瀧川左近將監一益か甥瀧川儀太夫と云フ者あり、柴田佐々等も兼て約し、武藏・上野兩國の勢一萬餘騎を引率し、三國峠より亂入せんと押寄る、此三國峠といへるハ、信濃・上野・越三（後脫カ）ケ國

清水城將長尾伊賀守　樺澤城將栗林政頼

の堺にて、尤嶮岨の切所なり、此所の請手として、志(清)水の城主長尾伊賀守、樺澤(澤)の城主栗林肥前守を大將として、高橋修理亮、松本左馬介以下向ひけるが、峠より此方ニ控へて陣しける、然る處、天正十年五月二十三日、瀧川儀太夫此所に押寄て、自ら采牌をとり、眞前に進んて攻登る、上杉方には長尾伊賀守先陣にて、栗林肥前守は二陣に堅く備へたり、元來上杉家の軍立諸家に勝つて烈しければ、先陣の長尾か勢思々の得道具を手々ニ提け、鑓の者共を押退けて、矢の一つをも射させず、一同に咄と喚て眞下りに切てかゝる、寄手敵をかさに受て、なしかは一たまりも怯ふべき、崩立て逃退く、瀧川が二陣の勢も、坂中なれは助ること叶がたく、俱に噇と崩れける、早雄の越後勢、勇み進んて追かけしかば、引返して討死するもあり、或ハ切所に行詰つて、あへなく敵に討るゝもあり、其外岸より深谷へ頽れ落て死する者共數をしらず、上道一里半程をひた逃に逃退ひて、猿京(上野)の城へぞ逃入ける、上杉方は小勢なれは、漸く十七八町追討にして、其より勢を引揚しかとも、崩れ立ちたる勢の曲として、跡より逃る味方を、敵の追ぞと心得て、後じ負じと逃ける間、加程迄長逃はしたりける、上杉方には、討取處の敵の首數二百餘級の首帳を以て、勝鯨波を執行ふ、世人今に言傳ふ、三國峠合戰とは是なりけり、去程に、栗林肥前守ハ、今般三國峠の合戰に、二陣を請取しゆへ、

伊賀守等織田勢ヲ撃退ス

三國峠合戰

思ふ儘に行働かさりし事を本意なく思ひ、一高名して大將の御感に預らんと巧みしかとも、織田方ハ多勢なれは、自然此跡へ敵兵寄來らんも知らざればとて、長尾伊賀守を三國峠に殘し置、加勢の松本左馬助、高橋修理亮等を我備ニ組合、胴勢となして、同き二十五日の夜、猿京に押寄たり、瀧川が勢は、思ひ寄ざることなるゆへ、上を下へと騒動し、松明よ太刀よ物具よとひしめひて、矢は搔負ながら弓を忘れ、甲を著る者は鎧を忘れ、鑓一筋には五人六人取付て、我よ人のよと爭ふ程に、後には扣き合、組合、踏合者も多かりけり、されとも物なれたる兵共鎧一縮して討て出んと進みける、を、瀧川下知して一人も討て出へからすと制して、用心堅固に控へたり、左によつて、栗林は猿京の在家を悉く放火し、城際迄燒詰て、手輕く勢を引取けり、織田勢是より彌恐れて、其後ハ終に三國峠へ働き出ず、猿京の城に引籠りてぞ居たりける、

政頼猿京ヲ襲フ

〔石川忠總留書〕坤　瀧川合戰

一天正十年ノ春、勝頼御切腹之節、信長公ヨリ關東御仕置トシテ瀧川左近將監被罷下、西上野箕輪ヘ移、仕置相濟、其後北條安藝(輔廣)守所エ、使者ヲ越、東上野ノ致仕置度候間、厩橋城御借被(貸カ)成候者、移リ申度候之由ニ候、北條返答ニ、尤ニ存候、然者御隔心ナキ爲メニ、某次男ニテ候於千連ヲ證人トシテ進ノ由ニ而、則箕輪ヘ被指遣、左近祝著被申、

信長關東仕置トシテ一益ヲ遣ス

一益箕輪ヲ仕置シテ後北條

輔廣ニ厩橋城借用ヲ申込ム
輔廣質ヲ入レ城ヲ渡ス
一益厩橋ニ能樂ヲ催フス

四月中旬ニ厩橋エ被ㇾ移、近國ノ大小名出仕申サレ候、五月上旬ニ、於ㇾ本城ㇾ能興行、其内玉ゝつらヲ左近殿仕舞被ㇾ致、小鼓ハ左近殿ノ嫡子於長殿、大鼓ハ岡田新八郎、後ニ太郎右衞門ト申候、左近殿次男於八殿、舞臺ニテ見物、北條モ被ㇾ參候付、拙者儀致ㇾ供見物仕候、又六月十一日ニ、厩橋長昌寺ニテ能興行可ㇾ有ㇾ之由ニ而、能組十二番書立、舞臺ヲ拵、瓶ヲ十二フセ、總構ヲ大竹ニテ二重ニ被ㇾ致候、ケ樣ノキヒ敷拵候、此時節大小名共ニ可ㇾ討ㇾ果ㇾ之計策ト、下々ニテ風說ヒシメキ候、〇略下

〔參考〕

三國街道
三俣二居
淺貝三ケ村

〔新編會津風土記〕百十二外編越後國魚沼郡之四

三俣村

三俣村枝村ハ木澤　二居村、淺貝村、此三ケ村ハ、共ニ深山中ニ住シ、界域ヲ分タス、境内廣漠ナレトモ田畝ナク、山間ニ稈蕎麥、蘿蔔ヲ種ウ、三國街道ニ住スル故、旅店ヲ設ケ、駄馬ヲ追ヒ生計ヲ資リ、三俣村ハ、小千谷陣屋ノ南ニ當リ、行程十八里、家數六十五軒、東西一町八間、南北六町、西ハ清津川ニ傍フ、〇略中湯澤村驛ヨリ二里此ニ繼ギ、此ヨリ二里十八町、二居村驛ニ繼グ、〇略中二居村ハ、三俣村ノ南二里十三町三十間ニアリ、家數三十二軒、東西四町、南北二町三十七間、〇略中三俣村ヨリ二里十八町此ニ繼ギ、此ヨリ二里八町、淺貝村驛ニ繼グ、〇略中淺貝村ハ、二居村ノ南二里六町十間餘ニアリ、家數五十軒、東西二十四間、南北三町、〇略中二居村驛ヨリ二里八町此ニ繼ギ、此ヨリ三里二十六町、公領上野國吾妻郡永井村驛ニ繼グ、〇略中

中峠
三國峠

中峠　三俣村ノ南一里十八町、三國街道ニアリ、登ルコト三十町餘、三阪山　淺見村ノ巳ノ方ニアリ、三國峠トテ村際ヨリ漸々ニ登ルコト一里八町四十間餘、上野國ヲ經テ江戸ニ出ル街道ナリ、頂ニ上州ノ赤城、信州ノ諏訪ト、本州彌彥三神ヲ祭レル社アリ、鳥居ノ中央上越ノ界ナリト云、

樺澤城

〔北越略風土記〕八魚沼郡古城跡　樺澤(澤)城　上田郷樺澤村山中ニ在り、城主栗林肥前守天正十年瀧川儀太夫〇略中三國峠より攻入を、栗林肥前守・長尾伊賀守逆討て大破ㇾ之、二十四日、辛巳、新發田重家ノ弟盛喜、景勝ニ降ル、景勝先ヅ之ニ越後沼垂・蒲原ノ地ヲ宛行ヒ、且ツ、重家滅後、其兄長敦ノ女ヲシテ新發田氏ヲ再興セシメ、盛喜ヲ其後見トナサンコトヲ約ス、

加治一跡ヲ與フルヲ約ス

〔歷代古案〕六〇羽前

今度、可ㇾ令ㇾ忠信之由、神妙之至候、然間、因幡(新發田重家)對治之上、加地一跡可ㇾ遣候、先其内沼垂・蒲原遣候、因幡切腹以後、尾張(長敦)守息女身付之者令ㇾ契約、名跡可ㇾ相立ㇾ候、然上惣領家中何分ニも、吾分可ㇾ任ㇾ異見ㇾ者也、仍如ㇾ件、

天正十年五月二十四日

天正十年　五月廿四日

新發田駿河守（盛喜）殿

系圖〔新發田系圖〕綱貞

- 長敦　尾張守、若名源二郎、天正七年病死、
- 重家　初五十公野源太ト云、因幡守、室ハ小田切三河守貞遠女、長敦家督、天正十五年生害、四十一歳、牌寺福勝寺、法名一世道家居士、
- 盛喜　駿河守、母ハ築地資豐女、天正十年、景勝公ヵ、重家退治之上、加地跡可レ與之、先其内賜二沼垂
  - 女子　新發田駿河守ニ、可レ有二契約一トノ女子、是成ルカ、然レトモ、其事ヲ遂ケスト見ユル、

盛喜ノ死ニ付キテノ説

蒲原郡之内、重家切腹以後、尾張守息女ニ身付之者令二契約一、命二名跡一、惣領家中可二異見一旨ナリ、天正十五年七月、甘糟近江守・山吉玄蕃手ニ、盛喜討捕、驗差上ル、依レ之、同月二十七日、甘糟・山吉ヘ感狀ヲ賜、盛喜法名悅翁、一説、天正十五年十月廿八日、新發田沒落之節、蓼沼藤七ニ命セラレ、園ヲ遁出ヘキ旨ナリ、卽宮本磯部又四郎ヲ以使者トシテ、園ヲ出シ、色部家ニ遁レ居ル、

〔上杉年譜〕二十六　天正十年五月廿四日、新發田因幡守重家カ弟ニ、同駿河守（盛喜）ト云者アリ、倩案シ回スニ、重家カ隱謀ハ全本意ニ非ス、臣トシテ主君ニ敵スルハ不義ノ罪遁ルヘカラス、今兄ノ所爲タリト雖モ、不義ニ與スルハ武門ノ瑕瑾タリ、特ニ重家カ軍士イカントシテ多勢ニ當ルヘケンヤ、於レ是重家ニ對シ、再三强テ異見ヲ加ルトイ

盛喜兄ヲ諫ム

ヘトモ、曾テ許容セス、此上ハ駿河守モ止事ヲ得スシテ、公ノ軍門ニ降リ、忠ヲ盡ントセス、味方ニ屬シナハ、重家御退治ノ上、駿河守ヲシテ加地ノ家ヲ繼シメ玉フヘシ、先時ノ忠賞トシテ、沼垂・蒲原ノ兩地ヲ充行ル、重家誅ニ伏シタル時ハ、尾張守ノ娘ニ、一族ヲ嫁娶セシメ、新發田ノ家ヲモ再興アルヘシト仰出サル、其御書云、〇書前掲ニ同ジキニ付キ略ス、

二十五日、壬午、景勝、蓼沼友重ニ、新發田平定ノ後、新潟代官ト爲スコトヲ約ス、

〔志賀槇太郎氏所藏文書〕〇前羽

（新發田）彼計策相調、因幡守於二御對治一者、新潟御代官之儀、不レ可レ有二別義一候、爲二後日一、一筆進之候、恐恐謹言、

天正十年　五月廿五日　直江　兼續（花押）

蓼沼藤七（友重）殿

〔歷代古案〕六〇羽前

景勝、諸關所ニ命ジテ、飛脚二人ニ、傳馬一疋ヅヽヲ給セシム、

彼飛脚二人、諸關傳馬一疋、無二相違一可二通送一也、仍如レ件、

天正十年五月二十五日

天正十年　五月廿五日　（景勝）（御朱印）

諸關所

二十七日、（甲申）織田信長ノ將森長可、景勝ノ越中ニ軍スルニ乘ジテ、信濃ヨリ越後ノ境ヲ侵ス、景勝、之ヲ聞キ、是日、軍ヲ越中ヨリ旋ス、

〔村田清左衞門覺書〕（上杉文書所收）

宗心樣御代之御事

天正十年四月廿日、春日山御立、越中天神山之御陣、五月廿七日御納馬、

長可毛利秀頼ト景勝越中出陣ノ不在ヲ窺フ

上條宜順長可等ヲ防グ

〔北越軍記〕六上　天正十年此春、信長ハ甲州武田勝頼ヲ亡シ、甲州・信州・上州迄打平、信濃ヲハ森庄藏長可ト毛利河内守秀頼ニ給ルユヘニ、森庄藏五千ニテ、景勝越中出馬ノ留守ヲ窺（中頸城郡）關山越ヲ越後ノ二本木ト云所迄燒働致候、府内ヨリ景勝妹聟上條民部少輔（宜順）義春、僅七百餘ニテ二本木ノヲサヘニ罷出候ヘ共、上方多勢ニ付可レ防樣無レ之、此旨越中ヘ早馬ニテ申遣シ、五月廿六日ノ夜、景勝ハ諸將ト評議シ、岩井（信能）源藏・庄瀨八左衞門ト云侍ニ、自筆ノ狀ヲ渡シ、魚津城中糧盡候、其上信長方搦手トシテ、信濃口ヨリ越後ノ府内ヘ取込候由ニ付、明日此地ヲ拂テ越後ヘ引取候間、魚津城内ノ物頭下

魚津城將ニ退軍ヲ通報シ越後ニ引揚ゲシム

大岩寺陣拂

長可關山二本木片貝ニ放火ス

天神山ノ留將ヲ定ム

下迄、寄手ヘ扱ヲカケ、城ヲ渡シ越後ヘ引取候ヘ、少モ武道ノ乙度ニ不レ可レ有レ之旨、直判ニテ城中ノ大將分ヘ狀ヲ遣シ、翌日廿七日ニ大岩寺ヲ陣拂シ、景勝ハ越後ヘ歸陣ニテ候、

〔景勝一代略記〕　一同年（天正十）三月、武田勝頼沒落ニ付、信州ヘ森勝三海津ヘ移リ仕置をする、大軍催し、越後ヘ御留守ヘ働へき由申來、其ことく關山・二本木・かた貝まて放火す、御留守よてハ有ニ動轉、此事聞ヘ、大津（魚津）御大軍にてまき□ふらす、金山番手衆須田相模・岩井備中・黑金上野・菅名・楠川・上野九兵衞其外の衆、天神山ヘ引取、同前ニ御納馬被レ成、

〔總見記〕二十三　○前文ハ、信濃ノ方面ノ形勢ニカヽル、又日又北國ノ諸將等ハ今春大臣（織田信長）家甲州表御出馬ノ節、越後ノ國主長尾景勝、其隙ヲ伺ヒ、越中ノ國人ヲ相語ラヒ、一揆ヲ起サセ、當國魚津ノ城ヲ相構ヘ、尻高左京進・黑金孫左衞門兩將ニ多勢ヲ屬テ、籠置カシム、是ニ依テ、彼表退治ノ爲ニ、柴田修理進勝家・佐久間玄蕃允盛政・佐々内藏助成政・前田又左衞門利家四將、數千ノ人數ヲ率シテ越中ヘ相働キ、進テ魚津ノ城ヲ取卷ク、當國ノ先方神保安藝守氏春・同清十郎・椎名孫六郎・右黑左近丞・菊池入道等相加リ、案内シテ、夜ヲ日ニ繼デ攻入ル間、城兵頻ニ越後ヘ告ゲ、援兵ヲ乞ニ依テ、景勝多勢ヲ率シ、春日山ノ居

信長勢天

城ヲ出馬シ、越中ニ亂入ス、黑部川ヲ打越ヘ、吉田ニ宿陣シテ、ソレヨリ進デ天神山ニ備ヲ堅ム、先立テ、長與一郎景連ト云者ニ、人數ヲ差添、能州ヘ渡海サセ、彼國ヲ掠取ラントス、寄手又此告ヲ聞テ、長九郎左衞門連龍ヲ還シ遣シ、彼敵ヲ防ガシム、連龍卽手勢ヲ將ヒ、魚津ヨリ能州ニ歸リ入テ、當國柳木城ニ於テ一戰ニ打勝、敵將景連ヲハ討捕テ、殘黨ヲ追拂ヒ、能州ヲ平治セシム、連龍一分ノ武功遠近ニ是ヲ褒ム、魚津ノ諸將是ヲ聞テ大ニ悅ビ、近日天神山ヘ押寄セ、景勝ヲ討取ラント相勇ム處ニ、森長一越後ヘ働キ、關山三本杉（二本木）ニ到ルノ由注進アル故ヲ以テ、長尾景勝大ニ驚キ、天神山ノ陣ヲ拂テ、人馬ヲ引揚ケ、速ニ越後ヘ引退ク、魚津ノ城兵力ヲ失ヒ、早々和議ヲナシテ、城ヲ渡シテ悉ク退散ス、（下文ハ、八日ノ條ニツヾク、）

〔三壺記〕（加賀藩史料一所收）　天正十年五月上旬之事成に、越後景勝者、越中一國を取治んと新川郡之侍共に內通し、芋川縫殿助・室高左京大夫・鐵孫左衞門など皆一味して景勝を引、三千八百餘騎魚津之城にたてこもる、佐々內藏助・神保安藝守方より信長公へ早飛脚を以注進之處に、越前勢に加賀・能登の城主等へ被仰入、早速追拂べしとの御事なり、柴田勝家に（中略）氷見（越中）のあを（阿尾）に菊池十六郎、木舟に石黑左近此人々指加り、神通川を打越、天神山へ押上り、魚津を目下之に見おろして備を立ければ、越後勢も手

神山ニ陣ス

越後勢退陣

追擊

わけして吉田の弓手妻手に備へを立、鐵炮打懸け、互に遠ぜめして有けるが、如何はしたりけん、越後勢大將を初て引返し、越後をさして引退く、加賀・越前の人數（中略）追討に首取程に貳百餘騎の首を打取、ひた追に追行くまゝ、長濱近所へ押詰てかへせもどせとよばはりければ、越後勢も込返してはつきくづし、つきくづしてはくり引に越後方へ引入、加賀・越前之人數も引取而、越中の侍衆も何茂引入ける、越後勢之俄に引入事は、信州川中島の森勝藏は越後喜平次景勝は春日山の城を打あけて越中へ發向すと聞より、其跡に越後を切取らんとて松代を打立て、善光寺より室飯・野尻・關山近所迄押よせ、所々に首塚つきて春日山へ取かくると取さたにて、春日山の城代山城守より越中へ飛脚を遣す、それゆへ引返し、景勝は森勝藏に對陣せんと人馬の息をもつがずして、荒井をさして押行、（中略）越後勢は又能州へ舟に押寄、石動山にたてこもるといへり、（下略）

二十九日、（丙戌）新發田重家、織田信長ト策應ス、蘆名盛隆、又、信長ニ款ヲ通ズ、是日、盛隆ノ將金上盛備、瀧川一益ニ、約ニ悖ラザル旨ヲ陳辯ス、

〔坂田文書〕（甲斐）

猶々、御使者越國被打越候、路次之儀、別而御一札之旨得其意、無相違樣申付候樣體、

天正十年五月二十九日

御使可有御口才候、以上、

一益ノ使者夏目新發田ニ至ル

内々從是可申達覺悟候之處、御懇札被懸御意候、畏入令存候、如仰、上様(信長)・殿様(信忠)被成御動座、武田方(勝頼)被遂御退治、御靜謐誠以目出奉存候、殊更貴殿上州御在國之儀珍重候、依之、先日惣領ニ候盛隆(蘆名)以使者、御祝儀申屆候、連々奉對上意、盛隆無二忠節存詰越候間、自遠國毎度申上候、然上、於上意も御感之由、度々被仰下候、然者今度東國御一統之儀、於吾等式も滿足此時候、然ニ、越國新發田(重家)及御忠節候之處、其敵方へ少々加勢等致候之由、被聞食及之段、誠以驚入候、縱對新因間(新發田因幡寺)之宿意等雖有之、只今之時節爭彼敵方へ可致與力候哉、其上連々於自分も近境與云、彼方別懇切申通儀候、委細様體之儀、於自分申分儀を御不審も可有之候、夏目方新發田へ被打越候而、彼表之模様一々被御聞屆候間、委曲可被申達候間、不細書候、尤不肖之身體ニ候へ共、自今以後此口相應之儀、別而於被仰付者可爲本望候、如何様自是態可申達候之間、令略筆候趣、可被得御意候、恐恐謹言、

(天正十)五月廿九日　(盛滿(金上盛備)花押)

瀧川(益)殿參貴報

六月大盡丁亥朔

三日、己丑、山本寺景長・中條景泰等、越中魚津ニ籠城シテ、久シク織田信長ノ將柴田勝家等ヲ捍止ス、勝家欺クニ交綏ヲ以テシ、急ニコレヲ攻ム、是日、景長等奮鬪戰死シ、城遂ニ陷落ス、

黑崎秀一吉江長忠ノ祖父宗信ノ遺品ヲ還ス

〔吉江文書〕○前羽

猶々、路次相隔不自由ニ候間、大身之鑓ハ穗計贈進候、以上、

聊不能對顏候得共、獻一簡候、然而去天正十年六月三日、越中魚津之城落著之節、御祖老吉江常陸介殿宗信を者、某手ニ懸討留申候、其擧於味方不常候義(儀下同ジ)、其節宗信老士大身之鑓を以御手合、既ニ及一戰候、則討留申節、腰指之採并(采配)此手道具者、某ぬん取仕候、某義主人相失、流浪之身と罷成候、一度干戈取合候共、一戰事終る後者、相互ニ和親之一圖申通ゐき旨、古實之訓承候間、大身之鑓并採壹本進之候、且又、宗信腰房茂贈進之候條、目出度期拜顏候、恐惶頓首、

卯月廿五日　黑崎左馬介

吉江與橘(長忠)殿御宿所　秀一(花押)

〔景勝一代略記〕○上文ハ五月十五日ノ條ニツヾク、魚津籠城衆、力を落候處、敵是を見きり、五月晦日、

天正十年六月三日

討死ノ諸將

四方堀をうめ、草を入、惣責す、大軍故不レ叶二落城一也、討死之面々、三本寺伊豆守（山豫）・中條越前・竹俣三河・吉江常陸・同喜四郎・同織部・長與次・若林・蓼沼・藤丸・龜田・石口・安部・寺島、是ハ御書被下衆也、此外丸山武兵衛・島倉豊後・山田與五郎百餘人討死也、

〔藤原山本寺氏系譜〕　定景

景定　本名鶴千代、後伊豫守ト稱ス、略○中館ノ亂景虎ニ屬ス、戰敗シテ出奔、行ク所ヲ知ラズ、

景長　幼名宮千代丸、謙信公ノ近侍、館ノ亂景勝ニ屬シ、兄景定ノ遺領ヲ賜ハル、天正十年六月三日、於二魚津一戰死、年三十二歲、三本寺殿虎山玄龍大禪定門ト號ス、

山本寺景長

〔吉江系譜〕　景宗

吉江宗信

宗信　永正二年生、童名與橘、改木工助、母琵琶島日向守春綱（謙信）女、天正六年三月十三日、公逝而後、織田信長掠二越中國一、魚津城主河田豐前守長親有レ年、雖レ然、長親不二肯一降一、故同九年春、信長兵來二魚津一而攻二長親一、因レ茲、景勝公使二宗信等一、向援レ之、山本寺勝藏景長・中條越前守景泰・竹俣三河守慶綱爲二其列一、同年四月二日、長親病死、于時同月八日、公賜二書於各四人一略○中同年八月隱居、號二宗閣一、入道略○中同年十二月、公、嫡子織部佐命二越中魚津城之番鎭一、依レ之宗信雖二致仕一、蒙レ命爲二後見一、又赴二彼地一、同十年春、再信長勢攻二越中魚津城一略○中同年六月三日、於二彼地一戰死、行年七十八歲、法名顯宗義忠居士、

資賢

信清——資賢　後信景　江州住人、輝虎公命來二越後一、嗣二信清跡一、號二喜四郎一、爲二公寵臣一、天正十年六月三日、與二宗信一戰死、四十五歲、

景資

初興橘、後織部佐、大永七年生、略○中天正十年六月、於二魚津一戰死、五十六歲、法名功運玄忠居士、

長秀

童名龜千代丸、初景秀、後號二六三一、天文廿二年生、母河田對馬守吉久女、天正十年六月三日、於二魚津城一戰死、三十歲、法名信學良忠居士、

景泰

永祿元年生、沙彌法師、改二與次一、後嫁二中條越前守藤資女一、繼二中條家一、號二越前守一、略○中天正十年六月三日、於二魚津城一戰死、二十五歲、法名景泰院殿月叟默心居士、

長忠

初茂高、與三郎、後與橘、又木工助、永祿九年生、正保四月四月廿六日卒、八十二歲、法名春山昌立居士、

長秀
中條景泰
長忠
景資

〔竹俣系圖〕　爲綱

竹俣慶綱

慶綱　太郎右衛門尉、三河守、大永四年生る、父爲綱病に依て蟄居、慶綱幼稚たり、故に叔父昌綱を以て名代を繼しむ、天文年中、父病平愈して再ひ世に出、同十一年、脇田常陸介景高父謀叛す、爲綱等之を討す、慶綱父子共に出陣す、同十九年二月朔日、景虎公古志郡に出馬、三條城主長尾平六俊景一族、并黑田和泉守秀忠親族相合し、軍兵數多三條に籠城す、秀忠別に兵士を集め、新山に籠城す、大手の先登慶綱、并に新發田尾張守長敦・本庄彌二郎繁長・加地安藝守春綱・色部修理亮長眞等なり、永祿三年、公小田原を攻む、此時慶綱軍功あり、同四

年九月十日、信州川中島の戰ひ、慶綱先登、加地春綱・安田治部少輔長秀・荒川伊豆守長實・水原壹岐守隆家其列なり、慶綱戰場に於て馬乘倒し、草摺は苅られ、甲は打落さる、然れとも其働比類なき旨、謙信公聞召され、同十三日、懇に感賞あり、馬一疋召料の具足を賜はる、同十月廿九日、上州伊勢崎へ公田馬、慶綱隨て軍功あり、後に執權職を命す、又七手組の隊頭を命す、軍扇并佩刀一腰（大原實守）を賜ふ、同八年、信州海津の城將を命す、中條・新發田・色部・大川其列たり、同十一年、本庄繁長叛く、慶綱、加地藤次郎尙孝・水原藏人實家と共に統軍たり、旗本松木内匠助貞吉・多所隼人佐重則佐軍として之を攻む、元龜元年正月、野州領内飯守城に於て、逆徒佐野小太郎昌綱か一族を攻らる、慶綱從ふ、同二年、公越中を略する時、父清綱か傳ふ所の名刀（備前兼光）石動宮か歸り、再ひ家の重寶となる、公之を聞て之を求む、乃ち公に獻す、公喜て常に之を佩ふ、傳謂ふ、公川中島に於て右典廐を斬しは、此刀也、奇瑞甚し、景勝公天正十四年上洛の時、秀吉公懇に之を求む、公歸國の後、吉田肥前守をして之を獻せしむ、秀吉公書を送りて厚く之を謝す、同六年三月十三日謙信公逝去の後、織田信長越中を掠む、魚津城主河田豐前守長親降らす、同九年春、信長大軍を以て之を攻む、公慶綱を遣て之を救ふ、山本寺松藏景長・中條越前守景泰・吉江常陸入道宗信其列たり、同年四月二日、長親死、同月八日、公書を四士に給はり、長親の城壘兵備を附して之を守らしむ、同十年春、信長又之を攻む、同四月十三日、公書を慶綱に給ふて慰勞す、山本寺景長・中條景泰・吉江織部佐景資・同六三長秀・同喜四郎信景・若林九郎兵衞尉家吉・蓼沼掃部助泰重・石口采女廣宗・長與次弘連・龜田小三郎長乘・安部右衞門政方其列たり、此時越府故あり、援兵遲延す、僅に三日なり、信長隙に乘して兵を增し、蟻附して之を圍み、急に之を攻む、城兵屈せず、同六月三日、城内死を決し、各々姓名を短冊に書し、穴を耳廓に穿ちて之を繫け、力戰して同く死す、慶綱

五十九、法名清岩宗光、

織田氏ノ軍魚津城ニ逼ル

景勝片桐内匠助ヲ援軍トシテ篠岡ニ派ス

景勝出馬シテ天神山ニ陣ス

〔越後治亂記〕下　魚津の城落居の事

越中小出、（○今井所持本聞書、魚津アリ、一統志、小出トアリ、）の城の後詰として、信長か差向られたる四ヶ國の軍勢、雲霞の如く支て未退引す、魚津城遠卷して有ける由聞へければ、又、越中へ發向有へしとて、人數を催されける所に、新發田か笹（篠）岡の城へ、日夜隙なく取懸候、去共、上の築地へ敵之人も通し候ハす、夜白油斷なき由注進有けれは、おほつかなしとて、片桐内匠助に鐵炮五十挺差添られ、笹岡へ被遣、かくて五月廿日に（○今井所藏本に纔五千の人數にてトアリ、）打立て、魚津と松倉の間成天神山に打上り、常願寺・片貝川を前に當陣を張給ふ、魚津の城へは一里有、明日早旦に敵陣へ押寄、戰可有兵儀（議）有ける所に、敵陣には景勝の後詰に出給ふそとて、堀をほり築をつき、矢倉かへ立、かき並、逆もきを引廻して俟懸ける間、左右なく打破ん事成かたく、徒に日を送りける、懸りし所に前田久左衞門（又）佐々内藏助二頭、其勢五百餘騎、雜兵三千餘にて川端迄押寄、御備の樣を見て人數多少積體にて控たる所に、麓の備か三十騎、川原柳の茂りたる中か川を渡、三千餘騎控たる眞中へ一文字に懸入て、かしこにあらはれ、爰にかくれ、四角八方に渡り合、巴の字に切て廻しかは、さすか大勢成とゝへとも、駒の足立兼、鞭を打て引たりける、暫時の事

成しかは、究竟の馬上六騎、雜兵共に十八人打留、其外數多手負せ、散々に追ちらし、味方は一人も手を負す、靜に川を渡して引退、明日は彌合戰有へきとて、定られける所に、越後の早飛脚來て（○今井所持本、その後柴田修理進各に申せしは、かく可レ有事と覺悟しめと慢しける、其後十騎二十騎土手際迄乘出ノ用心致し候所に、此勝家を憶病者と笑給ふか、今思ひあたり給ふらん、盡に働き、明日合戰と定りたる日、越後の早飛脚云々、思ふ）信州海津の城主森勝藏、越後へ亂入、さかいの田切を押破り、二本木・關の山・片貝・野尻・藤卷邊迄十四ヶ村放火して、其日の中に引退くと注進す、新發田籠城して居たるさい心元なきに、又、御留守へ敵の入けるよし告來れは、御供の上下彌胸をひやしける、去ハ御歸陣有へし、乍レ去魚津・松倉の者共を引取てこそと有けれ共、魚津の城ハ十重廿重に取卷れて堅固にかこみけれは、打ちらして引取へき樣もなし、松倉斗も助よとて、使者を立、其地を明て當陣へ參候へき由仰被遣たりけり、此松倉の城は、（○イ九字ナシ、）川田豐前守死去の後、番手にて勤たりしか、其時の在番黑金上野介・須田相模守・岩井備中守・菅名但馬守・楠川和泉・上野九兵衞なり、各仰に任せ、松倉の城明て御陣へそ參ける、魚津の者共不便成共、信州口おほつかなしとて、五月廿七日に天神山を引拂へ、越後へ歸陣せられたり、去間寄手の軍勢共、越後の後卷は退散したるそ、是程の小城に四五ヶ國の大せい、何迄日を送へきとて、五月廿九日か四方の堀を埋渡し、惣責に責寄る、城中の兵共一筋におもひ

松倉城ノ退去

景勝歸陣ス

魚津城將士ノ奮鬪壯烈ヲ極ム

定、面々假名を板札に書印、耳のつはに穴を明、彼札をゆひ付て、其勢三百餘人わつとおめへて懸出たり、寄手大勢成と云共、隨一の勇士共、死狂ひに迫りける程に、人馬雜兵のきこへなく、向を幸に撫伏る、寄手若干討れ、色めき立て引退、味方も城中へ引て人馬の息を休、敵よせれは切て出、五月廿九日か六月二日（三）午の刻迄、夜晝の嫌もなく、命限りに戰けり、寄手大勢なれは、行手を入替〳〵責けるに、色も替らぬ城中の兵、殊に兵粮盡てける、三日飲食を斷けれは、次第〳〵によわつて、天正十年六月二日（三）午の刻に、一所に寄合、友と友百餘人、一枕に差違てそ死たりける、越後にて名を得たる長尾家の股肱の臣と聞へしは、先山本寺勝藏・中條越前・竹俣三河・吉江織部・長與三・同喜四郎・右口采女・舍弟内藏助・同左京・蓼沼掃部・若林九郎左衞門・島倉豐後・安部仁助・山田與五郎・長與次・寺島六藏・藤丸新助・龜田小三郎其外數多の勇士、尸を魚津の戰場に埋み、名を後代に殘せり、

魚津落城

〔北越軍記〕六上　（○上文ハ、二十七日ノ條ニツヾク、）城中、景勝カ直判ヲ拜見シ、如何可レ有ト相談セシカ共、諸大將イツレモ評諚シ、寄手ヘ降參ヲ乞、城ヲ渡シ、引除ン事、永キ弓箭ノ瑕ナリ、タトヘ主君ノ命ナリトモ、難受所ナリト、衆議一同ニ決シケリ、城内掃除以下二三日ノ内ニ沙汰シ、六月二日ニ隙明シカハ、中條越前守景資・川田豐前守長親（誤）・右口采女實秀・

死ニ臨ミテ景勝ノ書狀ヲ拜ス

山本庄藏(寺脫)孝長・吉江喜四郎俊長・安部右衞門尉仲盛・竹股參河守朝綱大將物頭十三人、廣間ニ並居候テ、切腹ノ用意ニテ候、其中竹股參河守ハ蠟燭ヲ照シ、景勝直書ヲ頂戴シ、諸大將ニ向テ申ケルハ、危ヲ見テ命ヲ致事、義士ノ節也、城中粮盡、矢種玉藥モナシ、是時節到來、運命ノ極所ナリ、景勝公我等カ命ヲ助ン爲、降參仕リ、城ヲ可渡トノ御書ヲ給ル所、誠ニ君恩ノ辱事言語ニ難竭、朝綱不肖ノ身ナレモ、宇多源氏ノ末流、佐々木ノ後胤ナリ、上杉家股肱ノ大臣、七手組ノ其一也、信長ニ降參ノ手ヲ下ン事、國家ノ恥辱、不過之、生テ不義ノ名存ンヨリハ、死シテ忠義ヲ全スル事人身ノ分ナリ、古ヨリノ大將ヲ始、敵ヲ疑シメン爲、自害ノ後火ヲ懸テ其首ヲ燒損シ、誰首トモ不辨、死ヲ犬馬ニ同スル事、侍ノ本意ニ非、忠死ヲ潔シ、頸ヲ軍門ニ懸サセ、名ヲ末代ニ可遺、相構テ自害ノ後城ニ火ヲ不可懸、我々カ首ヲ焚失事益ナシト下知シテ、大將物頭十三人、板札ニ苗字名乘リ書付、各小刀ニテ自ラ面々ノ耳ヲ突通シ、穴ヲ簪、件ノ札ヲ自身耳ニ結付、一面ニ並居テ腹ヲ切申候、士卒ハ大半切死仕リ、又指違自害シ、一人モ落不申候、寄手ノ輩、城落テ乘入、十三人ノ自害ノ有樣ヲ見テ、柴田勝家・佐々成政・前田利家以下、舌ヲ振、譽ヌ者モナシ、皆感涙ヲ流ス、是卽六月二日(三)ノ未明ナリ、此日、京都本能寺ニテ信長公御生害ナリ、五六日コラヘ候ハヽ、運ヲ可開者ヲト、皆殘念ニ思ケリ、

壯烈ナル自刄

耳朶ヲ穿チテ名札ヲ結ブ戰死者

〔上杉年譜〕二十六　天正十年夏六月六日(三カ)、敵兵ハ御歸陣ト聞ヨリ否、魚津城ヲ四方ヨリ攻寄スル、城兵相談シケルハ、縱防戰スルトモ、公ニハ既ニ御納馬ト聞ケレハ、重テ御出馬モ間隔有ヘシ、其上兵粮モ絕ケレハ、力戰モ叶フヘカラス、然ル後ハ敵士ノ爲ニ生捕ラレ、武名ヲ汚ンモ口惜シ、各一同ニ腹カキ切テ、名ヲ後代ニ殘ント云、各尤ト一決シ、板札ニ姓名ヲ書付、耳輪ニ穴ヲ明ケ、件ノ姓名札ヲ結付テ、各腹十文字ニ搔切テ同枕ニ死ス、時ニ同月三日ナリ、所謂忠死ノ輩ニハ、中條越前守景泰・竹俣三河守慶綱・吉江喜四郎信景・寺島六藏長資・蓼沼掃部助泰重・藤丸新助勝後・龜田小三郎長乘・若林九郎左衞門家長・石口采女正廣宗・安部右衞門政吉・吉江常陸入道宗信・山本寺松三景長等ナリ、○下略

魚津城攻

〔越登賀三州志〕(五)　本月廿三日、瀧川一益、三國嶺(信濃上野越後三國分界ノ地)ニ到リ、森長一大田切越後ヨリ芋川城ヲ陷レ、越後二本木ニ入リ、春日山ヲ襲ハント、各甲兵ヲ進ムルノ旨、景勝越中ニ在テ、此告ヲ聞テ驚キ、廿七日景勝越後ヘ却ソク、(一說六月二日トス、武貞ハ爲三日、公ノ由緒ニハ二三日對陣、景勝長ニ寄手多勢ニ卒所在松倉城者退ニ于越後ニトアリ、然レバ五月廿三日ヨリ景勝五月廿七日マテ越中ニアルトキハ、其日數五日也、追考スベシ)、勝家等此機ニ乘メ火攻ニ松倉ヲ攻ム、又、魚津城ハ河田ト吉江織部固守ノ容易ニ拔ヘカラサルヲ知テ、勝家(土肥記ニハ之ヲ成政ニ作ル)、奇計ヲ以テ、柴田專齋(勝家ノ從弟)、佐々新右衞門(成政ノ甥)、二人ヲ質トシ、城

落ニツキテノ説

ヲ擧テ關領セハ、講和ヲ爲ント城將ヘ言送ル、河田等以爲ラク欺ムカスト、卽チ諾メ成政ヲ內城ニ延キ河田・吉江ハ外羅城ニ出、既ニメ河田・吉江ヲ城ノ內外ヨリ挾擊ス、二將暨ヒ中條越前・寺島六藏等血戰苦擊、死力ヲ窮テ斃レ、城陷實ニ六月二日(三)平旦也、

北越太平記、守將義ヲ致メ降ラス、各自カラ首札ヲ掛テ自殺スト也、又一書ニ此時上口山ノ方ハ攻場アシク、濱ノ方ヲ回リ、材木邑鬼江川鹽ノ倉其邊ニアリ、魚津ノ下今米ヨリ攻ム、因テ守將降ル、斯テ城ヲ取リ、地士ハ本丸搦手ノ橋ヨリ出シ、越後ノ兵子ハ翌日大門ヨリ大門川ノ方ヘ出シ、夫々城ヲ離ルル處ヲ、前後ヨリ挾擊メ盡ク斬取ト云、又藩翰譜ニ、天正十年、景勝越中ニ向ヒ、魚津城ヘ押寄タル織田方軍兵ヲ打破リ、信濃ヘ向ヘハ、柴田、又、魚津ニ寄テ城ヲ落シ取カヘストアリ、景周按ルニ、以上三說皆信シ難シ、又、土肥家記ニ、河田豐前ハ、天正九年五月松倉城ニ病死トアリ、然レトモ茲ニ欺カレ死スル事、北國太平記等諸記ニ載スルトキハ、其說アハサルカ、又、一說、此魚津陷城ノトキ勝家方ヘ獲ル斬首ヲ集メ塚四ニ築ク、今本江村山ノ方ニ四塚村アリ、是ヨリ村名トナルト云、

松倉城ノ守兵ハ城上ニ旌槍ヲ羅列シ、守禦ノ形勢ヲ佯リ張テ、越後ヘ夜走ル、織田方ノ諸將之ヲ知ラス、皆城兵依然タリトメ妄リニ近ツカス、我公然ラストシ、單騎ニテ城下ニ到テ見量シ玉フ、果メ空城也、因テ斯城一箭ノ費ナクメ城ヲ得、年譜ニ、此魚津役ヲ九年ニ掛ク、然レトモ諸記十年トスル者多シ、故ニ今從レ之也、

景周曰、此一段北國太平記・北越太平記・北越軍談・北陸七國志・織田軍記・本朝三國志・武德編年集成・藩翰譜・前田創業記等諸記ノ載スル所互ニ相反シ、紛々タル曲筆ノ濫飾、更ニ統一スル事ナシ、景周之ヲ病ミ、今諸記ヲ折衷シ、此本文ヲ立ト雖モ晚進ノ俗ノ陋習ヲ一洗スル事能ハス、恐クハ齟齬氷炭、識者ノ解頤鼓掌ヲ招ク事有ラン、且、坊本魚津・松倉二城ヲ溷メ、事大ニ謬ル事多シ、是他邦ノ人其地ヲ蹈マス、世間ノ街談巷議ヲ聞テ書スルナレハ也、景周又有澤俊貞ノ土肥家記ヲ讀ニ、其言ニ曰ク、魚津城主トモハ、成政計策ニテ扱ヒナリ、城ヲ引出シ、半途ニテ悉ク討捨トモ傳フレトモ、書狀共ノ體ハ、翌十一年ノ春マテ、魚津城ニ堅固ナルトミユ、但シ餘仁ヲ以テ又持返スカ、成政計策ハ翌十一年ノ事ヲ云傳フルカ、土肥籠城ニ力ヲ合セ、十年ノ冬中ハ城ニ籠リアカサル、成政モ雪中ニ成テ引入、富山ニテ越年トミユトアリ、又同記ニ、景勝ヨリ有澤圖書ヘノ書牘、天正十年六月ト同九月ト二書ノ文ニ、魚津ノ義殘念トアリ、然レトモ魚津陷城ハ十一年ナランカトアリ、同十一年四月ノ書文ニ、魚津ヘキカ、然レトモ景周是ヲ本文ニ立サル者ハ、此說引證確徵スヘシ、此事曾テ言ハサルハ、群記ノ下文ト脗合セス、又、諸記ニ此書ノ文ト脗合セシモ鷄肋タルヲ以テ也、後哲是ヲ選ヘ、

雅責利家ノ計策

成政ノ計策

〔關屋政春古兵談〕　天正十年二月、越中魚津の城にて、城中より和を乞、右同心なく雅責にせんと云、利家公是非城中の儘に和睦を仕玉ひ、退口へ懸て可討取と宣ふ、各尤とて其通に被成、退口へ懸り悉討取、

〔甲陽軍鑑〕二十　○上文ハ、五月十五日ノ條ニアリ、然間、川中島より森勝藏をさらはれ、むろし高阪彈正やきさる所まて、越後の內へ勝藏燒をさらはれ仕る、此一左右をきゝ、景勝越後へ歸らゝ候、次日、信長御切腹ありと申來る、其少前ゝ、景勝ひろゝへの城をも、景勝ひろゝさるを見て、城を渡をとて、佐々內藏介籌ゝ、能者共皆討殺さるゝ、

森長可五百川城ヲ陷ル

〔武家事紀〕九　○上略後詰トシテ景勝三日路ノ切所ヲヤシラス(不知)、駒返ナト云處、一騎打ノ所ヲ押トヲリテ、天神山ノ下吉田ニ著ク、寄手驚ノ處、景勝天神山ニ上テ陣ヲ張、ワツカ六七千餘ナリ、コレニ因テ寄手安堵イタシ、度々ノセリ合アリ、然ル處、森長一二本(越後)木マテ働、五百川ノ城ヲノツトリ、城主縫殿介在魚津城、男女不殘ナテキリニ致ス、此ユヘニ景勝越後ヲ氣遣、禪僧ヲ以テ柴田勝家カ元ヘ告ケルハ、景勝切所ヲコシテ後詰仕

コト、全越中ヲ切取ノタメニアラス、此越中ニ景勝隨一ノ侍十七人大將分トメ楯籠ル、此者トモノ命ヲタスケンカタメナリ、然ハ勝家ヲタノミ入ル間、急合戰ヲ始メラレヨトナリ、勝家返答ニ、合戰ノ儀此方ヨリハイツマテモ始マシク候、勝家ヲ憑玉フコトナレハ、扱ニイタシ、城中ノ衆ヲノカセ、景勝引取玉フトモ付サセマシキ由也、是ニヨツテ景勝無子細越後ヘ引納ル、前田佐々コレヲ付ヘシト云トモ、景勝手立アルコトモコソト、勝家コレヲ留テ付サセス、後ニ勝家景勝内通ナリトキイテ、寄衆アツカイヲヤフリ、ツイニ兩城ヲ攻落ス、景勝兵ヲ入テ二日目ニ、信長公弑セラレ玉フコトキコヘ、諸手アシ〳〵ニテ引取也、森長一モ越後ノアライ（新井）マテ働テ上方ノコトキコヘ、早々引退也、

魚津城將等長可ノ侵入ヲ憂慮ス

〔管窺武鑑〕六　○上略、景勝、天神山ヲ引拂フコトニカヽル、是に因つて、魚津の寄手、佐々・柴田悦び、城中に申入るゝは、景勝、今朝當表御引拂ひ候儀、森勝藏太田切口を破り、春日山へ取懸り候故と推察せしめ候、各も、是に詮なき籠城仕らるべきよりは、城を渡され、旗本へ加勢尤もたるべく候と申越す、城中衆談合に、此城を抱へ持ちても、春日山落城に及び候はば益なし、勝藏信州或は甲斐・上野迄も語らひ集めて働くと聞ゆ、御旗本許りの後攻危ければ、我々も差加はり、然るべき儀なれども、敵に方便られ、出で命を失ひなば、此志も水になり、此城を枕として死すべき所に、命を惜んで城を渡したりとある批判にあはゞ、一身はさて置き、主君迄疵になるとて同心もせざりしを、又柴田・佐々方より、各命の儀は、下々迄全く構ふまじく候、望に任せ人質を渡し申すべく候、それを召連れらるべしと再三申越に就いて、其評議候へども、春日山の儀心元なく、加勢の志深切なるを以て、六月三日、佐々方よりは甥の佐々新右衞門、柴田方より柴田專齋は、修理從弟にて武者奉行を申付くる剛士なり、右兩人を質に取り、城兵皆三の回輪へ窄みて、本丸を佐々に渡す、佐々本丸を受取ると、其儘弓鐵炮を放ちて、内外より取包みて越後衆を攻むる、城主吉江織部・松倉の河田豐前・戸山・末森兩城代、此城の加勢各十三人、此上は力に及ばずとて、右兩人の人質を刺殺し、三の丸へ攻め入る所の、敵中へ突いて入り、散々に相戰ひ、敵を追退けて引入り切腹仕る、同心被官は、思々の分別に仕れと申置く故、何れもいひ合せ、敵中へ入り切死に仕るもあり、切りぬけて越後へ歸るもありき、魚津遂に落城なり、敵に方便られて斯くの如し、本意なき仕合なり、

柴田佐々等人質ヲ送リテ魚津城兵ヲ誘ヒ本丸ニ入ル

佐々約ニ背キテ攻勢ニ出デ城兵憤リテ戰フ

〔參考〕

〔米澤雜事記〕　上方勢魚津の城を攻め落しての上に、越後へ打入るべき事、近日と相見へしゝは御家中の面々、色をうしなひて、越後中ハ暗闇に入たるゝ如くまして、一

越後ノ士庶魚津落城ヲ聞キテ色ヲ失ヒ

家内の者も、目と目を見合たる計りにて、もの云かはす事成らぬ候よし、右のものかたりハ、御扶持方青苧役窪彌次右衞門祖母、天正時代の者にて、米澤迄移り來り、折節のむなしに、今魚津一卷の事を覺し者稀なる故に、種々の手からとふしをする事多し、魚津落城せハ、上方せい越後へをし來るへしとて、物云ふ事もなしと、

六日、壬辰、景勝、信濃ノ將小幡昌虎ヲ、重賞ヲ以テ誘ヒ、歸屬セシム、

〔小幡文書〕○羽前小幡直藏氏所藏

今度於致忠信者、本田石見守飯山城領并同心上倉三河分、同本田當國知行分、不可有相違候、其上飯山實城可差置候、爲後日執達如件、

（天正十）六月六日　景勝（花押）

小幡山城（昌虎）守殿

本田石見守飯山城領上倉三河分

○景勝、昌虎ノ歸屬セルヲ以テ、采地ヲ宛行フコト、十三日ノ條ニ見ユ、景勝、又清水三河守ヲ誘フコト、便宜左ニ之ヲ合敍ス、

〔上杉年譜〕二十六

態申屆候、仍京都之儀、定而不可穩便候、然者、此節被屬當方、於被忠信者、別而可相感候、爲其令馳一翰候、恐々謹言、

清水三河守

六月十三日　景勝

清水三河守殿

八日、甲午、是ヨリ先、織田信長、京都ニ於テ惟任光秀ニ弑セラレ、越中及ビ信濃ニ在ル信長ノ兵退キ去ル、是日、景勝、コレヲ色部長眞ニ報ジ、且ツ、越中ニ出馬センコトヲ告グ、

〔別本歷代古案〕十三

態申屆候、仍上邊（本能寺ノ變）凶事依出來、越中ニ在陣候越前柴田（勝家）・賀州・能州・越中之者共迄、悉敗軍候、然者爲仕置可令出馬候、巨碎本庄彌次郎（繁長）らさへ申屆候間、定可相達候、謹言、

（天正十）六月八日　景勝

色部修理（長眞）大夫殿

本庄繁長ニ軍略ヲ授ケ色部長眞ニ通報セシム

〔公卿補任〕　天正十年壬午六月二日辰刻、前右大臣（織田信長）、於本能寺（京都）有事、後刻三位中將（信忠）於親王御亭二條ニ討死、家僕惟任日向守光秀叛逆也、兩所悉回祿、

信長本能寺ニ信忠二條城ニ自刄スル

〔信長公記〕十五　天正十年壬午六月朔日、夜に入、丹波國龜山にて、惟任日向守光秀企逆心、明智左馬之助・明智次右衞門・藤田傳五・齋藤内藏佐、是等とし而談合を相究、信長を討果し、天下主と可成調議を究、龜山より中國へハ三草越を仕候、爰を引返し、東

光秀丹波ヨリ京都ニ攻メ入ル

向に馬之首を並、老之山へ上り、山崎より攝津國地を可出勢之旨諸卒に申觸、談合之者共に先手を申付、六月朔日夜に入、老之山へ上り、右へ行道ハ山崎・天神馬場、攝津國皆(街)道也、左へ下れハ京へ出る道也、爰を左へ下り、桂川打越、漸夜も明方に罷成候、既信長公御座所本能寺取卷、勢衆五方より亂れ入也、信長も御小姓衆も、當座之喧嘩を下〳〵之者仕出し候と被思食候之處、一向さはふく、ときの聲を上、御殿へ鐵炮を打入候、是ハ謀叛歟、如何成者之企そと御諚之處に、森亂(蘭丸)申様に、明智か者と見え申候と言上候へハ、不及是非と上意候、透をあらせす御殿へ乘入、○中略信長初には御弓を取合、二三つ遊し候へハ、何れも時刻到來候而、御弓之弦切、其後御鎗にて被成御戰、御肘に被鎗疵引退、是迄御そはに女共付そひて居申候を、女ハくるしからす、急罷出よと被仰、追出させられ、既御殿に火を懸燒來候、御姿を御見せ有間敷と被思食候歟、殿中奥深く入給ひ、内よりも御南戸之口を引立、無情御腹めされ、○下略、信忠戰死ノコトニカヽル、

信長ノ最後

〔大かうさまくんきのうち〕○越後保阪潤治氏所藏

一あけちひうゝのゝ光秀(明智日向守)ミミつひて、せうしん(小身)さるを、ふぶこう(信長公)、一まん(万)の人もちにさせられ候ところに、いくゝとふく御こうおん(高恩)をわすれ、よくよふけ、天ゝのせそミをふし、のぶふゞ御ふし(父子)御一そくれき〳〵(族歴々)いらゝをふらべ、もも京ほん(本能寺)のふしま

おゐて、六月二日にふさけふく、うちさてまつりをハむぬ、

〔景勝一代略記〕一天正十年六月二日、上方にて信長公明地(智)ニ被討給フ事相聞ヘ、右之北國口ノ上方衆、信州口ノ森勝三(長可)、何も取物とり不合逃登也、

北國及ビ信濃ノ織田勢分崩離散ス

〔越登賀三州志〕○上文ハ、六月二日ノ條ニツヾク、六月二日、明智光秀、京都本能寺ニテ信長公ヲ弑シ、又、信忠君ヲ追擊ノ二條城ニテ弑スルノ旨、騎置(ウヘキ)ヲ以テ同三日越中ニ告、四戰略譜云、景勝越後へ歸ル日此告アリ、諸將愕然惘然タリ、諸兵卒ノ駭擾筆舌ニ盡スベカラズ、因テ諸將各越ノ陣ヲ引キ、或ハ分國ニ退ク、一説、此時魚津邊ノ上杉家ノ黨、上方衆ノ退クヲ追テ、加州手取川・粟生川邊マテ至テ歸リ、向川縫殿ヲメ魚津城ヲ守ラシム、此後成政又之ヲ攻テ追拂フトアリ、

越中方面ノ形勢

〔前田金澤家譜〕一五月(天正十)、海津ノ城主森長可越後ヲ襲フ、景勝警ヲ聞テ軍ヲ旋ス、諸將機ニ乘シ魚津ヲ拔ク、將ニ與ニ越後ニ入ラントス、六月四日飛檄京師ヨリ至リ曰ク、織田公父子明智光秀ノ爲ニ弑セラレ、上國大ニ亂ルト、是ニ於テ各軍ヲ班ス、

三日京都ノ變報越中ニ到ルトノ説

越中ノ越後勢織田勢ヲ追擊ストノ説

〔村井重頼覺書〕

一柴田修理殿ハ、越中ニ御入之注進もおそく、まつ引拂、居城越前北庄まて歸陣、其時能州利家(前田)様ゟ御使者被遣、早々御出陣ニて明智を御うちはたし尤候由被仰遣、能州之人數高松ニそろへおかせられ、利家様ハ百騎計ニ而小松近邊まて御出被成、

四日京都ノ變報越中ニ到ルトノ説

柴田勝家越中ヨリ越前北庄ニ歸陣

前田利家能登ヨリ越前小松ニ出陣

北國及ビ信濃ノ織田勢分崩離散ス

佐久間盛政金澤城ニ蹈躙ス

御座候へ共、金澤城に有之佐久間玄蕃（盛政）何共不知、世上と分別だて被申、ためらい數日延申候内ニ、秀吉公、明智を御退治、

信濃方面ノ狀況

〔森家先代實錄〕四長可君　同年（天正十）六月、越後國之内上杉景勝の領分關山邊まて、武州君（森長可）働入給ひ、在々放火して、三本杉（二本木）と云所ニ陣ヲ居ておハします所、六月六日未下刻、濃州金山ゟ早飛脚到來し、（越後の景勝ヲ切鎮ん爲、川中島ニ御在城共、又、信州ヲ討鎮メ、海津城ニテ仕置等被仰付、御安座の處、上方ゟ飛脚到來ニ云、）六月二日、惟任日向守光秀謀叛ニ依て、信長・信忠御兩公於京都弑らゝ給ひ、幷御同氏十三人、且亦蘭丸君・坊丸君・力丸君とも本能寺ニおゐて討死し給ふ由告來ル、武州君右之趣聞給ひ、思寄さは信長公の御生害、御舍弟討死し給ふ事、大ニ驚給ひ、御愁傷不淺、早早海津城へ御歸陣被成、家老番頭を被召御評儀（議）の所、此上ハ、一刻も早ク上方へ御登被成、信長公の弔合戰ふされ、明智光秀可討滅計略の外有間敷とて、其用意被成候處、信州の武田方の先方の城主共、幷地庄官春日周防等、徒黨ヲ組、前ゟゝ御入郡の刻、取置れし人質、長可君の所ニあり、上洛有ニ於ゐてハ、人質悉ク返し給へ、ゝらすハ國人兵ヲ以、跡ヲ慕ひ、又ハ路次のせつ所よてさへきる事も有へしと、使者ヲ立ツ、（下略、長可信濃ヲ退去シ、同國ノ一揆ヲ追擊スルコトニカヽル、）

長可弔合戰ノタメ上洛セントス

武田氏ノ舊臣等人質ノ返還ヲ要求ス

關東方面ノ狀況

〔松平義行所藏文書〕坤　瀧川一益、西上州へ亂入之以後信州へ退事等之書狀

北條瀧川手切

金窪本庄原ニテ合戰

惣社箕輪間北條氏ニ屬ス

一益敗レテ信濃ニ逃ル

一益再擧ノ企畫

由良長尾氏ト手切

（上略）六月二日、不思議ニ京都一亂、信長御父子洛中ニ而御切腹、御同名七（信澄）兵衛殿、惟任兩人之謀叛ニ而、安土・京都失正體候、就之關東瀧川（一益）無憑所被罷成候處、北條氏政有全心替、既瀧左不義被構候間、瀧川方不及了簡、手切之働被懸成候、同六月十六日ニ、氏直（北條）倉加野（賀下同ジ）表へ被相働候之處、瀧左掛合、同十八日かなく不（金窪）本庄之原ニ而被及一戰候之處、京勢存儘ニ被得利、既氏直親邊之者共數多、鉢形衆三百餘被討取、得大利候、同十九日重而被及一戰、忽懸透切崩、京勢勝利之處、氏直家中有功者、京勢を陣城江近々與引掛、後陣之人數合懸、遂一戰、忽京勢切崩、倉加野を追越、惣社寺（マヽ）箕輪之間迄追切ニ成し候、

然者京勢無殘所被討捕、瀧川父子不及了簡、信州山奥江被引退候、重而自信州入數ヲ調、可討入之段調落（略）之由候、不可經數日、由、味方中江被申越候、御同心可然候、少も無御油斷被心掛之所可然候也、

一由良・長尾向此口手切働可成之由注進候、雖不珍候、掛合可遂鬱憤之條、無他事迄候、何も同心此刻候、恐々謹言、

六月廿二日（以下斷簡）

〔石川忠總留書〕坤　瀧川合戰

天正十年六月八日

信長ノ訃報厩橋ニ達ス

一益北條輔廣ノ決意ヲ問フ

北條右衞門大夫

丹後守一益ヲ訪フ

一益北條氏直ト戰ヒ敗ル

輔廣ノ質ヲ返シテ上洛ス

越後ノ狀態

一六月二日ニ、信長公御生害ノ由、同九日ノ晩、飛脚瀧川殿江到來之由、則其夜北條安(輔廣)藝守・同嫡子丹後守處江使者在之、去二日ニ、信長公御生害之旨、今夕飛脚到來候付、可ニ罷上一覺悟候、然者定而北條(氏政)跡ヲ慕可ニ申之一旨、可ニ致一戰一候、其節我等ニ御一味被成可ニ給候一哉ト被ニ申越一候、北條(輔廣)被ニ思候一ハ、關東ノ諸大名ノ心ヲ引ミン爲ニ計略ニ候哉、實歟不實歟難ニ辨之一由ニテ、家老共ヲ召集談合有ニ之處一ニ、同名右衞門大夫申ハ、御返事之趣ハ、畏テ奉ニ存候一、明日致ニ伺公一(候)、以ニ面上一可ニ申之由被ニ仰可一、然ト申候、北條父子、其外ノ家老共此儀ニ同シ、御返事被ニ申一、翌日丹後守前橋江被ニ參候一ニ、騎馬十人被ニ召連一、イツレモ袴ヲ著、下々モ長草履ノ體ニテ參候ヘ之由被ニ申付一、拙者モ供ニ參候、〇中略、一益北條氏邦ヲ、武藏神名川ノ邊ニ破ルコトニカヽル、

一二度目ノ合戰モ、六月十九日、瀧川下知ニ、北條(輔廣)殿武者ハ、備ヨリ馬ヲ百間計退カセ、各得道具ヲ持、跪カセ、此方下知次第可ニ被一入一鑓候由被ニ申付一候、〇中略、一益北條氏直ト戰ヒ敗レ、箕輪ニ退クコトニカカル、瀧川殿ヨリ北條殿江、其日ニ使者ヲ被ニ越一、今日ノ軍勝ツ負ツ不ニ及一是非一候、某儀罷上リ候之間、其方ノ證人於千連一可ニ返遣一候間、身近キ者迎ニ可一被ニ指越一候旨、翌日北條刑部丞被ニ遣一、證人同道ニテ罷歸、瀧川ハ上洛被ニ申一候、

〔上杉年譜〕二十　〇上文ハ、三日ノ條ニツヾク、然ル所ニ、去ル二日(六月)、信長ハ惟任日向守光秀カ爲ニ

京都ノ變報到ル

越中及ビ甲信大風ノ止ガ如シ

魚津ノ落城ヲ惜ム

松倉城危難ヲ免ル

強敵内外ニ在リ

京師本能寺ニ於テ生害シ玉フ、秋田城介信忠ハ、二條ノ亭ニテ自殺ノ由、同七日ニ信・甲・越ニ相聞エ、信長ノ軍士コレヲ聞ト齊ク、此行誰カ爲ニカ戰ントテ、各前後ヲ分ツテ、上方ヘ登ルモアリ、領所ニ走歸ルモアリ、分崩離散シテ一日一夜ノ内ニ、螻蟻ノ如ク集タル信長勢、今ハ一人モ留ラス、悉皆引退キ、甲州・信州・越中ハ、大風ノ止カ如クニ靜謐ス、コレニ付テモ魚津籠城ノ諸士運命ノ盡ル所、五三日ヲ期スナラハ、喜悅ノ眉ヲ開クヘキト、今日猶惜ヌ者ハナシ、松倉在城ノ諸士モ、辛キ命ヲ遁レケル、越府ニテ公モ聞シ召シ、所々ノ城主ヘ、御書ヲ以テ此旨ヲ仰下サル、色部修理大夫ニ御書ヲ下サル、上方ニテ信長生害ニ依テ、越前ノ柴田、賀州・能州・越中ノ者トモマテ悉ク敗軍ス、此節ニ臨ンテ、御仕置トシテ御出馬アラハ、一變ニ手裏ニ入ラルヘキ事案ノ内ニ思召サルヽノ由ニテ、件ノ趣ヲ本庄彌次郎方ヘモ御遣サルヽ間、定テ相達スヘキ旨ナリ、其御書云、〇書狀、前揭ニ同ジキヲ以テ略ス、

〔越後治亂記〕下　信長御生害、越後ヘ聞し事

景勝公、越中ゟ歸陣有ニ之一、軍兵共休息の爲とて、在所〳〵へ歸されけり、又、越中の佐々内藏助境目まて仕置して、城には己か手者共數多籠置、越國迄も責入へきよし、信長ゟ下知し給へは、其用意して、近々押寄るとも聞ゆ、又、信州の守護代森勝藏も、上方ゟ

大軍を申下、是も越後へ相働ふと聞へければ、雜說とおもひなから、今日よ、明日よと云し程に、國中の上下以の外に、曉(仰)天して、懸る折を得て、新發田か打て出るにさへ、心置候はるゝに、方々ゟ大勢敵寄ると云成は、いかゝして防へしと、度を失ひて見へし所に、誰か云出しけん、信長公、明智日向守光秀か謀叛に依而、御生害有よし、六月四日の午ノ刻に、一度にはつと沙汰しける、眞言しからぬとおもへとも、吉事なれは、尙懇に聞けるに、實にてそ有ける、六月二日の御生害、同四日午ノ刻に聞へけるこそ不思儀なれ、國中の大小士、萬民に至る迄、夢の覺たるとくにて、悅けり、四五日はなりも止す、近國の信長勢、取物も取あへす、其國々城を打捨〳〵逃登、

越後人ノ危惧

危難ヲ免ル

〔越後古實聞書〕　六月四日に、誰云とも不知、上方ゟて信長公ハ、明智日向守謀叛ゟて生害なりと云、六月四日午之刻、越後七郡ゟて知らぬ者ハなし、誠しからぬ事なれとも、上下是を悅ひける、然所ゟ、六月二日、信長公生害誠の事なり、上方ゟて二日ゟ御生害を、四日に沙汰する事、人間の力ならずと、諸人天を拜すとなり、扨、隣國の信長勢、取る者もとりあへず、海道混亂するとなり、依之、諸國ゟ、越後へ注進申ハ、早々御馬を被出、御仕置被遊候へと、使者飛脚ハふる雨のとく、景勝公も御悅、越中の國へ上條殿・須田相模守御向被成、近所ふれ〻、信州へ被爲出、海津ゟ御在陣被成、

京都ノ訃報越後ニ傳ハル

諸國景勝ニ出馬ヲ求ム

上條宜順關山口ニ森長可ヲ防グ

景勝越中退陣ニ方リ柴田勝家ニ交渉ス

魚津ノ織田勢追擊セズ

〔北越家書〕　○略上　于時信州ノ森勝藏長可、此隙ヲ得テ發兵シ、水內郡大倉城ヲ拔捕、飯山・野尻ヲ押ヘテ、關山ヲ蹈越、五千餘騎ニテ二本木筋迄亂妨、五百川縫殿助カ堡障ヲ襲フ、壘主素ヨリ魚津ニ在テ、兵微々ナリシカハ、男女死亡シテ砦陷ル、是ニ依テ春日山ヨリ上條義春(宜順)七百騎ニテ馳押ヘ防クトイヘ共、寡ヲ以當リ難キニ付テ、急ヲ越中ノ陣中ニ達ス、景勝主聊モ驚騷ノ機ナク、禪僧ヲ以、柴田勝家方ヘ仰遣シケルハ、今度吾等隘路ヲ凌キ此地ニ出張致ス事、全當國ヲ伐敷ンノ念慮ニハアラス、魚津城番隊トシテ、手前隨分之者十七人入置カ故、渠濟カ命ヲ繼ンカ爲也、然ルニ信州ヨリ森勝藏越後ヘ押入、狼藉千萬ノ旨飛脚到來、左アリテ此許ノ戰ヲ捨、無下ニ引退ン哀、四方ノ外聞眉目ナキニ似タリ、所詮勝家ヲ賴入之間、急ニ一戰ヲ促サレ、雌雄ノ是非ヲ決セラレハ本望タル可シ云々、柴田其詞ヲ大ニ感ジ、兎ニ角ニ當手ヨリ戰ハ掛ヘカラス、賴玉フトアル上ハ、扨ノ義ヲ以城ヲ避瓦シ、兵衆ヲ引取ルヘキ乎、但其期ニ臨テ咬留ル如キノ働ハ、愛宕・白山モ御示眼アレ、努々仕間敷ノ旨返答ニ及シカハ、景勝主同心在テ暫和融ヲナシ、摠軍ヲ收テ越府ヘ凱旋、佐々成政約ヲ變シテ追擊セント欲ス、勝家是ヲ叱シ、景勝微弱ノ將タリトイヘ共、謙信雄偉ノ餘耀今猶存セリ、何等ノ武略有ヘキモ測難シ、愁ノ手差シテ永劫ノ名折曲ナシトテ一箭ヲ發セス、味方恙ナク

天正十年六月八日

越府ヘ馳戻スノ處ニ、洛ノ本能寺ニ於テ信長生害ノ由ニテ、鬼勝藏モ鋭氣撓ミ、荒井邊ヨリ軍ヲ班シテ、早々川中島ヘ退クト云々、

〔附錄〕

〔歴代古案〕六 ○羽前

明智光秀交款ヲ魚津城ニ申込ムトノ説

先日者、御書被下候、奉頂戴候、仍、其御表彌諸口被思食御儘之由、目出至極奉存候、然而一昨二日御越河之由申來候、何方訖被出御馬候哉、昨今者一向ニ御左右無御座候間無心元奉存候、隨而上口樣子委不承候、一昨日從須田相模守(滿親)方食仕之者罷越、才覺申分者、自明智(惟任光秀)所魚津訖使者指越、御當方無二御馳走、可申上由申事候、與承候、實儀候者、定自須田方直ニ使ヲ上可被申候、將又、推察至極申事ニ御座候得共、其元之儀大方御仕置被仰付候者、早速被納御馬、能越、兩劦之御仕置被成之御尤之由奉存候、此旨宜預御披露候、恐惶謹言、

追而申上候、兵部事、萬端無調申故、遲々申樣ニ候、軈而致用意、可罷立由申事候、以上、

河隅越中守　　忠清(花押)

(附記)「名宛消而不見」

河隅忠清

○右書宛名及ビ日付闕ク、或ハ直江兼續ニ宛テタルモノナラン、光秀通款ノコト、他ニ所見ナシ、姑ク茲ニ附收ス、

九日、乙未、景勝、蓼沼友重ニ、京都ノ變事ヲ再報シ、且ツ、新發田重家ノ部下ヲ誘フニ利ヲ以テシテ、重家ヲ圖ラシメ、併テ友重ノ兄泰重ノ、越中魚津城ニ於テ戰死セルヲ弔慰ス、

重家ノ家臣ヲ取立ツベシ

新發田城ヲ陷ルノミヲ主トセズ

〔蓼沼文書〕○前羽

急度申越候、仍而如先書申越、上方之樣體必定ニ候、定而可爲大慶候、因茲新發田事、家中之者共ニ此度相稼、因幡(重家)之儀切腹於成ニ者、家中者共急度取立へきよし可申候、以前之證判のことく、早々可相稼由申、其方も相稼尤候、左樣ニふく、只新發田手ニ入計へ、さらニ〳〵きどくと思間敷候、其心へ簡(肝)要候、爲其直ニ申越候、誰人申越共、本々不成之、身ニ直筆ニ而申越ことくニ、稼尤候、返事も直ニ可申越候、彼書中ちらすましく候、以上、

追而、其方兄事(泰重)此度打死成之、不便不及是非候、以上、

天正十年六月九日　　景勝(花押)

六月九日(天正十)

蓼沼藤七殿(友重)

天正十年六月九日

○泰重ノ越中魚津城ニ於テ戰死スルコト、六月三日ノ條ニ見ユ、

十日、丙申、景勝、長尾市右衞門・楠川將綱ヲシテ越後根知城ニ在城セシメ、市右衞門ニハ、吉江領ヲ管セシメ、將綱ニハ、府内・根知間ノ關所通行ヲ許ス、

〔上杉年譜〕二十六

人脚使用

就根知（西頸城郡根知村）在城申付、吉江分預置候、普請之時、人脚等可召仕者也、仍如件、

天正十年　　景勝

六月十日

長尾市右衞門殿

楠川出雲守（將綱）、府内、根知上下諸關何茂無相違可通者也、如件、

天正十年

御朱印

六月十日

所々領主中

越中湯原國信、佐々成政ト戰ヒテ之ヲ破リ、尋デ、景勝ニ、京都變事ノ確實ナルヲ報ジ、此機ニ乘ジテ越中ニ出兵センコトヲ請フ、

景勝出馬セバ越中ハ景勝ニ屬スベシ　成政ト戰ヒ勝ツ

〔伊佐早文書〕○羽前伊佐早謙氏所藏

謹奉言上候、抑、今度小田七兵衞（織田信澄）井明地（智下同ジ）其外面々七首色替、至下京、信長滅亡、必然之仕合、毛頭無所疑御事ニ御座候、誠御本望不可過之候、就其自此方於兩度以飛脚申上候、定而可致參著候、兎角此上之儀者、於御進發者不移時日、都鄙可屬御本意事、目前御座候、就中今月十日ニ、佐々藏助（内脫カ）自富山入數入申候處ニ、小甚寺牛走合、遂一戰、兄弟共失利、數多爲討申候、其機追を以、拙者陣所へ取懸申候處ヲ、遂一戰、佐々名字之者共三人、其外人數百餘討取申候、於手前、乍恐無由（油）斷御事ニ候、此等之旨、於御前可然御披露奉仰候、恐々謹言、

（天正十）六月十九日　　湯原八丞

直江與六（兼續）殿　　國信（花押）

〔上杉家古文書〕

乍恐奉啓上候、仍、今度小田七兵衞井明地、其外面々七首色替、至下京、信長父子討果申事、必然無疑御事候、就其兩度以飛脚申上候、致參著候、兎角此上之儀、於御出馬者、都鄙

迄可ㇾ屬ニ御本意事、目前候、彌御才慮相極申候、就ㇾ中今度自ニ富山一藏助人數入申處ニ、甚介・寺中走合、遂ニ一戰一申候、然處ニ兄弟共失ㇾ利、少人數爲ㇾ討申候、其以ㇾ勢拙者陣所へ取懸申候之處ヲ、遂ニ一戰一、佐々名字者共三人、其外百餘討取申候、於ニ手前一聊無ニ油斷一御事候、此等之趣可ㇾ然樣ニ、御披露所ㇾ仰候、恐々謹言、

六月十九日　湯原八丞

見海(青カ)主計助　國信(花押)

見海主計助

〔伊佐早文書〕○羽前伊佐早謙氏所藏

態令ニ啓達一候、仍去二日、信長切腹之儀、定而貴邊可ㇾ有ニ聞得一候間、具不ㇾ能ニ申述一候、依ㇾ之彼分國之義、無ニ正體之由候、當州(越中)之儀、先以佐内藏在國候、雖ㇾ然彼内輪未落居之體候、此節太守於ニ御出馬一者、都鄙可ㇾ屬ニ御本意一候、義(儀)歷然候、此表之儀何分ニ茂貴國御指圖次第ニ可ㇾ成其催候、右之趣只今捧ニ愚札一候間、可ㇾ然之樣可ㇾ預ニ御取合一候、隨而萬方爲ニ調略一、今度至ニ山口一取出候處、佐内藏取懸候間、既及ニ一戰一候間、手前無人故被ㇾ執ニ仕場一口惜存候、併一騎一人不ニ損亡一候間、再興之義、近々可ㇾ成ニ其勵一候、諸事返答可ニ預一示一候、恐々謹言、○以下斷簡

織田氏ノ分國正體ナシ

景勝ノ指圖次第ニナルベシ

山口ニ敗戰ス

十二日、戊戌、景勝、京都ノ變ヲ佐渡ノ將本間高季等ニ報ジ、越中・能登ノ諸將復屬セルニ因リテ、之ガ仕置ノ爲ニ同國ニ出馬スルヲ旨ヲ告グ、

〔本間文書〕○佐渡

急度申屆候、仍而當月二日、於ニ京都一信長父子三人切腹、依ㇾ之越中・能州諸要害打明、美濃・尾張之者共、悉遁失候、然間、國中相殘國人等、皆々復ニ先忠一之間、爲ニ仕置一與ニ令ニ出馬一候、各爲ニ疑心之一到來之書中一書差越候、目出吉左右彌可ㇾ申候、恐々謹言、

（天正十）六月十二日　景勝（花押）

本間高季　本間對馬守(高季)殿

同但馬守　本間但馬守殿

同高泰　本間信濃守(高泰)殿

同季直　本間彌太郎(季直)殿

同時泰　本間下總守(時泰)殿

同秀高　木間歸本齋(秀高)

同高統　本間山城守(高統)殿

證據文書ヲ添付ス

十三日、己亥、景勝、信濃ノ將栗田民部介ニ所領ヲ安堵セシメ、尋デ、同國ノ諸將ニ、采地ヲ宛行ヒ、若クハ本領ヲ安堵セシム、

天正十年六月十三日

〔歴代古案〕四〇羽前

今般可勵忠功之旨、神妙之至候、就之本領之儀、不可有相違候、猶有忠信勞功者、尙以可相感者也、仍如件、

天正十年　六月十三日　景勝

栗田民部介殿

〔大日方文書〕〇信濃

（包紙）「上杉景勝」

今般可有忠信之由候間、任望之旨、二柳（信濃下同ジ）出置者也、仍而如件、

天正十年　六月十四日（景勝朱印）

春日狩野介殿

二柳

春日狩野介

任望之旨、鹽田郷之内、前田村之内、上務三百貫文出置者也、仍如件、

天正十年　七月廿四日（景勝朱印）

春日狩野介殿

鹽田郷前田村上務三百貫文

〔信濃寺社文書〕乾

今般可有忠信之由候間、任望之旨、河中島藤牧出置者也、仍如件、

天正十年　六月十四日（景勝）丸御朱印

春日三河守殿

河中島藤牧

任望之旨、鹽田郷之内、保屋村之内、上務三百貫文出置者也、仍如件、

天正十年　七月廿四日（景勝）丸御朱印

春日三河守殿

鹽田郷保屋村

〔大日方文書〕〇信濃

今般可有御忠信、任御望之旨、御證判相調進候、此上早速一切之御圖尤候、猶上平可有口上候、恐々謹言、

天正十年六月十三日

上平

六月十四日　　直江
春日三河守殿　　兼續（花押）
春日能登守殿
同　三　丞殿
同　狩野介殿　　参御宿所

かつさ靜間　蓮岩井

〔歴代古案〕七〇羽前

於信州本領之事者勿論、爲加恩このはさ・ふたま・はちを・岩井遣之者也、仍如件、

天正十年
六月十五日　　景勝
岩井信能（信能）
草間神保　　岩井民部少輔殿

〔別本歴代古案〕十三

今般、於其地可抽忠信之由候間、任望之旨、草間并ふんぼ（神保）出之置者也、仍如件、

天正十年
六月十六日　　景勝

岩井常陸介

岩井常陸介殿

〔上杉年譜〕二十六

今般、可有忠信付而、出置地之事、

一自綱取奥郡年來所務之所、
一家中江勝頼（武田）直恩之所、
一仁科之内、小岩竹・西卷一跡之事、
以上

年來所務ノ地
武田勝頼直恩ノ地
仁科ノ内小岩竹西卷分

右不可有相違者也、

天正十年
六月十六日　　景勝
市川信處（信處）
市川治部少輔殿

〔歴代古案〕六〇羽前

今般、可有忠信付而、出置地之覺、

一夜交之郷
一うき

夜交
うき

天正十年六月十三日

天正十年六月十三日

新野　一新野

岩舟　一岩舟

以上

右不可有相違者也、仍如件、

天正十年

六月十六日　景勝様御朱印

夜交左近助　夜交左近助殿（○武田勝頼、夜交左近ニ、岩船郷替地トシテ夜交ノ地ヲ宛行フコト、八年閏三月二十三日ノ條ニ見ユ、）

南郷　〔別本歴代古案〕十五

任望之旨、本領并南郷出置之者也、仍如件、

天正十年

六月十八日

上野新三郎　上野新三郎殿

所付不明　〔歴代古案〕四（○羽前）

（附記）〔横折〕

任望之旨、本領之儀者勿論、并新恩所付無之條、重而差圖次第可出之者也、仍如件、

天正十年

六月十八日　景勝御朱印

鑪孫左衞門尉　鑪孫左衞門尉殿

府野　〔歴代古案〕五（○羽前）

任望之旨、本領并府野出置之者也、仍如件、

天正十年

六月十八日

櫻靱負尉　櫻靱負尉殿　景勝

吉村　任望之旨、本領并吉村出置之者也、仍如件、

天正十年

六月十八日

堅岩伊豆守　堅岩伊豆守殿　景勝

水内郷　〔別本歴代古案〕十三

今度、就可有忠信、出置地之覺、

一水内郷

天正十年六月十三日

天正十年六月十三日

日名
穂刈夏目
土部

一日名（穂刈）
一ホロ夏目
一と（土部）

以上

右此外本領不可相違者也、仍如件、

天正十年　六月十八日　香坂能登守殿　景勝

〔小幡文書〕○羽前小幡直藏氏所藏

香坂能登守

任持來旨、出置地之覺、

小松原
一小松原百貫文山（カ）こ

日賀野
一日賀野參拾貫文

信府之内
一信府之内八拾貫文

東條
同心領
一東條百七拾貫文　同心領

右、不可有相違者也、仍如件、

天正十年六月十三日

小幡昌虎

今般忠信付而、任望之旨、本領不可有相違候、彌、可走廻事肝要候、仍如件、

六月廿日（上杉年譜、八月五日トス、）　景勝（花押）
小幡山城守（昌虎）殿

天正十年　六月廿七日　景勝朱印
小幡山城守殿（○景勝、重賞ヲ以テ昌虎ヲ誘フコト、六日ノ條ニ見ユ、）

〔歴代古案〕四○羽前

直奉公

今般無二可有忠信由、感悦候、然間任申旨、本領不可有相違候、并可爲直奉公者也、仍如件、

天正十年　六月廿日　景勝朱印

關下野守殿
同越前守殿
原大和守殿

天正十年六月十三日

天正十年六月十三日

〔歷代古案〕七 ○羽前

新恩ハ忠信次第

任望之旨、本領不可有相違候、新恩之儀、可爲忠信次第者也、仍如件、

天正十年

六月廿一日　景勝御判

大室左衞門尉殿

大室左衞門尉

態脚力到來、祝著之至候、仍而當表之儀、任存分候條、可心安候、然者、其表無爲之由珍重候、彌可勵粉骨事專一候、謹言、

九月十七日　景勝御判

大室左衞門尉殿 ○便宜茲ニ附收ス、

〔高橋文書〕○羽前

今般忠信付而、任望之旨、本領不可有相違者也、仍而如件、

天正十年

六月廿七日 ○上杉年譜、八月五日トス、

窪島日向守殿

窪島日向守

景勝朱印

〔歷代古案〕四 ○羽前

小布施ノ内堀江分
六川ノ内清水分
八幡料所
一本木六塚

今般、抽忠信付而本領之儀、出置覺

一小布施之内　堀江分

一六川之内　清水分

一八幡料所之内　廿貫文

一一本木六塚共ニ

以上

右全可令知行者也、

天正十年

六月廿八日 ○上杉年譜、八月五日トス、

窪島日向守殿

景勝

〔別本〕歷代古案〕十三

島立

任望之旨、本領并島立千貫之所、出置者也、仍如件、

天正十年

六月廿九日

景勝

天正十年六月十三日

天正十年六月十四日　十六日

西條治部少輔殿

〔上杉年譜〕二十六

沼田在城尤候、幷信州八幡松田一跡、但百三十貫文除、其外知行同心共出置者也、

天正十

六月廿九日

景勝

遠山丹波守殿

沼田在城八幡松田分及同心

十四日、庚子、景勝、能登畠山左近將監ノ望ニ任セテ、同國ノ地ヲ宛行ヒ、越後ニ駐留セシム、

遠山丹波守

〔別本〕前田家所藏文書〕

内々於當國一所契約可申之由雖令存、萬方手塞故延引、然處今般於能州御望之地任其意候、自然相支儀於有之者、對直江（兼續）御理、重而可申定候、然者乍御大儀、當州御在國尤候、恐々謹言、

天正十年六月十四日

景勝判

畠山左近將監殿

越後ニ於テ地ヲ給スルヲ止ム

十六日、壬寅、唐人親廣、越中安城ヲ降ス、是日、景勝、上條宜順ヲシテコレヲ褒セシム、

故障スルモノアラバ直江兼續ニ交渉スベシ

〔川邊氏舊記〕二　（附記）中樣ニテ内封

就信長（織田）切腹、上方之樣子具書面、誠入魂之至、祝著候、隨而其比安城（越中）以其方忠節、屬御手之由聞屆候、御實城御感之旨雖可及、景（關カ）甲世外之儀條、無是非候、尤此刻急速可爲御進發之旨、彌馳走肝要存候、關・信・甲諸侍共逐日一味候、於時宜者可心安候、爲先衆未境之地居陣候、委曲期來音候、恐々謹言、

（天正十）六月十六日　宜順（上條）（花押）

唐式（唐人式部大輔清房）

關東信濃甲斐ノ諸侍景勝ニ屬ス

二十日、丙午、景勝、信濃ノ將市川信處・河野家尙等ニ命ジテ飯山ノ地ヲ致サシム、信處等命ニ從フ、仍リテ是日、景勝、之ヲ褒シ、且ツ、春日勝賀ノ信處等ニ依リテ歸屬セルヲ以テ、コレニ朱印狀ヲ與フル旨ヲ報ズ、

〔上杉年譜〕二十六　六月廿日、信州ノ士市川治部少輔信處・河野因幡守家尙・大瀧土佐守・須田右衞門大夫滿統ニ御書ヲ下サル、兼日金諾ノ通リ、飯山城相違ナク相渡サレ、當家ニ於テ忠義ノ心感悅餘アリ、此上各稼ヲ以テ、其國彌存分ニ任セラレ、計策油斷有ヘカラス、偖又、春日彈正忠、今般無二忠信有ヘキノ旨申越ス、コレニ依テ、差圖ニ任セ、御朱印ヲ遣ハス、言詞ヲ費スニ及ハスト雖モ、國家ニ於テ精功激勵シテ、永ク民心

ヲ安スヘシ、各催促此ニ過クヘカラサル由公命アリ、其御書云、

兼日如申定候、飯山(信濃)之地無相違被相渡候事、誠忠信感悦不淺候、乍此上、各以稼、其國彌任存分候樣、計策任置候、然者春日彈正(勝賀)忠、今般可抽忠信之由被申越候、旁任差圖朱印差越候雖無申迄候、一功有之樣催促可被申候、猶以可申候、恐々謹言、

一功アルベキ催促

六月廿日　景勝

市川治部少輔(信處)殿
河野因幡(家尙)守殿
須田右衞門(滿統)大夫殿
大瀧土佐守殿

須田滿統
大瀧土佐守

○景勝、信處ニ地ヲ宛行フコト、十三日ノ條ニ、又、飯山ノ守備ヲ定メ、定書ヲ岩井昌能等ニ付スルコト、八月七日ノ條ニ見ユ、

景勝、駒澤主税助ノ歸屬ヲ賞シ、其領地ヲ安堵セシメテ直奉公ヲ復シ、且ツ、本庄山ニ出陣セントスルニ因リテ策應セシム、

〔歷代古案〕四　○羽前

今般、無二可有忠信由、感悅候、然間、任申旨、本領不可有相違候、再可爲直奉公者也、仍如件、

直奉公

天正十年
六月廿日　景勝御朱印
駒澤主税助殿

今般可有御忠信之由、別而御感候、依之御朱印則相調進候、此上無二一功之御稼尤候、廿六日ニ者必本庄山可爲御陣取之條、被得其意、如何共其中時宜成就候樣ニ、御圖尤候、恐々謹言、

（朱書）「天正十」
六月廿日

直江兼續

駒澤主税助殿

（附記）「駒澤城主駒澤山城守隱居ノ後常閑ト號、男主税助、主税虛空藏山ニて打死、弟源五郎若輩故常閑被召出候處、庄内ニて打死、源五郎跡式ニて候、源五郎男與兵衞大坂ニて打死、與兵衞弟與三兵衞跡式ニて、與三兵衞男權之丞、」

二十三日、己酉、越中松倉城將須田滿親、直江兼續ニ、同國ノ諸將、皆景勝ノ出馬ヲ待チテ兵ヲ動サントスルヲ答報ス、

〔上杉家古文書〕

御書謹而拜見、忝奉存候、仍而當表之儀、何も御出馬相待、見合立仕體候、隨分計策油斷不申候、子細之段、富永備中守如見聞可被申上候、此等旨宜預御披露候、恐々謹言、

富永備中守

須田相模守　滿親（花押）

（天正十）六月廿三日

直江與六（兼續）殿

明智光秀山崎ニ敗死ス

二十五日、辛丑、是ヨリ先、能登ノ將溫井景隆・三宅長盛等、越後ニ在リ、京都ノ變アルヤ、能登石動山天平寺ノ僧徒ト策動シ、景隆等歸國シテ荒山ニ城ク、是日、佐久間盛政、荒山ヲ攻メ、景隆等敗死ス、尋デ、前田利家、石動山ヲ攻メテコレヲ平グ、

〔中村不能齋採集文書〕三

能登ノ一

昨日者、預尊書拜閲本望至極存候、卽御狀佐玄（佐久間玄蕃盛政）へ持遣候、仍、今度於山崎（山城）明知（智）及合戰討死仕之由被仰聞候、誠以各達本意候之段、大慶不過之候、御心底奉察候、就其爲先勢伊州（柴田勝豐）・三左衞門（柴田勝政）・久右衞門（佐久間安次）殿御出陣之由承候、彼表一左右次第、可被出御馬之由尤存候、拙子も可成其意候、然者不實ニ候へ共、爰許一揆之取沙汰申候間、端（羽咋）郡・鹿島二郡ニ取出普請申付候、當國牢人共も、舟を相集、當浦（七尾）へ可罷上造意仕之由風說候間、人數召連、可罷立段致遠慮候、然共御出陣ゟ付てハ、仕置之段申付、馬五十、百之體よても御供可申候、御注進次第候、委細佐玄へ申入候之間、可有御演說候、猶使者申含候、恐々謹言、

揆七尾ヲ攻メントスル風說アルニ因リテ利家京都ニ出陣スル能ハズ

（天正十）六月十七日

前又左

利家（前田）花押

柴田勝家（柴田勝豐）柴修様　人々御中

〔加藩國祖遺文〕

態以書簡仲愚意候畢、仍雖不實之儀候、能州之國主（士カ）溫井・三宅兄弟、近年雖在越後、就信長公之儀、伺時節、語越後勢、成歸國之望、衆口同音ニ申噂候若於事實者、注進次第御加勢奉賴候、恐惶謹言、

六月十九日

前田又左衞門尉

利家判

柴田修理（勝家）殿

佐久間玄蕃（盛政）殿　人々御中

天正十年六月二十五日

先日申談候、遊佐・溫井・三宅、昨廿三日越後勢同道仕、石動山(能登)江取入、近邊あら山(荒)と云所を要害ニ構候ハんと、今曉鍬初之由申來候、今明之間不レ去二兩葉一、可レ用二斧柯一覺候、早速於二御合力(者脫カ)一可レ爲二本望一候、恐惶謹言、

六月廿四日　　前田又左衞門尉　利家判

柴田修理殿
佐久間玄蕃殿

〔溫故足徵〕○加能越古文叢三十八所收

尙以、此方ニ御入候時者、未御滯留も可レ有レ存、卒早之馳走申候段、一入御殘多存候、御次手候ハヽ、惟道(マヽ)次殿へ御心得賴入存候、以上、

遠路御使札本望至極候、如レ仰爰許御堪忍之刻、爲レ何馳走不レ申候、于レ今御殘多存盡(居カ)候、然者御手前御仕合可レ然之由、滿足不レ過レ之候、將又、能州表之仕合之義(儀)被二仰越一候、定而首尾可二相聞一候、石動山退治之刻、新山(荒)興申古城ニ、溫井・三宅取籠候處、拙者一手ニ而乘崩、壹人も不レ殘ゐけをいニ仕候、手を碎候段後々相聞可レ申候、左候へハ、越中表ニ敵今少相渡候間、來十八日ニ令二出陣一、見合可二討果一覺悟候、早々預示候段畏入存候、尙自レ是可二申入一候、恐々謹言、

越中ニ少敵アリ

八月十六日　　佐玄蕃助　盛政（花押）

〔長家記〕○加能越古文叢三十八所收

御返

今度就レ企二逆心一、彼寺領(天平寺)悉令二沒收一候、然者其方知行中ニも有レ之由候、雖レ然重々御理之事候間、爲二新知一遣レ之候、全可レ知二行一者也、仍如レ件、

天正拾　八月廿九日　　利家(前田)判

長九郎左衞門殿(連龍)　御宿所

利家天平寺領ヲ沒收シテ長連龍ニ宛行フ

〔加賀(金澤)前田家譜〕一利家事跡

利家既ニ軍ヲ旋シ、急ニ光秀ヲ討ント議シ、將士ヲ高松ニ屯集シ、自ラ百餘騎ヲ從ヘ、尾山(金澤)ニ詣リ、佐久間盛政ニ說クニ復讎ノ義ヲ以テス、盛政浮世ノ常ト云テ之ヲ拒ム、將ニ北莊(越前)ニ赴キ、柴田勝家ヲ促シ、與ニ南上セントシ、小松ニ抵ル、諜者變ヲ告テ曰、石動山ノ僧徒亂ニ乘シ、密ニ溫井景隆・三宅長盛二賊ヲ招キ、亂ヲ作ントスト、利家卽チ七尾ニ還リ、僧徒ヲ召シ責テ曰ク、汝等浮屠ノ徒ヲ以テ、何

利家途中

ヨリ七尾ニ還ル

爲ソ狒猖スル乃チ爾ル前監(鑑)叡嶽ニ在リ、若シ改圖セスンハ余レ兵ヲ遣ハシ、一山ヲ夷滅シテ噍類無ラシメン、汝悔ルモ及フ靡ケント、僧徒震恐シテ誓書ヲ奉ケ、宥サレンヲ請、乃チ之ヲ赦ス、僧中猶執迷シテ悛タメサル者アリ、衆ヲ脅シ、二賊ヲ招ク、二賊大ニ喜ヒ、兵ヲ景勝ニ乞フ、景勝其將小南内匠・筒井雅樂助等ヲメ兵三千ヲ發シ、二賊ヲ助ケシム、二將等軍艦ニ乘リ妻良(越中)港ニ抵ル、廿三日、石動山ニ入ル、廿四日軍ヲ荒山ニ出シ、弓銃ヲ具ヘ、塹壘ヲ築クニ垂ントメ日已ニ晡ル、期スルニ詰旦ヲ以テ軍ヲ徙サントス、利家警ヲ聞キ、大ニ怒リ、急ニ之ヲ擊ント欲ス、麾下ノ將士多ク府中ニ在ヲ以テ、大舉スル能ハス、因テ書ヲ佐久間盛政ニ貽リ、賊ヲ挾擊セント請フ、盛政兵二千五百ヲ發シテ高畠ニ至ル、利家蓐食シテ七尾ヲ發ス、廿五日黎明、芝嶺ニ至ル、賊衆ノ荒山ニ赴クニ遇フ、利家左右ヲ麾シテ之ヲ擊ツ、賊潰ヘ走ル、景隆・長盛、荒山ニ入ル、盛政三尾路ヨリ之ヲ攻ム、賊支ル能ハスシテ皆首ヲ授ク、吾ケ先鋒高畠定吉、東谷ヨリ石動山ニ薄ル、長連龍・村井長頼・奥村永福・仁王門ヨリ進ム、賊將遊佐某僧徒ヲ悉シテ之ヲ拒ム、栂野善次郎・篠原一孝・小塚八右衞門・富田助三等衆ニ先ツテ之ヲ衝キ、直ニ數十人ヲ殪ス、全軍之ニ乘ル、連龍人ヲシテ火ヲ縱タシム、賊大ニ潰走シ、崖谷ニ轉墜シテ死スル者算ナシ、〇下略

景勝三千ノ兵ヲ以テ石動山ノ僧徒ヲ援ク

〔寛永諸家系圖傳〕百四十一　堀田正秀新右衞門尉、のち帶刀にあらむ歟、能登の畠山義則沒落のとき、その家老溫井備前守・三宅備後守のがれて越後よゆき、景勝所よ寓居を、こゝゆへよ、織田信長、柴田勝家をつかハし、越前を守らしむ、前田利家を能登よあり、信長死して乃ちよ、能州石動山の僧徒、潛よ人を越後よたゝハし、溫井・三宅兵を景勝よ借て石動山よいさゝ、利家加勢を柴田よこふ、柴田の姪佐久間玄蕃允を加賀よあり、則二千五百人を率して石動山よいさり、戰ひ敗る、溫井討死よを、三宅長刀をふりて數人をころを、正秀大よ呼、いとみ戰ひ、鎌鑓をもつて三宅をつき終をし、そ乃首をきゝ、時よ天正十年六月二十四日、

〔越登賀三州志〕　能登石動山天平寺ノ狡僧、石動山ハ能登分界ノ地ニアリテ、最高山ナリ、僧徒多ク其險ヲ恃ンテ驕慢シ、沙門ノ道ヲ忘レテ介冑矛戟ヲ貯ヘ、己ガ心ニ乖ケハ、人民ヲ苦シム、故ニ其睚眦ニカヽリテ殺戮セラルヽモノ多シ、且平日溫井・三宅ニ志ヲ通シ、能州ヘ歸復セシメントス、客歲我公石動山邊ニ狩ス、狡僧等以爲ラク、僥倖也、公ノ七尾ニ歸リタリ、狡僧空シク中途ヨリ歸山メ志ヲ失フ、景周按スルニ、仁君天護アルコト和漢古今此類尤多シ、天其人ヲ助クル者疑フ可カラス、　姦計ヲ溫井景隆・三宅長盛ト前年ヨリ二士越後ニ潛居ス、合セ、能州ヲ奪領セントス、〇中略斯テ狡僧猶虎狼心ヲ懷キ、一人ノ辨僧ヲ越後ニ間行セシメ、溫井・三宅ノ爲ニ公ニ敵セント姦策ヲ言送ル、景隆等抃躍シテ喜ヒ、渠カ爲ニ援兵ヲ景勝ニ乞フ、景勝乃介士ヲ與フルコト若干也、因テ溫井・三宅カ將山庄藤兵衞・小南内匠・筒井雅樂・廣

瀬隼人・鳥藏内匠等軍儲ヲ議シ、甲兵三千ヲ率イ、兵艦數十帆ニテ本月廿二日（太閤記作二十三日）ノ黎明ニ、越中妻良浦（景周按スルニ、妻良今ハ女良ト書テ、メラト唱フ、射水郡ノ大境村ト鹿島郡ノ大泊村トノ間ニアル地名也、古戰記或ハ兎良トカキ、又目羅ト書ク、傳寫ノ誤也、此地名今ノ射水郡圖ニハナシ、）ニ到ル、是ヨリ石動山ニ上リ、天平寺ノ般若院快存・大宮坊立玄、（按スルニ、今ノ石動山衆徒ノ内、大宮坊ハ存セス、一本加寶官坊萬藏院、等トレトモ般若院ハ存セス、）商議シ、廿四日堡障ヲ荒山ニ（鹿島郡ニアリ、又新山ニモ作ル、此山ノ形四方ニシテ升ヲ覆タル如シ、因テ土人升形山トモ云、二方ハ射水郡小瀧村ノ地也、此山ノ腰通リ、芹川村ヨリ越中道、是ヲ荒山越ト云、此荒山ヨリ北ノ方ヘ高低三十町許登レハ、石動山也、芝峠ト云フモ此間也、又一圖ニ般若院ノ砦ヲ石動山ノ北ニ圖ス、可ニ追考、按スルニ、末森記等ニ此荒山ヲ勝山ニ作ル非也、勝山ハ山名ニテ、芹川村領也、此山ニモ堡アレトモ、此時ノ遺蹟ノコト不レ詳、荒山ト混ス可カラス、或ハ荒山ノ勝山ナト、書タル書モアリ、皆穿鑿ナキ者、猶予能州古墟考中ニ詳也、一書ニ荒山ハ、石動山ヨリ一里ト云、般若院討死ノ地、今甲池トテ涌水アル所ト云、）築キ、堞外柵過半成テ日既ニ晡ル（一本作曲江、）浄定、景勝ノ命ヲ承テ三千人（一作八千人）ヲ帥ヒ、艦ヲ放チ、越中ノ虻ケ島ニ（此島射水郡ト能登ノ界ノ大境村姿村ノ向ニ見ユル島也、女良ナトモ此スジナリ、一本虻ケ島ヲ阿無屋ニ作ル、又虻ケ島ヲ一本ニ越中ノ目羅蛯島ナトトアリ、）至リ、溫井・三宅ヲ救ハントスルニ、既ニ皆斃レヌト聞テ越後ニ歸ルト云フ、

〔祕笈叢書〕○加能越古文叢三十八所收

一聞見雜錄（一名士林談叢云）

謙信ヨリ七尾ノ城代トシテ、越後ノ住人鰺坂備中ニ、越中ノ住人轡田肥後・長惣筑前ヲ相添、右ノ三人ヲ七尾ノ城代ニ置、并國侍ニ先知ノ十ケ一宛ヲ遣シ、右三人ノ與力ニナシ、昔ノ寺屋敷ニ置、六七年ヲ經テ國侍同事（時）ニ謀叛ヲ發シ云々、本丸ニ入替ツテ前後三年國ヲ治ル、其後信長公ヨリ菅谷九右衞門ヲ大將トメ、前田又左衞門殿原隱岐守・不破彦三右四人能州ヘ打入玉フ、菅谷九右衞門ハ、信長ヨリノ御意ト披露シテ國侍ニ云付、游佐美作守・其弟伊丹・同名游佐長門守郎等四人、已上七人ヲ討捕、其首アツチ（安土）ヘ送ル、其後國一遍ニ治リシカハ、信長公ヨリ前田又左衞門殿ニ能登ノ國ヲ被下、但、鹿島半郡ハ長九郎右衞門拜領ニテ、又左衞門トノヘ與力ス、國侍モ能登ノ國ヲハ、ハラハレシカハ、越後ヘ落、然モ國侍鰺坂備中ニ心替セシ事ヲ、謙信猶子喜平次景勝イキトヲリ玉シカハ、越後ニモ堪忍難成ニヨリ、能州石動山ノ衆徒ヲ賴、衆徒ナンナク一味ス、其比信長公爲ニ明智討レ玉シカハ、國侍是ニ理ヲ得テ、同年ノ六月晦日ニ越後ヨリ石動山ニ移ル、（下略）

〔荒山合戰記〕　能登國石動山衆從蜂起、付同所荒山合戰之事

天正十年六月、能登國ニモ一揆動亂ス、其故ハ、昔日織田信長ノ爲ニ、己カ所領ヲ被ニ追出シ諸侯大夫、或ハ地頭代官莊官等、信長ノ横死ヲ聞テ、時ヲ得テ一揆ヲ企ケル、其中ニ能州ノ守護職畠山修理大夫義則カ八臣神保安藝守・正次・長九郎左衞門尉信實・溫

井備前守實正(隆カ)・三宅備後守正(長盛イ)數・平式部少輔盛高・遊佐河内守長員・譽田隼人正正豐・伊丹左衞門尉勝詮ト云者アリ、遊佐・溫井・三宅ハ、近年長雄(尾)喜平景勝ヲ賴テ越後ニアリ、又溫井カ郎等ニ小南内匠助・筒井雅樂助・廣瀨隼人正・山莊藤兵衞尉、幷三宅カ郎等馬(島)藏内匠助・小山田甚五郎兵衞尉ナト云大剛ノ者アリシ、然ルニ石動山ノ衆徒、幷ニ彼所ノ溢者共カ方ヨリ、使ヲ越後國ヘ遣シ、遊佐・溫井・三宅カ方ヘ云送ケルハ、其地ヘモ定テ聞エ侍リナン、當月二日、織田信長卿、明智光秀カ爲ニ京都本能寺ニ於テ不慮ニ討レサセ給ヒタリ、加樣ノ時節、急キ能州ヘ御入國候ヘシ、當山ノ衆徒等ハ不及申、國中ノ寺社鄕民モ、爭カ舊好ヲハ忘レ侍ルヘキ、面々心ヲ一ニ集メ、合力仕ルヘシト、衆儀(議)一決ノ上ニテ、斯ハ申送侍トソ告タリケル、三人ノ輩大ニ喜悅シ、是天ノ與ル所也トテ則同心ノ反翰ヲソ遣シケル、大衆是ニ得力、サラハ要害ヲ構ト(ヨ脫カ)密々ニ石動山ヲ要害ニテ構ケル、○中略溫井・三宅・遊佐ノ三大將ハ、石動山般若院快存・大宮坊・火宮坊・大和覺笑等ヲ相語ヒ、都合其勢四千三百餘人、荒山要害普請ノ爲出張シタル處ニ○下略

二十七日、癸丑、是ヨリ先、景勝、信濃木曾義昌ノ動靜ヲ探ル、是日、春日山城守將黑金景信・桐澤具繁、義昌ノ深志侵略、及ビ上信濃ノ形勢ヲ景勝ニ報ズ、尋デ、小笠原長時ノ舊臣等、長時ノ弟貞種ヲ越後ニ迎ヘ、景勝ノ援ヲ得テ深志城ヲ復シ、義昌ヲ逐フ、

義昌深志ニ陣ヲ張ル

上信濃小屋揚ゲシテ正體ナシ

〔上杉家古文書〕

先日木曾(信濃)へ被指遣候御中間、昨廿六致歸府候間、卽其元へ爲登申候、樣體委可被成御尋候、木曾殿者ふかし(深志)と申所ニ張陣之由候、悉上信濃小屋揚仕、無正體樣候由、彼者申事候、隨而其御表近日被思食御儘之由、萬民大慶不過之奉存候、近日者上口之說一向ニ不承候、相替儀御座候者、急度注進可申上候、此旨可預御披露候、恐惶謹言、

（天正十）六月廿七日　桐澤左馬亮　具繁（花押）

黑金兵部少輔　景信（花押）

直江與六殿（兼續）

〔壽齋記〕○小笠原代記所收　貞慶公松本ヘ御本意之事

一同年（天正十）六月、信長（織田）公御生害ヨ付、亂國ヨ罷成候、依テ最前追出ヒ當悅樣（小笠原貞種）、越後ヨ御座候而、景虎の子景勝より、梶田・八代兩人之物頭ヨ、侍貳百騎被差添松本の城へ御越被成候付、兩郡（筑摩安曇）の侍、國主と奉迎候、○下文ハ、七月十七日ニツヾク、

貞種梶田八代ノ二人及ビ二百騎ヲ以テ深志城ニ入ル

〔岩岡家記〕○笠原大成附錄所收　一同年(天正十)六月、木曾殿(義昌)、信長公へ御目見へ此爲ヨ、美濃國太田迄御上り候ニ付テ、拙者式も供仕、太田迄參候折節、信長公御切腹之よし申來、木曾殿草々(早)深志(信濃)へ引入申され候、其時、二木一類打寄、此砌貞慶公御本意をと望候へとも、被成御座候處知ヲ不申候故、先々洞雪(貞種)樣越後ニ御座候故、是をと申談合ヨて、則二木市右衞門(宗久)御迎ヨ參り、洞雪樣越後衆御供ヨて、岡田迄御著被成候、深志へ取掛被申ヨ付、木曾殿ハ城をあけ木曾へ退被申候、則洞雪樣深志へ御移被成候、越後・河中島兩郡の御人數を以て、萬事御仕置被成候事、

木曾義昌深志城ヲ奪フ

義昌木曾ニ退ク

〔實政重修諸家譜〕百八十八　小笠原貞種、號玄也、洞雪齋、永祿十二年正月、兄信定ヒ丶もヨ戰場ヨ乃おもむき、後落髮して洞雪齋と號し、其後上杉景勝に屬して深志城ヨ籠ヲ、終ヨ姪貞慶のために城をゆずわさ、

○小笠原長時、敗亡シテ、其子貞慶ト共ニ、攝津芥川城ニ居リ、後、越後ニ奔リテ輝虎ニ倚ルコト、永祿十一年十月是月ノ條ニ、會津ニ赴クコト、天正六年三月是月ノ條ニ、貞種、貞慶ト戰ヒ敗レテ越後ニ奔ルコト、本年七月十七日ノ條ニ見ユ、

〔參考〕

〔小笠原系圖〕

系圖

長棟　貞朝之嫡男也　母海野某之娘也

長時　長棟之嫡男　母浦野彈正娘也

信定　長棟之二男也　母同ニ長時ニ

僧　長棟之三男也　母同ニ長時ニ

女子　長棟之四女也　母同ニ長時ニ　爲ニ筑輪左衞門佐頼親之妻ニ

貞種　長棟之五男也　母同ニ長時ニ　小笠原彌次郎　清藏　糾方的傳師範兄長時洞雪齋　玄也

長隆　長時之嫡男也

貞次　長時之二男也

貞慶　長時之五男也　爲ニ正嫡ニ

信定

貞種

越中弓庄城主土肥政繁ノ家臣有澤圖書助、其主ヲ說キテ景勝ニ屬セシム、是日、松倉城將須田滿親、同國高野ノ地ヲ與ヘテコレヲ賞ス、

滿親自分ノ合力館分二十村

〔加能越古文叢〕三十八

今度美作守(土肥政繁)殿へ、有御異見、被覆先忠、越府(越中)江御馳走、無是非次第候、依之、自分之爲御合力、高野之內館分廿村進之置候、但、此內栃屋方、中切方江配當御尤候、仍如件、

天正十　須田滿親(花押)

六月廿七日

有澤圖書助殿

政繁圖書助ヲ賞シテ地ヲ宛行フ

天正十年六月二十七日　七月三日

（マヽ）抽依忠節、高野之内本郷一圓ニ出置候、無相違可令知行候、彌、奉公可爲肝要者也、仍如件、

天正十年　八月三日　（土肥）政繁判

有澤圖書助殿

○佐々成政、政繁ヲ、越中弓庄城ニ攻ムルコト、十一年四月三日ノ條ニ見ユ、

是月、景勝、越中櫟原神社ニ禁制ヲ掲グ、

〔櫟原神社文書〕○越中

制札

右於（越中）櫟原社、諸軍勢無道狼藉、堅令停止畢、若此旨於違犯之輩者、立所可被加成敗之由、仰出、被成御印判者也、仍如件、

天正十年　六月　日　（景勝）（朱印）

七月小丁巳朔盡

奉行中

三日、己未、景勝、村山慶綱ヲシテ、兵ヲ信濃海津城ニ進メシム、尋デ、齋藤朝信等ノ諸將ヲシテ、同城ヲ守備セシム、

〔歴代古案〕七○羽前

人數如形相揃之由可然候、就之、明日到于海（津）野邊押詰可陣取歟之由尤候、乍去地衆分別次第可相計由、昨日申付候條、各令相談相働肝要候、謹言、

（天正十）七月三日　景勝

村山善左衞門尉（慶綱）殿○黑瀧城將

西表無事

〔歴代古案〕六○羽前

就致信州貝津在番、御書被下忝奉存候、依之預御切書、本望畏入存候、西表先以無事之樣候、相替儀候者、早速可申上候、當地口之御用心、如御諚不被致油斷候、此段可然樣、御心得賴入候、恐々謹言、

安田彌九郎
能元（花押）
新津丹波守
勝資（花押）
水原平七郎

安田能元
新津勝資

天正十年七月三日

水原滿家　竹俣房綱　桐澤具繁

七月五日

竹俣筑後守房綱（花押）

齋藤下野守朝信（花押）

桐澤左馬助殿（具繁）

五日、辛酉、越後根知城將楠川將綱・西片房家、信濃小谷及ビ仁科ヲ略シ、是日、コレヲ景勝ニ答報ス、

小谷及ビ澤渡ノ質ヲ徵ス　小谷ニ在陣ス

〔上杉家古文書〕

去晦日、御書、信州於小谷之地ニ謹而拜領仕候、然者、澤渡方證人可渡之由被申候條、爰元江罷越候、小谷之證人をと、悉取申候、仁科衆澤渡始證人可相渡之由候ゝ、就參上被申ニ、未請取不申候、御諚被下候、在陣可申候、此等之趣、可然樣ニ御披露所仰候、恐惶謹言、

（天正十）七月五日　西片次郎右衞門尉房家（花押）

楠川出雲守將綱（花押）

（樋口）直江與六殿

○景勝、將綱ヲ、根知ニ在城セシムルコト、六月十日ノ條ニ見ユ、

〔歷代古案〕六〇羽前

福島掃部助歸路、其元仕置堅固之由肝要ニ候、併普請一向無之由申候、兼而之儀ハ不入、當分手前之儀ニ候條、無嫌夜白普請可申付候、五三日中ニ可遣檢使候條、不可有油斷候、謹言、

福島掃部助普請ヲ催促ス

七月九日　景勝公御居判

芋川正元　芋川越前守（正元）殿

同縫殿頭　同縫殿頭殿

西方次郎右衞門尉（房家）殿

平林藏人　平林藏人殿

越中神保昌國等、景勝ニ、能登・加賀二國ヲ併略スベキヲ說キテ出馬ヲ請フ、

〔歷代古案〕

天正十年七月五日

須田滿親ト相談ス
口留嚴重
盆前出馬セバ能加迄併有スルヲ得ベシ

急度致言上候、仍而其國被立御馬、信・申兩州無殘所被屬御手、殊關左表之儀も段々申寄之由、誠天下之御名譽無申迄候、隨而當國之次第、度々須田相模(滿親)守殿迄申上候通、定而可被達上聞候、尤早々以使者可申上候處、嚴御口留之儀候間、乍存無其儀候、此國計策等之儀、須相申談不存由斷(油)候、千言萬句盆前ニ於御出馬者、能・加迄御一變眼前候、委曲直江與六殿迄申上候趣、宜預御披露候、恐々謹言、

小島六郎左衞門入道　全安
寺島平九郎　信鎮
唐人式部大輔　親廣
鹽井宗八郎　職清
神保近江入道　信包

小島全安
寺島信鎮
唐人親廣
鹽井職清
神保信包

（天正十）七月五日

齋藤次郎右衞門　信和
神保宗次郎　昌國

齋藤信和
神保昌國

直江與六殿（兼續）
狩野新介殿（秀治）　人々御中

〔別本〕〔附錄〕

歷代古案十一

乍恐令啓上候、仍渡野邊藏助被罷下候間、兩國之樣子態申上候、

一賀州表之儀、去月廿三日ニ於西河口合戰候而、御山（本願寺）之人數二百餘うちとられ候、又、去月廿八日ニ、山內之口ニて合戰候而、三百七十餘うちとられ候、何も山內衆の勝ニ罷成候間可被得其意候、早速御屋（景勝）形樣被成御出候者、先以三ヶ國ハ其日ニ御利運ニ可罷成候、加・越之諸一僉（揆カ）何もく相待申候、

一當國河上表之儀、并波も明申候、其外要害其何もふ（直）ゝ被申候、就其諸侍諸一僉其表早速被成御出馬候へゝしと相存候、先勝ニ可被成候間、彌早々御調儀專一ニ候、

加賀越前ノ一揆景勝ノ出馬ヲ望ム

天正十年七月五日

五ヶ山白河まても無別義(儀)相待申候間、可被成其御心得候、態筆ニ申度候へ共、有増
卒度々々申上候、委渡藏へ申渡候間、態可被成御尋候、恐惶謹言、（書入「波々伯部三河守事」）
波三

七月六日　秀次

（書入）「黒金兵部少事」○年次詳ナラズ、黒兵様姑ク茲ニ附收ス、参人々御中

六日、壬戌、景勝、西方房家ノ本領ヲ復シ、且ツ、新恩トシテ飯田・嶺岸・千國ノ地ヲ宛行フ、尋デ、小島内膳亮以下信濃・甲斐諸將ノ、景勝ニ屬スルモノ、若クハ降服スルモノ、本領ヲ復シ、或ハ新地ヲ宛行フ、

〔歷代古案〕六○羽前

任理之旨、本領之事者、不及申、爲新恩飯田・嶺岸・千國六百貫文之所出置者也、仍如件、

天正十年
七月六日　景勝公御朱印
西方次郎(房家)右衞門尉殿

〔歷代古案〕三○羽前

近年所持之知行分、不可有相違者也、仍如件、

天正十年
七月七日　景勝
小島内膳亮殿

〔上杉年譜〕二十七

本領不可有別儀候、但、此内井上分、須田可被申付候、仍如件、

天正十年
七月七日　景勝
須田對馬守殿
伊藤丹後守殿
關屋民部丞殿
同新左衞門殿
原豐前守殿
瀧川久兵衞殿
大峽兵部少殿

井上分ヲ須田滿親ニ申付ク

須田對馬守
伊藤丹後守
關屋民部丞同新左衞門
原豐前守
瀧川久兵衞
大峽兵部少

上野本意ノ上三島ノ地山縣分ヲ宛行フベシ

近年所持之知行不可有相違候、幷本領之由候間、上州本意之上三島之地山縣分可出置者也、仍如件、

天正十年
七月七日　景勝

浦野能登守殿

島津忠直ノ救解

吾分事、島津淡路守(忠直)自好、別而令忠信之間、令赦免、其上近年持來知行遣候、向後萬端之儀、島津舌頭次第走廻、可復先忠事肝要候、仍如件、

七月十二日　景勝

市川庄左衞門殿

田子郷石村

吾分事、島津淡路守達而令詫言之間、令免許之間、田子之郷内百貫文、石村之内百貫文遣候條、萬端之儀、島津舌頭次第走廻肝要候也、仍如件、

天正十年
七月十二日　景勝

市川甚五郎

市川甚五郎殿

〔新編會津風土記〕六書　提要之三家士古文書　中村儀右衞門所藏

吾分事、島津淡路守達而令詫言候間、免得者、赦免、其上近年持來知行遣之候、萬端之儀、島津舌頭次第走廻、可復先忠事肝要候也、仍如件、

天正十年　(景勝)(朱印)
七月十二日

關肥前守

關肥前守殿

〔德富猪一郎氏所藏文書〕○東京

自春中忠信之儀候條、可令加恩事雖勿論候、所々相塞故、不任心之條、先以本領案堵尤候、當國彌本意之上、可加扶持者也、仍如件、

天正十年
七月十三日　景勝(朱印)

島津常陸介

島津常陸介殿

〔上杉年譜〕二十七

覺

天正十年七月六日

眞羅田　一三百俵　眞羅田
山田　一百八十俵　山田
北尾張部　一三百五十俵　北尾張部
南郷　一三百五十俵　南郷
吉村　一六十俵　吉村之内
淺野内堀分　一百俵　淺野内堀分
料所　以上
右六箇所者、料所分也、
此外
長沼　一長沼
津野　一津野
以上
右二箇所者、吾分出置者也、
天正十年　七月十三日　景勝

天正十年七月六日

島津忠直　島津淡路(忠直)守殿
香坂一跡　申越處之一儀、於成就者、香坂一跡可充行候、彌、可相稼事肝要候、仍如件、
天正十年　七月十三日　景勝
香坂能登守　香坂能登守殿

額田跡　今度額田跡出置候、可致知行者也、仍如件、
天正十年　七月十六日　景勝
眞島與七郎　眞島與七郎殿

井上分ハ須田左衞門尉計タリ　任望之旨、本領不可有相違候、但、井上分者須田左衞門尉可被相計者也、仍如件、
天正十年　七月廿三日　景勝

天正十年七月六日

仙仁靱負佐　仙仁靱負佐殿

〔歷代古案〕六〇羽前

任望之旨、鹽田郷之内、下郷、本郷三箇村之内上務千五百貫文所出置者也、仍如件、

鹽田郷ノ内下郷本郷三箇村ノ内上務

天正十年　七月廿四日　景勝

小田切四郎太郎　小田切四郎太郎殿

〔大日方文書〕〇信濃

任望之旨、鹽田郷之内前田村之内上務三百貫文出置者也、仍如件

鹽田郷ノ内前田村ノ内上務

天正十年　七月廿四日　（景勝）（朱印）

春日狩介　春日狩介殿

〔歷代古案〕七〇羽前

近年被抱來知行之義（儀）者不及申、其上忠信之間、爲新知小根山七百貫文出置之候、然間如何樣之者横合候共、不可有相違者也、仍如件、

小根山

天正十年　七月廿五日　景勝御判

大室左衞門尉　大室左衞門尉殿

〔上杉年譜〕二十七

近年被抱來知行之儀者不及申、其上忠信之旨、爲新知洗馬曲尾出置之候、如何樣之者横合候共、不可有相違者也、仍如件、

洗馬曲尾

天正十年　七月廿五日　景勝

西條治部少輔　西條治部少輔殿

香坂一跡大岡分

近年持來本領之儀不及申、爲新知香坂一跡并大岡分出置者也、仍如件、

天正十年　七月廿六日　景勝

芋川正元　芋川越前（正元）守殿

〔別本歷代古案〕十五

年來持來本領、無相違可令知行者也、仍如件、

天正十年七月六日

天正十年　七月廿八日　芋川彦三郎殿　景勝

芋川彦三郎

〔大日方文書〕○信濃

今般就抽忠信者、近年持來本領不可有相違者也、仍而如件、

天正十年　七月廿六日（景勝）（朱印）

大日方佐渡守殿

大日方佐渡守

〔中牧文書〕○信濃

今般就忠信、本領之儀何も不可有相違者也、仍而如件、

天正十年　七月廿七日（景勝）（朱印）

日名常陸介殿

中牧平十郎殿

平林藤七郎殿

日名常陸介

中牧平十郎

平林藤七郎

香坂二右衞門尉殿

禰津平左衞門尉殿

同　十左衞門尉殿

同　囚獄助殿

中牧勘十郎殿

日熊宮内助殿

吉原善左衞門尉殿

小田切源右衞門尉殿

小池三郎二郎殿

村越藤左衞門尉殿

市川民部丞殿

太爪□□助殿

平林助兵衞殿

同善十郎殿

若林善右衞門尉殿

香坂二右衞門尉

禰津平左衞門尉同

十左衞門尉同

囚獄助同

中牧勘十郎

日熊宮内助

吉原善左衞門尉

小田切源右衞門尉

小池三郎二郎

村越藤左衞門尉

市川民部丞

太爪

平林助兵衞同善十郎

若林善右衞門尉

以上十八人

七日、癸亥、景勝、上條五郎ヲ能登ニ、須田滿親ヲ越中ニ遣シ、是日、能登島倉泰忠ヲシテ、五郎ヲ佐ケシメ、且ツ、故謙信ノ、泰忠亡父泰明ニ宛行ヒシ領地ヲ安堵セシム、

〔志賀槇太郎氏所藏文書〕○前羽

於能州、亡父孫左衞門尉(泰明)ニ、謙信被宛行候知行分、不可有相違候、然間上條五郎方ニ屬シ、別而可抽奉公事肝要ニ候、仍如件、

天正十年　七月七日　(景勝)朱印

嶋倉吉三(泰忠)殿

〔景勝一代略記〕一天正十年六月二日、上方より信長公明地(智)ニ被討給ふ事相聞候、右之北國口ノ上方衆、信州口ノ森勝藏(長可)、何も取物とり不合遁登也、一隣國ゟ御味方可申由申來付、能登へ上條殿、越中へ須田相模被遣、

○謙信、泰明ニ、地ヲ宛行フコト、天正五年十一月十六日ノ條ニ見ユ、

〔參考〕

系圖

〔畠山系圖〕○畠山義方所藏

義春　上杉彌五郎　上杉民部　畠山民部少輔　法名入庵　義春者畠山義忠子上杉謙信養子、不和ニ而越後牢人之後權現樣江被召出、爲上意本名畠山名乘申候

長則　畠山彌五郎　病身ニ付家督不仕候

長員

義眞　畠山下總守　法名一庵

入庵ノ子五郎ヲ能登ニ遣スト説

〔畠山入庵考〕天正十年七月、信長既ニ死シ、北國諸將多ク西上セルヲ以テ、入庵ノ男五郎ヲ能登ニ遣ハサントシ、島倉吉三ニ命シ、能ク之ニ仕ヘンコトヲ命ス、志賀文書

八日、甲子、上條宜順、村田忠衞門尉ニ、萬疋ノ地ヲ宛行フコトヲ約ス、

〔村田與七郎氏所藏文書〕○前羽

先年以來御懇意之儀難謝候、乍輕少、萬疋之地、本意之上進之置者也、仍如件、

天正十年　七月八日　宜順(花押)

村田忠衞門尉殿

十日、丙寅、上野厩橋城將北條輔廣(參)、惣社ノ地内ヲ富里佐渡守及ビ後閑下野守ニ宛

行フ、

〔上毛傳說雜記拾遺〕三 總社記下

惣社(上野)の内貳十五貫所(文脫カ)、如前々宛行之候、彌以軍役奉公忠信心懸可走廻候者也、仍狀如件、

天正十年壬午七月十日　安藝守(北條輔廣)判

富里佐渡守殿

〔諸州古文書〕十一 信州

惣社之内貳拾五貫文所、如前々宛行之候、軍役奉公忠信心懸可走廻候之者也、仍如件、

天正十年壬午七月十日　安藝守(黑印)

後閑下野守殿

十七日、癸酉、信濃深志城主小笠原貞種、其甥貞慶ト戰ヒ敗レ、城ヲ貞慶ニ致シテ、越後ニ奔ル、

〔壽齋記〕○小笠原代々記所收　貞慶公松本ヘ御意之事

○上文ハ、六月二十七日ノ條ニツヅク、併當悅樣(小笠原貞種)ニ付參候兩人(梶田八代)之者とも、當悅樣ヨ不レ任、我儘ヨ仕置いさし候、依レ之某(仁木壽齋)・弟六右衞門(同盛正)と密々致ニ相談、此國當悅樣御仕置ヨてなく、梶田・八代の支配

小笠原氏遺臣等貞種ニ服セズ貞慶ヲ迎フ

貞慶深志城ヲ攻ム

貞種仁科ちくま通ヨリ越後ニ退ク

深志ヲ改メテ松本ト曰フ

さる間、小笠原殿御國ヨてふく、所詮貞慶茂尋申、此國ヨ御本意させ申、越後勢を逐拂可レ申ヨし談合を極て、御行衞を尋申候所ヨ、三河家康(德川)公ヨ牢人ヨて御座候由風聞承ヨ依て、有賀又右衞門・平澤重右衞門と申兩人を竊ヨ賴ミ、起請文書せ、征矢野甚右衞門筆取ヨて書狀調、右兩人ヨ渡し、三河ヘ越申候處ヨ、兩人之者無レ恙致ニ參著、御返事を取罷歸候、夫より貞慶公三河を御出、伊奈(信濃)の下條ヘ御越、○中略貞慶公御供仕衆、溝口美(貞康)作・犬甘主馬助・茂呂村吉・平林彌右衞門・三村勘兵衞・志津野源之丞以上拾四五人、下條・箕輪の人數二百ばかり、其外鹽尻ヘ參り御禮申上、御譜代衆不レ殘御供也、午七月十六日ニ松本(深志)ヘ御越被レ遊、當悅樣御座被レ成候所ヘ取掛申候、○中略七月十六日夜明方ヨ、當悅樣仁科ちくま(千國カ)通りを越し、越後ヘ御退被レ成候、午十七日の朝、松本の城ヘ貞慶公御移被レ成候て、御本意遊候、此深篠(志)の城と申ハ、天文十九歲庚戌年、野々宮合戰ヨ、貞慶(長時)公御勝、中東ヨ御上りの時より、天正十壬午年迄廿三年ヨ當り、本意を被レ成、松本ヨ貞慶公御名つけ被レ遊候、

〔岩岡家記〕○笠系大成附錄所收　一同年(天正十)七月、貞慶公三河ヨ御座候よしを、二木衆聞申候て、有賀又左衞門と申者を飛脚ヨ進上仕候ヘハ、下條迄御著被レ成、下條殿御取持ヨて、上伊奈迄御著のよし承、二木一類其外合三拾騎ほと御迎ニ罷出候、同月十六日ヨ、宮木

此山野神まて御目見へ仕、夫より下條衆御返し被成候、扨御供申罷歸り候砌り、追々指集、百騎ばかりまて深志へ御著被成候事ハ、同日八つ時分ニ而御座候、夫より城へ取かけ、翌日此四つ時分迄せり合、双方手負死人數多御座候、其上扨ハ被成洞雪樣を、ハ越後へ送り申候、貞慶樣城へ御移り被成候、○下略、赤羽記、寛永諸家系圖傳、小平物語、武德編年集成、信府統記等大略同ジ、

○貞種、木曾義昌ヲ追ヒテ、深志城ニ入ルコト、六月二十七日ノ條ニ見ユ、

家康小池筑前守ヲシテ信濃ヲ平定セシム

十九日、乙亥、是ヨリ先、森長可信濃ヲ退去スルヤ、德川家康・北條氏直等、各、同國ヲ侵掠ス、仍リテ、景勝、同國ニ出馬シテ、氏直ト對陣ス、是日、景勝、戰況ヲ會津蘆名氏家臣遊足庵ニ報ズ、尋デ、氏直等退陣セルヲ以テ、景勝、北信濃四郡ヲ領ス、

〔德川文書〕

信州表計策付而、其國江差越段、太神妙候、此節彌被抽忠節、於粉骨者、急度恩賞之地可申付候、樣子尙山本帶刀可申候、仍如件、

天正十年　六月廿一日　（德川家康）（朱印）

小池筑前守殿

家康有泉信閑等ヲシテ信濃ヲ謀ラシム

家康濱松出發

今度於其表種々計策本望候、仍、兩人らさへ帶朱印差遣之、然者守此旨、彌忠信肝要候、巨細能々山本帶刀可申候、恐々謹言、

七月九日　家康（花押）

小池筑前守殿

〔古文書〕○有泉記錄御用所本　有泉大學頭信閑拜領、同彦五郎信美書上、

東照宮御書

急度申越候、仍、其方何も其表案內者之事候條、本多豐後守（廣孝）父子、大久保七郎右衞門（忠世）・石河長門守（康通）・（康重）・（甲斐）・新府中へ被移候而、信州表之計策畢竟第一候、我等儀も、今日三日出馬候間、頓而其表へ可打出候、恐々謹言、

七月三日　（泉）（信閑）有富大學頭殿　（德川家康）御實名御居判

穴山衆

穗坂常陸介

穗坂常陸介殿

〔譜牒餘錄〕三十四酒井小五郎

一信州十二郡、棟別四分一、其外諸役不入手出置事、

家康豫メ酒井忠次ヲシテ信濃ヲ管セシム

一從國引付候面々、可爲其方計、付信州無一篇間、奉公令退屈、缺落候人、分國可相拂國衆内者上下、共同前事、

一國中一篇ニ納候上も、貳年本知令所務、其上者可被上、十二郡不納間者令本知相違有間敷候、國衆同心同前事、

一國衆同心在國之衆者、其方同前可有走舞、信州一篇之間者、何も可令同心、少も於違亂之輩者、可加下知事、

一信州若不和成、於有相違者、前々知行無異儀、可申付、幷國衆同心同前之事、右條々、永不可有相違、縱先判雖在之、出置上者、一切不可有許容者也、仍如件、

天正拾年壬午　七月十四日　酒井左衞門尉（忠次）殿　家康御在判

家康禰律信光ニ將ニ信濃ニ入ラントスルヲ告グ

〔譜牒餘錄〕三十八　眞田伊豆守附家臣

松平五郎（大須賀康高）左衞門尉のゝさへの御狀、則令披見候、被對當方、可被抽御忠信之旨、祝著之至候、然者御身上之事、聊不可存疎意候、近日其表令出張、萬端可申談候、尙酒井左衞門可申候、恐々謹言、

七月十四日　禰津宮内大輔（信光）殿　○信濃禰津城主

〔千野文書〕○信濃

御本國（信濃）江御越付而一筆令啓候、仍御在所之御親類衆、又者御傍輩衆、此度候間御引付、近日信州面へ御發向付而者、御忠信肝要存候、御自訴之儀者、各可爲御望次第候、丙々氏邦（北條）證文雖可被進置候、貴所御存分通御座候間、無其儀候、全自分之非無屈候、恐々謹言、

七月十四日　齋藤攝津守　定盛花押　○北條氏家臣

（德川家康）權現樣御名乘御書判

北條氏千野昌房ヲシテ一族故舊ヲ催シテ信濃出征ノ日ヲ俟タシム

六月廿五日　千野兵衞尉（昌房）殿　御宿所

〔甲斐國志〕附錄　天正十壬午年、北條臣黑澤上野介繁信ノ文書ナリ、金山衆在栗原筑熊野村百姓所藏

昨日者、各爲御代官兩三人被指越候、御忠節之至、則御陣下江申上候間、定而安房守（北條氏邦）殿以御直書、可被仰越候間、可御安心候、誠自分にゝねゝても、滿足忝奉存候、仍而知行方御朱印相調進之候、於此上者、一圖ニ御忠信可然候、彌□□御進退御取成可申候、然者大手者十二日うん（海野）のへ被進御陣候、くに衆眞田・高坂・潮田、其外信州衆十三頭者、十三日

齋藤定盛

氏直ノ家臣黑澤繁信甲斐金山衆ヲ誘降ス

七月十二

日氏直海野ニ進ム

出仕候間、信州一返ニ被二明一御便(隙)候條、五三日之内甲州へ可二爲御著馬一候、其以後之御陣庭、承屈ケ次第可二申入一候間、御仕宅(度)候て、我々萩原へ罷出候者、早々御出可二然候一、安房守殿御内儀之段、又我々存分之儀、御使衆直段(談)雖二申猶以一拔書一申候、恐々謹言、

信濃ノ諸將氏直ニ伺候ス

信濃平定ノ後甲斐ニ入ラン

尙以、御知行之かこいの御印判、昨日大途(迄)江申上候、參著次第可二進レ之一候、御旗前にてハ大くつの事有之候、加こいもこやも何にも罷成間敷候間、まへひろに申上候、

七月十八日

黑澤

繁信書判　○北條氏直家臣

金山

各衆中

信濃諸將ノ向背

眞田昌幸等景勝ニ屬セント請フ

昌幸等氏直ニ屬ス

〔信濃松代眞田家譜〕乾　三十一代安房守昌幸ト稱ス、(天正十)同年六月、信長、明智光秀カ爲ニ生害アリシ後、上杉景勝、信州ヲ併セント發向スト聞ヘタレハ、昌幸ヲ始メ、蘆田・小笠原等ト會議シ、盟書ヲ以テ上杉景勝ニ屬セント請ヒ、同年七月、北條氏直、瀧川一益ト戰フ、一益大ニ利ヲ失ヒ、上方ヘ逃上ル、氏直其勢ニ乘シ、直チニ信濃國ヘ發向シ、河中島ニ至リ、所在ノ將士ニ對シ、我等ハ武田信玄ノ孫ナレハ、孰モ來テ幕下ニ屬スヘシト觸レタリ、時ニ眞田・高坂・蘆田・小笠原等相議シ、今ニ當テハ與ニ鋒ヲ爭ヒ難シトテ、昌幸ノ家臣目置五右衞門ト云者ヲ以テ、麾下ニ屬スヘキ由ヲ申入ル、然ルニ同年九月、德川家康目置五右衞門ヲ以テ、懇ニ昌幸ヲ招カルヽニ依テ、德川氏ニ屬ス、

氏直信濃小諸城ニ依田信蕃ヲ攻ム

〔乙骨太郎左衞門覺書〕一、足田殿(依田信蕃)御所様(德川家康)に付申之由、氏直(北條)御聞被二成一、則足田ゟ城ヲ(蘆上下同ジ)せめられ候へハ、無勢ふてのふ可しとおもひ、城を明、三澤の小屋へ引籠ゟ申候、其時氏直三澤之小屋迄人數をよせらゝ候へとも、能き小屋ニ而落不二申一候故、小屋之おさへに大たうし(大道寺政繁)を御置被二成一、氏直ハ御引被二成一候、○下略

家康ト氏政ト取合

〔依田記〕○上略其跡へ、氏政之先手信州へ打入、小諸ニ大道寺尾張守入替居申候、家康樣と北條氏政と御取合ニ成、氏政七萬之人數ゟて細井口(碓氷カ)を進發、夫ニ付而常陸介(依田信蕃)ハ、春日山之奥三澤小屋與申處ゟ籠り被二居一候、蘆田小屋と申ハ此事ニて御座候、○下略

德川北條兩氏對陣

〔鎌倉九代後記〕義氏

天正十年七月廿七日、大權現(德川家康)甲州へ御動座、同八月六日、北條氏直同國若見子ニ出張對陣ス、同十二日、北條左衞門佐氏能、氏政弟故府中ニ入ル、大權現ノ兵士戰テ大キニ勝ツ、同十月晦日、和睦アリテ、甲・信兩國ヲ大權現ノ御領トシ、上條(野カ)ヲ北條カ國ト定メテ軍ヲ引ク、

兩氏和睦

〔下條文書〕○下條三彌氏所藏、長野縣史蹟名勝天然紀念物調査報告十輯所收

急度令啓候、仍今日七日至大宮（駿河）著陣候、左様に候へは、一両日之内諏訪（信濃）表へ可打出候間、從此方其表在之衆、何も被相談、一刻も被差急、彼表へ被打出肝要候、少も無御油斷様尤候、尙追々可申述候、恐々謹言、

七月七日　家康（花押）

下條兵庫助殿（頼安）　○信濃吉岡城主

下條頼安

家康景勝ノ川中島出馬ノコトヲ下條頼安ニ報ズ

兩通何も令披見、本望候、仍小笠原方（貞慶）、被相談、箕輪（信濃）被引付、其上高遠（同上）被攻取候由、尤無比類儀候、然者至彼地被相移候由、被苦心候、將又高島（同上）之儀、種々懇望之子細候、一両日之内攻取可申候歟、喜平次事、河中島へ出張候、併差悶不可有之候、其表差置衆相談、早々神宮寺（諏訪）へ被押出、專一候、委曲期後信候、恐々謹言、

七月十五日　家康（花押）

下條兵庫助殿

能登越中先忠ヲ復ス

〔山田縫殿右衛門所藏文書〕○上杉家記所收

便札快然之通候、仍能越中悉復先忠之間、信州令出馬、一變之姿候、今一両郡相支候所、北條氏直出馬、號臼井興峠被越之條、成幸之思、此節遂一戰、東北之可付是非儀候處、如何分別候哉、爰元谷津波之構節所不出合候、元來如見聞之、無夫甲（腑）斐臆病之奴原、笑敷有様候、彼徒自滅退散之仕置可納馬之間、其刻可申屆候、恐々謹言、

七月十九日（天正十）　景勝（花押）

遊足庵（淳相）○蘆名氏家臣

氏直ト決戰セントス

氏直臆病ニシテ出デズ

〔上杉家古文書〕宗心（景勝）様御代之御事

一天正十年七月、信州河中島之御陣、

〔上杉米澤家譜〕七月、景勝信州ニ入リ、北條氏直ノ不意ニ出ツ、氏直敗走ス、遂ニ四郡ヲ定ム、

〔景勝一代略記〕一、隣國ゟ御味方可申由申來付、能登へ上條殿（五郎）越中へ須田相模（滿親）被遣、屋形様ハ信州御出馬被成、海津へ御在陣有、四郡御仕置被成、何も侍衆悉出仕申候、然處、三河ゟ家康公大軍ニて上ノ諏訪口へ出張也、小田原ゟ氏直大軍よてうすゐ（碓氷）打越、佐久之郡へ出、最前御味方仕高坂彈正（春日勝賀）、氏直へ忍々逆心之様子申通、此事屋形様被爲聞候得共、高坂夢よも不知、出仕申處を、七月十三日めしとり、御成敗也、偖御人數ハ、在々家、陣々忍々ニ被指置、御手廻小勢ふる様ニ被成、一左右次第ニ罷出よと被仰付、直江山城（兼續）、大國但馬、泉澤河内（久秀）手許被召連、海津近邊清野くらかけ（鞍懸）山のふもと、赤坂と

上杉部將ノ能登越中ヘ進出

景勝春日勝賀ヲ成敗ス

くらかけ山

馬ヲ赤坂ニ立ツ

云所ニ御馬を立られ、御たさ(を)お備させ、山城守其外三十騎被召連、日の丸御旗斗よて、くらかけ山へ御あかり、關東勢を御覽被成、敵是を見付、たゝ事ふらぬ御行、いか樣なる事ならんとおもひ、又、右高坂成敗之儀相聞へ、氏直矢手をハ八幡表へ置、三町斗備を立、行もふく引退也、先ゝけ衆志田・室賀・禰津・望月・蘆田此衆關東衆先かけしけるか、引足よも後ゝりニ成、早々上ル也、四萬餘の人數、其日うすゐ迄引、此事ニハ一萬ほとよて御出有、其後信州四郡御仕置被仰付、御歸陣也、

氏直退軍

〔越後古實聞書〕　○上略、織田信長生害ノコトニカヽル、扨、隣國の信長勢、取ル者もとりあへぬ、海道混亂するとなり、依て諸國ゟ、越後へ注進申ハ、早々御馬を被出、御仕置被遊候へと、使者飛脚ハふる雨のとし、景勝公も御悦ひ、越前(能登)の國へ上條殿越中國へ須田相模守御向被成、近所ふれバ信州へ被爲出、海津よ御在陣被成、三河家康公ハ大軍を卒(率)て是も信州上野(の)諏訪よ御馬をたてらゝける、又、小田原氏直は、關東勢四萬餘りにて、うすい峠を越して、信州さくの郡へ出張也、上方は羽柴筑前守秀吉公、明智日向守退治し給ひて、上方を引付給ふ、景勝公は、越前越中へ御人數を向られ、御留守居さしたかれ、僅御人數七千餘り也、信州一國へ三大將集り給ひ、互に爭ひ賜ふて、往古海津の城代、春日彈正と云者、ちいさ方(縣)々之者共と內談して、氏直へ忍て申入ける、御味方可申候、川中

海津城代春日彈正ノ內應

島は越後口にて、海津の城より入なれば、景勝公海津に居給ふ間、川中島へ御馬被寄給はゝ、越後口しきりに御一心有べし、其時浦(裏)切可仕、左樣ならば、信州は不及申ニ、越後迄子細有まじきと、起請を添て遣ける、氏直大悅、軈而返狀に、知行の朱印差添て歸さる、七月十三日明合に、夜廻りの手にて彼飛脚をとかめ、怪敷體なれば搦捕、問ければ、有儘に申間、則景勝公へ致披露、候處に、御覽有て、春日彈正被召寄、御からめさせ、七月十三日に、海津にて御成敗也、近頃御味方申、無間逆心を企、命を失事、淺間敷次第也、翌十四日には、氏直、春日彈正が注進にまかせ、ちいさ方の待望月・根津・眞田・室賀・蘆田五人案內して、四方の人數を引供して、川中島へ出らるゝ、景勝公は海津の城を出玉ひ、夫より五里へたて、清野鞍懸山へ御登り、紺地に日の丸の御馬印みねに御立、御床几をめされ、御近習の人數は、直江・大國・泉澤三人の手に、旗本三千騎斗り也、麓の赤坂に、其外の旗本を備させ、殘る人數は、在々へ御賦り、森林の內、或は家陰より小旗を出し被置、亦海津の城より、鞍懸まて、山里に小旗をたてゝ、關東勢を目の下に御見物なり、此山の高く四方二十里の所は見ゆる也、氏直は、此手たてにおそれ、夥敷人數と云て、一家の衆と御相談也、越後の軍勢如何ほとも難斗備なり、たとひ越後勢の一倍味方有りとも、不知他國の事なれば、いかゝはせむと有り、然る所に、春日彈正御成敗の

景勝鞍懸山ニ陣ス

海津城代ニ屋代越中ヲ置ク

事きこへて、彌氏直力をおとし、早々引んとて退るゝは、三郎殿亂の御手並みを聞及、恐れての事也、合戰あらは、越中(後)勢は僅か七千、關東勢は四萬なれば、危かりける事共也、扨ちいさ方の者共は、氏直には捨られ、景勝公へは不儀をいたし候へは、三河家康公へ隨ひ、家康公三川江御歸陣被成也、景勝公も、四郡の御仕置被成、海津の城代に、屋代越中を居置れ、四郡守護代ゝ、山浦源五國清被差置て、七月下旬ゝ御歸城也、

〔北越家書〕　同年(天正十)七月、森勝藏長可ヲ始、信州割據ノ諸將、伊奈郡ノ毛利河内守秀政、小諸ノ道家彥八郎正榮以下、織田家ノ被官等、追々京都へ逃登リシ故、小田原ノ氏政父子、五萬餘ニテ、信州川中島ヘ出張、景勝主モ八千ノ兵ヲ率ヒ、筑摩川下米宮ノ瀨ヲ隔テ、別隊ヲ一隊ニナシ、獅振龍ノ丸備ニ作テ、北條家ノ多勢ヲ事共セス、數日對陣、竟ニ同(七)月下旬、關東ノ大軍ヲ追拂、川中島四郡當家ノ所分ト成、飯山ニ岩井備中守、逆(坂)木ニ村上源五藏人、長沼ニ嶋津月下齋、市川ニ市川對馬、大室ニ大室源次郎、福島ニ須田左衞門尉、綱嶋ニ綱島豐後守、寺尾ニ寺尾傳左衞門、稻瀨ニ稻瀨民部丞、善光寺ニ栗田淡路守、猿カ馬場ノ麓龍王ニ清野左衞門尉、牧島ニ芋川彥三郎ヲ居置、其餘ハ上條民部少輔、此後海津城ニ在住、及藤田能登守信吉、上倉治部少輔信綱等ニ宛行レ、先方ノ人質ヲ召連、景勝主越府ヘ振旅ト云々、

信濃諸城ノ部署

〔關八州古戰錄〕十二　北條氏直信州表在陣事

眞田小幡等景勝ト決戰センコトヲ氏直ニ勸ム

瀧川左近(一益)將監上洛シテ後、信州小諸ノ道家彥八郎正榮、伊那ノ毛利河内守秀政、川中島ノ森勝藏長一(可)等、追々上方ヘ馳登リ、甲府ノ守護代川尻肥後守秀隆モ、岩窪ト云處ニテ、地下人ノ爲ニ打殺サレ、甲斐・信濃ノ二州、既ニ無主ノ地ト成ルニ付テ、氏直ハ、元ヨリ信玄ノ外孫ナリケレハ、筋目ヲ謂ハヽ、兩國ヲ支配セン事違義有ヘカラストノ評議ニ依テ、七月上旬、氏直五萬五千餘騎ヲ率シ、眞田・小幡等ヲ嚮導トシ、碓水(氷)峠ヲ越テ、川中島ヘ出張セラル、于時越後ノ上杉景勝、八千餘騎ヲ率テ同ク川中島ニ出馬シ、筑摩川下米(アメノ)宮ノ瀨ヲ隔テ屯ヲ張、數日ノ間對陣ナリ、眞田安房守・小幡上總介、氏直ヘ向テ、景勝ハ主戰、味方ハ客戰トシテ、大軍日ヲ經テ對陣ノ事、且ハ軍衆ノ勞ト云ヒ、且ハ資粮ノ費莫太ト云ヒ、旁以テ一戰ヲ懸ラレ然ルベキヤト諫ケレハ、氏直是ヲ聞テ、景勝ハ年若キ大將ナレハ、假令輝虎ノ餘(威)アリトモ、是非ト思ハヽ、何時モ蹈潰サンニ手間入ヘシ共覺ヘス、然レハ渠ヲハ捨置テ甲斐・駿河ヲ切敷ン事、先務タルヘシト答ラレケレハ、兩人重テ申ケルハ、甲州ノ事ハ、德川殿物早ク曾根内匠助昌世・岡部次郎右衞門正綱下知シテ、地下ノ侍等ヲ召出シ、本領安堵ノ墨付ヲ與ヘラレ、手遣ヒ專ラナル由承リ及ヒヌ、最初ヨリ然ル所以ヲ御内存アルニ於テハ、上州表ヨリ直ニ甲府

氏直信濃ヲ棄テヽ甲斐ヲ略セントス

へ押入玉ハヽ、早速ノ御利運タルヘキニ、當地ヘノ御發向悉皆無益ノ御働ナリト申セハ、否々家康ハ心安キ敵ナルソカシ、古來ヨリ持傳ヘノ三・遠ノ兩國マテモ、今見ヨ當家ノ手裏ニ入ンスル者ヲト、支モナケニ申レケレハ、陸奥守氏照ヲ始、爪牙ノ面々、此議ニ同シ、眞田・小幡カ異見ヲ用ヒス、景勝ト和解シテ、筑摩・更級・高井・埴科四郡ニ連接セル川中島ノ地ヲ、越後ノ支配トナシ、氏直陣ヲ拂テ、同國梶ケ原ヘ打出ラル、是ヨリ甲・信ノ間ニ於テ、大神君ト對陣シ、度々ノ迫合有シナリ、〇管窺武鑑、北越軍記、武德編年集成等略ス、

景勝ノ武運ヲ祈ル

景勝上洛セバ天下ヲ掌中ニ收メ得ベシ

二十六日、壬午、高野山無量光院僧清胤、景勝ニ、祈禱ノ卷數ヲ贈リ、且ツ、其上洛ヲ促シ、紀伊三ケ寺ノ僧兵ヲ以テ、コレヲ迎ヘンコトヲ請フ、

〔上杉家古文書〕

猶々、爰許之樣子、花藏院迄申入候之條、可被申上候、

態令啓上候、抑、信申不慮之砌、御國之備奉案候之處、御構依無御油斷、分國靜謐、家門御堅固之段、目出難盡紙上候、殊更凶徒退散、怨敵敗北、天然而世上思召儘罷成候之事、御武運之所致、御名譽滿幾內於西海、無其隱候之條、愚僧等迄開喜悅眉候、彌々御武運長久爲御祈念、別而愛染明王供一百箇座勤修、抽精誠、卷數御守進上申候、猶、不退懇祈不存如在候、早速御上洛之旨思召立給候者、可被理天下於掌中、事敢不可有餘儀候、隨而當山江、去年以來信長(織田)猛勢、山下迄差遣、寺中伽藍人法雖欲令破滅候、數度之合戰、當山之衆得勝利、山中江不入立候、雖然經年月者、如何與存候之處、大師之御加持力故歟、彼凶徒父子生害故、當山茂安全罷成候、萬民之歡喜不過之候、東關・北國被相催、於御上洛者、卽紀州三ケ寺申合、中途迄爲御迎可罷出之趣、內々奉待樣候、乍恐其御工夫專一候、路次無事候者、致下向可奉拜覺悟外無他事候、恐惶謹言、

信長高野山ヲ攻ム

紀州三ケ寺申合迎フベシ

(天正十)七月廿六日　清胤(花押)

太守景勝樣御殿中人々

二十七日、癸未、山岸光祐、新潟ニ於ケル新發田重家ノ擧動ヲ、景勝ニ報ズ、

〔別本歷代古案〕十二

態申入候、仍、爲八朔之御祝儀、上樣ヘ御太刀進上仕候、可然樣御披露賴入候、內々節々可申上之處ニ、去夏以來之洪水故、當地方々拔損之普請等申付、彼是取紛無音之體令迷惑候、隨而下口樣々造意等申廻候、實所無之候間、不及御注進候、時邊如何候哉、新潟津之町人共悉證人取、寄居ヘ納候由申來候間、爰元御用心等無油斷候、自何以上口御無事之由承之目出奉存候、彌、無御油斷、諸口御備相極候、若相替儀候者、爰元近邊可申合候、御次而候者可然樣ニ御取成所仰候、恐々謹言、

去年以來越後洪水

新潟ノ町人人質ヲ新潟城內ニ納ル

天正十年七月二十七日

追而、任見來、御肴少進之候、扨又、善右衛門(村山慶綱)尉越中へ爲御番手罷越候諸口珍儀も候
哉、御報委可示預候、以上、

村山慶綱越中番手ニ赴ク

(天正十)七月廿七日　山岸出雲入道光祐

齋木四郎兵衛殿　參御宿所

齋木四郎兵衛

〔參考〕

〔越後古實聞書〕　一、新發田(重家)一味の新潟ハ、日本ゟ二ヶ所の湊也、信州の地(筑摩)(犀)さい川、會津の揚川、國々ゟ大川、其外ゟも落合、新潟町屋も貳千軒程有り、諸國の商人船、奥上方上下に寄所也、此川の中ゟ、長サ貳十町、横十八町の島有り、是を越後の河中島と云、其島ゟ、新發田ゟ城を立、一家の新發田刑部籠置、新潟の町人の妻子を人質取て、色部本庄への道を留め、會津領赤谷の城代小田切三河守に心を合せ、米銀舟にて揚川下し、江川と云へ入、新潟へ屆、夫ゟ新發田へ差越すゟ付而、新潟通り木場と云所に新城を立、本城ゟ蓼沼藤七、二の丸ゟ山吉玄蕃、景勝公ゟ差置なり、

新潟ハ日本二ヶ所ノ港町屋二千軒

新發田刑部

二十八日、甲申、景勝、信濃ヨリ兵ヲ越後ニ班サントシテ、板屋光胤ヲ留メテ監察トナシ、コレニ信濃布施ノ内河野因幡ノ闕所地等ヲ宛行フ、尋デ、其越後ニ於ケル所領ヲ、郡司不入地トナス、

〔別本歷代古案〕十

就當地爲横目指置布施(信濃)之内、河野因幡分、高梨領大熊郷料所分、桑原郷料所分、今井郷小山田分出置之者也、仍之如件、

高梨領大熊郷桑原郷料所今井郷小山田分

天正拾年　七月廿八日　景勝御朱印

板屋佐渡(光胤)守殿

〔上杉年譜〕二十七

於越國出置知行、可爲郡司不入者也、仍如件、

天正十年　八月二日　景勝

板谷(屋)佐渡守殿

八月大盡丙戌朔

一日、丙戌、景勝、兵ヲ信濃ヨリ旋シテ新發田重家ヲ擊タントシ、是日、コレヲ篠岡城ニ將今井久家等ニ報ジテ參陣セシム、尋デ、板倉式部少輔ヲ遣シテ下越ノ諸將ヲ

天正十年八月一日

勸說セシム、

〔上杉年譜〕二十七

急度申遣候、此表隙明候條、一兩日中可令納馬候、然者直其郡可爲出馬候、十日時分歟、縱遲々候共、十一二日之頃者、新發田表可押付之條、其間之儀、堅固之仕置者不及申、敵地之計策肝要候、出馬之儀不可有延引候、謹言、

八月朔日（天正十）　今井源右衞門（久家）殿　山浦家中衆　景勝

〔別本歷代古案〕十三

急度申屆候、信州大半屬手裏候、仕置成就之間、近日可令納馬、然間直樣下郡出馬、早速新發田可遂對治（退）候、來十四五日比ニハ、彼表可押著候條、被得其意、本庄（繁長）有一統參陣尤候、謹言、

八月二日　色部修理大夫（長眞）殿　景勝

〔歷代古案〕三〇羽前

山浦家中衆

色部本庄一統參陣スベシ

急度令啓候、仍春中申定候、新發田御對治之儀、不慮之指合故御延引、旁御身上無心元存候處ニ無何事之由珍重候、然者今度信州御出馬之處ニ、卽時ニ一國御靜謐、有傳聞、定而可爲御滿足候、爰許御仕置悉御成就、一兩日中ニ御納馬、其表御進發之儀、今月半可爲時分候、得其心得、如兼約、此度一途御忠信肝要候、御家中之儀、如何樣ニも貴所御存分次第、可及取成候、猶、巨細板倉式部大輔（少）申含候條、能々可有相談候、恐々謹言、

追而、源五（景國）殿當國（信濃）御本意之儀候條、淸源一途有御忠信、山浦御本意之御稼、相極此辰候、何も御出馬之刻、抽忠信者於有之者、望次第身上可被引直候條、存寄次第被引付尤候、以上、

八月二日　築地修理亮（資豐）殿　兼續（直江）

山浦源五本意ヲ遂グベシ

築地資豐

〔越後治亂記〕下　新發田籠城之事

○上略去程に、新發田押の第一笹岡（篠）の地也、此城ハ御館一亂の勳功として今井源右衞（久家）門に給りし也、新發田へ一日、春日山へハ三日路也、前度山浦國淸の居城成しを、遠所にハいろゝとて、國淸をハ近所の城へ移して、其跡を今井に預ケ給ふ、今度ハ新發田押の所成ハ、酒井將監・黑金宮內兩人に足輕百餘人指添て、今井ゟ城よかへらゝ、又、山

山浦譜代ノ者笹岡ニ留ル

浦譜代の者共少々殘りて此所に有々るを、同心よそ被付々る、件の者共へ、中村與三左衞門・釵持助右衞門・唐澤大膳・赤井橋玄蕃・田中助左衞門・羽鳥六左衞門・山宮理助・大野彌兵衞其外小島・戸香・阿部・藤科・青海川・右坂・日向也、今井も數多人抱、晝夜の嫌もなく、新發田へせり合々るとなり、○下略

篠岡城

常安寺

〔北越略風土記〕八蒲原郡古城跡

笹岡（篠）城

百川莊笹岡ニ在山城也、古へ笹岡中將常安居住ス、其年暦不詳、驛中山崎ニ常安禪寺アリ、此等ハ常安所建ニシテ、其菩提寺ニテ名ヲ以寺號ト爲ト云、其後山浦源吾國清居住ス、天正九年辛巳十一月、景勝侯國清ヲ頸城郡ニ移シ、今井源右衞門ヲ城主ト爲、酒井將監・黑金宮内ト共ニ來テ相共ニ居守ス、

北國軍記ニ、城主酒井新左衞門天正十三年ノ記ニ見ユ、

笹岡ヨリ十町計西南方ニ前田村アリ、其村ノ長ハ笹岡城主今井氏ノ長臣ノ後裔也ト云、其家藏ノ舊記ニ云、笹岡城主今井右衞門ノ亮天正六年二月十八日卒、瑞林院殿玉鳳鸞祥大居士ト謚ス、右三說不同アリ、何カ是ナルコトヲ不知、前田村ノ長、城址ニ碑ヲ建テ之ヲ記、

梶原政景、常陸ニ在リテ、里見義頼ノ將岡本但馬守ニ、信濃・甲斐ノ戰況ヲ報ズ、

〔武州文書〕十五埼玉郡大桑村名主文左衞門藏

追而、別而申入透被聞召屆御取成所仰候、以上、

從太田（佐竹義重）被及書狀候條、拙夫も以三道申達候、口門之樣子被聞召屆、宜御取成賴入候、近日貴國御樣子、一向無其聞候、南衆者（北條氏直）于今信州小諸張陣、越國（景勝）ニも河中島御在陣、能・賀・越之儀者不及申、信州も過半被屬本意候、德川家康も甲府へ取越、南陣へ程近候由候、此上可爲如何候哉、具彼口門可有之候條、不能詳候、恐々謹言、

（天正十）八月朔日　梶原政景（花押）

（岡本但馬守）岡但（里見氏家臣）○參

景勝河中島ニ在陣シ能登加賀越中及ビ信濃ノ過半本意ニ屬ス

三日、戊子、景勝、信濃香坂能登守・春日志摩守等ノ戰功ヲ賞シテ、同國鬼無里・鹽田・別所・安坂等ノ地ヲ宛行フ、尋デ、大日方佐渡守以下同國諸將ノ本領ヲ安堵セシメ、又、新地ヲ宛行フ、

〔別本歷代古案〕十五

自寂前忠信、就中今般兩度抽忠勤事感悅之間、鬼無里（信濃下同ジ）之内五百貫文、鹽田・別所千貫文、大草孫左衞門尉之知行五百貫文出置之候、可勵忠功者也、仍如件、

大草孫左衞門尉知行

天正十年

天正十年八月三日

八月三日　　香坂能登守殿　　景勝

〔大日方文書〕○信濃

從最前忠信、就中今般兩度抽忠勤ニ付而、安坂之地出置之候、彌、當國靜謐之上可令勸賞者也、仍如件、

天正十年　八月三日　（景勝）（朱印）

春日志摩守殿
同　常陸介殿
同　三河守殿

春日常陸介
同三河守

仁科ノ内あふこきり山

今般忠信依無比類、本領之儀者勿論、爲新地仁科之内あふこきり山貳百貫文之所宛行候、彌、可勵軍功者也、仍如件、

天正十年　八月四日　（景勝）（朱印）

大日方佐渡守殿
同　主税助殿

大日方主税助

〔歷代古案〕三○羽前

今度、從最前抽忠信、別而奉公無比類候、依之本領之儀者不及申、爲新知（名脱カ）菅充行候、彌、於勵軍功者、重而可令勸賞者也、仍如件、

天正十年　八月五日　　大瀧土佐守殿　　景勝

菅名

大瀧土佐守

〔小幡文書〕○羽前

任持來旨出置地覺

一小松原百貫文山共ニ、
一同所代官免許三十貫文、
一目賀野三十貫文、
一信府之内八十貫文、

右、不可有相違者也、仍如件、

天正十年八月三日

小松原
目賀野
信府

天正十年八月三日

天正十年

八月五日　（景勝）（朱印）

小幡昌虎　小幡（昌虎）山城守殿

〔謙信文庫所藏文書〕○越後

御本領之儀、先忠之者、何も拘置候間、無據候、相殘分貳千貫之所、進之置候、恐々謹言

天正十年

八月六日　景勝（花押）

高梨彌五郎　高梨彌五郎殿

〔上杉年譜〕二十七

上田賀野ノ内名取上原分長沼　上田賀野之内、名取并上原分、如前々長沼之地付置之間、相當之給人見繕可召使者也、

仍如件、

天正十年

八月七日　景勝

島津忠直　島津（忠直）淡路守殿

新井内藏助分　有膝下可抽奉公之由候間、本領之儀者不及申、新井内藏助分遣之候、別而勤勞尤候、仍

如件、

天正十年

八月八日　景勝

戸狩采女　戸狩采女殿

〔別本〕歷代古案〕十五

任詫言之旨、持來本領不可有相違者也、仍如件、

天正十年

八月八日　景勝

大瀧實安　大瀧（實安）甚兵衞殿○信濃飯山城將

四日、己丑、景勝、越中安邊入道ニ、給分トシテ、同國小出ノ内森田某・勝田某ノ闕所

地ヲ知行セシム、

〔志賀槇太郎氏所藏文書〕○羽前

定

爲給分、小井手（越中小出）之内森田分廿六俵壹斗、同内勝田分參拾俵之所出置候、知行不可有相

天正十年八月四日

違、但、諸役等之儀可ㇾ爲ㇾ如ニ前々一者也、仍如ㇾ件、

天正十年　八月四日　（景勝）（黒印）

安邊入道殿

五日、庚寅、景勝、村上景國ヲシテ、信濃川中島四郡ヲ管セシメ、是日、其制令ヲ定ム、

尋デ、信濃・越後ニ於ケル景國ノ領地及ビ同心軍役ノ數ヲ定ム、

〔歷代古案〕三　○羽前（景國）

清源一途

○上略　追而、源五殿（信濃）當國御本意之儀候條、清源一途、有ニ御忠信一、山浦御本意之御稼、相ニ極此辰一候、○下略、全文ハ八月一日ノ條ニ收ム、

八月二日　（天正十）　（直江）兼續

築地修理亮殿　（資豐）

〔滿泉寺文書〕○信濃

制令武田氏ノ舊ニ從フ

覺

一郡司之儀、春日古彈正（勝賀）可ㇾ爲ㇾ如ニ申付一事、

但、長沼之儀者勿論、自ニ彼地一郡司入候之所相除、付牧嶋馬場美濃守（信春）如ニ在城之時之一、

一越國知行、有ニ相違一間敷事、

越後ノ知行相違ナシ

一當地在城之侍共、訴訟之時、人ヲ被ニ差添一尤候事、

一同心之者、有ニ罪科一以下斷絶之時、彼跡職分別次第、可ㇾ被ニ申付一事、

裁判ハ越後ニ仰グベシ

一城林、信玄（武田）、勝賴可ㇾ爲ㇾ如ㇾ被ニ申付一事、

城林

以上

天正十年　八月五日　（景勝）（朱印）

村上源五（景國）殿

〔祥光寺文書〕○山城史料通信叢誌所收

一信州更科・埴科・水内・高井四ヶ郡之事、如ニ先規一之可ニ受納一、但、小縣・筑磨（摩）兩半郡者軍役等免許之事、附、國法信玄・勝賴可ㇾ爲ㇾ如ㇾ被ニ申付一事、伐林猶可ㇾ任ニ先規一也、

一越國知行村上領・山浦領之事、附、同心之者三百六拾騎、於ニ越・信一所ニ預置一之也、

一軍役之儀者、壹萬石付拾七騎宛可ㇾ被ㇾ出之事、

右、高合四拾三萬六千四百六拾石、於ニ三ヶ所一出置之畢、全可ㇾ被ㇾ爲ニ知行一之條仍如ㇾ件、

天正十年八月廿日　景勝（花押）

村上源五殿

○謙信、國清ニ、舊領信濃山浦四萬貫及ビ飯山ヲ領セシムルコト、元年十二月八日ノ條ニ、景勝、景國ノ信濃四郡ノ統轄ヲ罷メ、上條宜順ヲ以テコレニ替ユルコト、十二年四月六日ノ條ニ見ユ、祥光寺文書疑アルモ、姑ク茲ニ掲グ、

〔參考〕

〔松代通記〕下　○路原拾葉所收　海野(津)城事蹟

天正十年壬午三月、武田滅亡アリシ後、信長公ヨリ海津城主トメ森武藏守長一(可)森三左衞門可成男、ヲ置レケルカ、同年六月二日、信長公京都ニ於テ御生害有ケレハ、森庄(勝)藏モ信州ヨリ上洛アリ、其後上杉景勝、信州ヘ討テ出テ、北條氏政(直)モ信州ヘ討入リ、川中島ニ對陣ス、合戰アリケル處ニ、北條戰負テ引退キケレハ、更科・高井・水内・埴科四郡上杉領トナル、海津城ニ須田相模守・甘粕備後守ヲ城代トメ、二ノ曲輪ニハ上倉式部少輔純長ヲ入置、牧島城ニハ海津城ヨリ四里、芋川越前守、或芋川前入道トアリ、飯山城ニハ海津北東十一里、岩井備中ヲ入置、長沼城ニハ海津東北四里餘、島津淡路守ヲ入置、坂本(木カ)城ニハ村上源五郎國清(景國)ヲ入置、景勝ハ越後ヘ馬ヲ入タリ、

〔管窺武鑑〕四　景勝公信州發向之事

四郡上杉領トナル

信濃諸城ノ部署

扨、景勝公ハ、海津城ニ御逗留、信州表仕置被仰付、

一海津城、村上源五國清ヲ被差置、更級郡ヲ被下、高坂被官同心共ニ被附之事ハ、村上殿御本意ノ儀ヲ被思召テ也、筑摩川ヲ限、西ハ海津組トアッテ、村上合備也、

附、高坂介副ノ小幡山城ヲハ、下野守ニ被成、春日山ヘ被召寄、御旗本組ニ被仰付候、

二福島城、如前々、隅田左衞門尉被預下、

三市川城、如前々、市川對馬、

四綱島城、如前々、綱島豐後、

五寺尾、如前々、寺尾傳左衞門、

六豫摩瀨、如前々、豫摩瀨、

七西條、如前々、西條治部少輔、

八東條、如前々、東條、

九大室、如前々、大室源次郎、

十板屋、如前々、板屋修理亮、或保科左近允ケ樣ノ衆大形海津組也、

河中島四郡ヲ二備ニ分ツ

一長沼城、越後家島津淡路守ヲ被差置、筑摩川ノ東ハ長沼組ニ被仰付、島津相備也、然ハ河中島四郡ヲ二備ニ分テ如此、口傳、

二猿ケ馬場ノ麓龍王ノ城、如前々清野左衞門尉ニ被預下、

附、清壽軒ハ其頃隱居也、

三牧島城、芋川越前守、此子彦三郎共ニ、其頃武田家ヲ牢人仕、越後ヘ賴來、忠功アル故、此度本意被仰付候、

四善光寺別當栗田永壽、如前代被仰付、

五屋代、如前代屋代左衞門ニ被預下、

六尾味城、如前々尾味左兵衞、

七青柳ニ、如前々春日源太左衞門、

八春日ニ、如前々春日右衞門尉、

九小田切、如前々小田切安藝守、

十飯山ヲハ、越後家岩井備中守ニ被下之、

右之外、小キ搔揚ヲ持、城ヲ不持シテ五百貫、千貫斗ノ侍多、又ハ夫ヨリ小身ノ士ニ至迄、御仕置正道ニ被仰付也、扨又信州衆・上野平二兵衞・跡部甚内、甲州旗本組ノ佐藤一

信濃足輕大將

甫齋ヲ、春日山ヘ被召連、御旗本足輕二百人宛御預、信濃足輕大將ト名付、其被召使樣子、口傳、其外信濃衆ヲ御旗本ニ被召置、或ハ士大將衆ヘ與力被官ニ被下タルモ多シ、

景勝、信濃小幡昌虎・窪島日向守・大瀧土佐守ヲ、越後ニ召連レントシテ、各、同國知行分ノ諸役ヲ免ズ、

〔小幡文書〕○前羽

今度越國ヘ召連付而、信州知行分、諸役令免許者也仍如件、

天正十年
八月五日　（景勝）（朱印）
小幡山城守（昌虎）殿

〔高橋文書〕○前羽

今度越後ヘ召連付而、信州知行分諸役令免許者也、仍如件、

天正十年
八月五日　（景勝）（朱印）
窪島日向守殿

天正十年八月五日

〔歷代古案〕三〇羽前

今度越後召連付而、信州知行分諸役令免許者也、仍如件、

天正十年

八月五日　　景勝

大瀧土佐守殿

〔管窺武鑑〕四

○上略附、高坂介副ノ小幡山城ヲハ、下野守ニ被成、春日山ヘ被召寄、御旗本組ニ被仰付候、○全文ハ、前條ニ收ム、

〔附錄〕

〔別本〕歷代古案〕十五

信濃ヨリ召連者ヲ歸還セシム

其方自信州被召連候譜代之者、或ハ取旦那、或者他領跡住宅候共、早々被罷歸候而、此度本意之御稼肝要候、若横合之人於有之者、交名可承候、恐々謹言、

直江

六月十六日　　兼續

島津常陸介殿

島津常陸介殿○年次詳ナラズ、姑ク茲ニ附收ス、

七日、壬辰、景勝、信濃荒砥在番衆ヲ定メ、尋デ、飯山・葛山諸城ノ制令ヲ定ム、

〔上杉年譜〕二十七

荒砥番帳

一鎗　四十三挺　清野

一同　十一挺　寺尾

一同　十一挺　西條

一同　七挺　大室

一同　七挺　保科

一同　七挺　綱島

一同　十五挺　綿内

右、各武主一人宛差副、詰十日充、嚴重可相勤之者也仍如件、

天正十年

八月七日　　御朱印（景勝）

掟

天正十年八月七日

天正十年八月七日

一城内(飯山)江不案内之者不可入事、

一普請常々可心掛事、

一町人地下等無力之間、大途用所之外、萬端用捨尤候事、

附、城普請之刻、人脚以下禰津勝頼可爲如被申付事、

以上

天正十年　御朱印(景勝)

八月八日

岩井備中守殿(昌能)

同民部少輔殿(信能)

〔歴代古案〕四〇羽前

定

長沼

一自然之儀於有之者、閣萬事長沼之地江相移、島津淡路守(忠直)舌頭次第可走廻事、

葛山

一葛山領中人脚之儀、可爲前々之事、

一自前々被官百姓等、今般誰哉之人ニ致契約候共、急度召歸、百姓役可申付候、若於令

禰津勝頼

難澁者、以交名注進、可被成御下知之事、

以上

右條々、可存其旨之由、被仰出、被成御朱印者也、仍如件、

天正十年　御朱印(景勝)　八月八日　直江奉之

葛山衆

十一日、丙申、河田長親ノ子岩鶴丸、下條源介ニ、越後古志郡ノ内馬場左近・塚田某ノ闕所地ヲ知行セシメ、尋デ、安部市右衞門尉ニ、同郡立入彌兵衞尉・櫻井五介ノ舊領地ヲ宛行ハシム、

〔上杉年譜〕二十七　天正十年八月十一日、下條源介・阿部市右衞門ハ、謙信公御代、河田豐前守長親ニ付置レ、城中松倉在城ヲ勤ム、去ル天正九年五月、長親病死ス、男岩鶴丸其齡イマタ幼若タレハ、他境ニ差置ル事如何ニ思召レ、今般越府ヘ召シ歸サレ、古志城主ニ命セラル、此ニ依テ、源介・市右衞門モ舊例ノ如ク、岩鶴丸ニ屬シ、越府ニ來ルニ付、卽公命ヲ歴テ、食邑ヲ出ス、其書云、

岩鶴丸ヲ古志城主ト爲ス

爲給恩、古志郡之内、馬場左近分、并塚田分、全知行不可有相違者也、仍如件、

天正十年八月十一日

天正十年

八月十一日

下條源介殿

（河田）岩鶴丸

〔志賀槇太郎氏所藏文書〕○羽前

爲ニ給分一古志郡之内立入彌兵衞尉分・櫻井五介分出置之候、令ニ知行一不レ可レ有ニ相違一者也、仍如レ件、

天正十年

八月十四日

安部市右衞門尉殿

岩鶴丸（黑印）

○岩鶴丸、吉江景利ニ、村椿等ノ地ヲ知行セシムルコト、十一年正月二十八日ノ條ニ見ユ、

〔附錄〕

岩鶴丸母ノ希望

〔上杉家古文書〕

態令ニ啓札一候、仍從ニ岩鶴殿御老母一以ニ山田修理亮方一被レ御申上一候子細、雖レ無ニ申迄一候、宜樣ニ御取成（肝）簡要存候、於ニ樣體一者、彼方可レ被ニ申分一候間、添狀不レ具候、恐々謹言、

追而、彼方御返事被レ急、早々御返尤候、爰元御用申合度儀共御さ候間、如レ此ニ候、以上、

黑兵

景信（花押）

六月卅日

桐左（桐澤具繁）

十二日、丁酉、蘆名盛隆、景勝ノ信濃平定ヲ賀シ、其越後新發田重家出征ニ贊ス、而シテ竊ニ重家ヲ援ケ、小田切彈正忠ヲシテ、景勝ノ爲ニ兵ヲ出スコトヲ留ム、

（山崎秀仙）○年次詳ナラズ、姑ク玆ニ附收ス、尙、岩鶴丸母、毛利秀廣ノ領地專柳齋ニ就テ詫言セントスルコト、九年七月二十八日ノ條ニ見ユ、

〔上杉家古文書〕

近日其表模樣無ニ御心元一候之條、自是可ニ申屆一之覺悟候之處、芳翰本望之至候、信州大半被レ屬ニ御手裏一之由、誠以肝要之至候、然上有ニ御納馬一下郡へ可レ被ニ打出一之由承候、尤以可レ然候、猶、其節彼是可ニ申入一候之條不レ能レ具候、恐々謹言、

（天正十）八月十二日

（蘆名）盛隆（花押）

山内殿御報

〔歷代古案〕四○羽前

貴札委曲令ニ披見一候、信州大半如レ被ニ思食一之由、誠以目出珍重候、然者近日有ニ御納馬一、新發

田江可被進御馬之由候、御肝要之至候、其刻盛隆以使者可被申述候、不時日彼表落居可有之候、萬々其節可申達候間、奉省略候、恐々謹言、

金上遠江守

盛満（備）○小川庄津川城主

八月十二日

春日山

〔別本歴代古案〕十四　参貴報

金上盛備

態及一封候、景勝自信州陣直ニ新發田へ可被及調儀之由其聞候、若其時分早々合力等被催促候共、自是不申付以前、一人も罷出候而ハ、口惜候、縦、自春日（景勝）懇望ニより、及合力候共、以分別自是可申付候、左も無之處、一人も出候者、必々可有其科候、横目を付候而、爲見候而可及其斷候、爲心得兼而申遣候、恐々謹言、

盛隆

八月十四日

小田切彈正忠殿○小川庄石間邑主

彈正忠ヲ監視ス

〔伊佐早文書〕○羽前伊佐早謙氏所藏

景勝ニ船ヲ貸スコトヲ禁ズ

書札委曲披見候、景勝新發田筋へ出張候哉、依之自越衆書狀披見候、舟之儀借候（貸）事、返返無用ニ候、委松本伊豆守ニ申理候間、可申越候、細事之儀候共、越國へ間々忠節慮外之至候、向後其分候者、斷而可申付候、恐々謹言、

盛隆（花押）

八月十六日

小田切彈正忠殿

○景勝、盛隆ノ、新發田重家ヲ助ケンコトヲ憂ヘ、盛隆トノ舊交ヲ尋ネ、盛隆、景勝ニ、重家トノ講和ヲ勸ムルコト、二月二十六日ノ條ニ、盛隆、小田切彈正忠ニ、令ヲ俟タズシテ兵ヲ出スコトヲ禁ズルコト、四月二日ノ條ニ、景勝、鷗閑齋ヲ盛隆ニ遣シ、盛隆ノ家臣須江光賴、景勝ニ對シテ斡旋スベキコトヲ鷗閑齋ニ報ズルコト、十月五日ノ條ニ見ユ、

十五日、庚子、景勝、泉澤久秀ノ功ヲ賞シ、加恩トシテ、河沼某ノ闕所地ヲ宛行ヒ、又、荏戸九郎兵衛ニ本領、吉江長忠ニ亡父景資・兄長秀ノ越中ニ於ケル所領ヲ安堵セシム、

〔謙信文庫所藏文書〕○越後

奉公無油斷依相勤爲加恩河沼分充行候、軍役等如前々可相嗜者也、仍如件、

天正十年

八月十五日

景勝（花押）

天正十年八月十五日

泉澤河内守(久秀)殿

○久秀ニ、新給ノ地ヲ、郡司不入地等ト爲スコト、閏十二月十八日ノ條ニ見ユ、

〔莅戸文書〕○前羽

任二詫言之旨一、本領出置候、如二前々一軍役等、嚴重可レ勤之者也、仍如レ件、

天正十年

八月十五日　(景勝)(朱印)

莅戸九郎兵衞殿

越中寺島分
神保四郎左衞門尉分

〔吉江文書〕○前羽

越中寺島分幷神保四郎左衞門尉分、亡父織部佐(景資)・同六三(長秀)ニ差遣如二證判一、不レ可レ有二相違一者也、仍如レ件、

天正十年

八月十五日

吉江與橘(長忠)殿

景勝(花押)

〔參考〕

吉江系圖

〔吉江氏系圖〕　宗信

景資　初與橘　後織部佐
天正十年六月於二魚津一戰死、五十六歳　法名功運玄忠居士

長秀　童名龜千代丸　初景秀　後號二六三一
天文廿二年生　母河田對馬守吉久女　天正十年六月
三日於二魚津城一戰死、三十歳　法名信學良忠居士

景泰　永祿元年生　沙彌法師　改二與次一
後嫁二中條越前守藤資女一繼二中條家一號二越前守一○略中

長忠　初茂高　與三郎　後與橘　又杢助
永祿九年生　正保四年四月廿六日卒、八十二歳　法名春山昌立居士

景資

長秀

菅名押著

二十日、乙巳、景勝、新發田重家ヲ擊タントシテ、信濃ヨリ春日山城ニ旋リ、是日、三條ニ到リ、尋デ、菅名ニ進ミ、將ニ阿賀野川ヲ渡リテ新發田城ニ逼ラントスルコトヲ、今井久家等ニ報ズ、

〔今井文書〕○上杉家記所收

急度申遣候、今巳刻三條著馬候、明日諸甲相休、明後菅名へ押著候、翌日廿三越河、逆徒領中打散、可レ墟調儀不レ可レ移二時日一之間、其心得尤候、謹言、

(天正十)八月廿日　景勝

今井源右衞(久家)門殿

天正十年八月二十日

山浦家中衆

其外山浦家中衆

○上條宜順、景勝ニ、新發田重家ヲ擊滅センコトヲ勸ムルコト、四月一日ノ條ニ見ユ、景勝、信濃ヨリ旋リテ、復、春日山城ヲ發スル日詳ナラズ、

二十三日、戊申、信濃ノ守將村上景國、同國蓮光寺ヲシテ、寺領ヲ安堵セシム、

〔東光寺文書〕○信濃

東條東田中五十貫

脇坊同所ニ住置者也、

蓮光寺（信濃海津）々領之處、東條（信濃）・田中於兩所之内、前代之寺領無殘、五拾貫之分進置候、仍、恒例之寺役、御祈念不可有退轉之狀如件、

天正十年　八月廿三日　村上源五　景國（花押）

快與法印

二十八日、癸丑、越後築地城主築地資豐・鮎川城主鮎川盛長、去就未ダ定マラズ、景勝、板倉式部少輔ヲ遣シ、コレヲ諭シテ歸屬セシム、資豐、景勝ニ從ヒ、盛長終ニ新發田重家ニ應ズ、是日、景勝、資豐ヲ警メ、且ツ、參陣セシム、

〔築地文書〕○羽前

快與法印（御同宿中）

景勝資豐ノ歸屬ヲ褒ス

先達自直江（兼續下同ジ）所、以板倉式部少輔申遣趣、令分別、今般可復先忠之由、誠神妙不淺、次第候、然上早速露忠信之色肝要候、於樣體者、彌自直江所可申候、謹言、

八月廿七日（天正十）　景勝（花押）

築地修理（資豐）亮殿

盛長景勝ノ書ヲ開封セズシテ新發田重家ニ送ル

昨日用書中候キ、定可相屆候、仍、鮎川（盛長）事代々忠信之者ニ候、此中者無據新發田一統之分候哉、今般出馬之上者、則可任先規哉、興思候處ニ、板倉才覺之分者案ニ相違候而、切替新發田一味之由候、板倉爲計策、差遣切書等、不切對（封）、新發田ヘ差越之由候、其上吾分を者相隔、鮎川を者因幡無二令入魂之由候、然時者爲鮎川代々違筋目候事、自業自得果候條可差捨候、如此之間、彼者急度及其擬、早速參陣尤候、爲其一筆遣候、謹言、

八月廿八日　景勝（花押）

築地修理亮殿

直江兼續板倉式部少輔ノ資

〔歷代古案〕三○羽前

此中以御肝煎、其元之儀落著、公私大慶無是非候、其方御辛勞之程相見候、別而御感候、扨又、築修事、如書面、今般之忠信手柄之程無比類候、彼仁之事者、於揚河北中無其隱方

豐懷柔ノ勞ヲ謝ス

ニ候由、上下承及候、實者此度之儀も、只人と不ㇾ成事候間、感思申候、然者我等乍ㇾ若輩、彼仁無二令ㇾ入魂、身上之儀可ㇾ令ㇾ馳走ㇾ條、可ㇾ心安ㇾ候、御心得尤候、將又、各參陣之儀、御催促肝要候、恐々謹言、

九月五日　　直江　兼續

板倉式部少輔殿　御返事

上野

二十九日、甲寅、景勝、越後安田ニ抵リ、穴澤忠長ヲシテ、色部長眞等ノ兵ヲ糾合シテ來會セシム、

〔上杉年譜〕二十七

先達而兩度如ㇾ申通ㇾ路次不ㇾ合期ㇾ之條、可ㇾ爲ㇾ遲々ㇾ候、篠岡（北蒲原郡）之飛脚幸之條令ㇾ馳ㇾ一翰ㇾ候、兼日如ㇾ申遣ㇾ、自ㇾ信州ㇾ納馬、則新發田爲ㇾ對治ㇾ出馬、今日巳之刻安田（同上）至ㇾ于號ㇾ上野ㇾ地ㇾ令ㇾ出馬ㇾ候、明後日者館（新發田）迄押詰、先近邊成ㇾ黑土ㇾ、其上急度可ㇾ及ㇾ擬候、色部（長眞）・大川（長秀）以下有ㇾ催促ㇾ、早々參陣尤候、謹言、

（天正十）八月廿九日　　景勝

穴澤善左衞門（忠長）殿

九月　大盡　丙辰　朔

二日、丁巳、景勝、新發田城ニ迫ル、既ニ會津蘆名氏ノ加勢著陣セルヲ以テ、景勝、コレヲ色部長眞ニ報ジ、本在繁長ト共ニ速ニ來會セシム、

〔色部文書〕○前　羽

對ㇾ直江（兼續）ㇾ如ㇾ書面者、一昨日之火先無ㇾ心元ㇾ之由候、先達以ㇾ板倉式部少輔ㇾ如ㇾ申越ㇾ、五十公野至ㇾ于新發田之間ㇾ在陣、近邊放火候、昨今者新發田堀際迄押詰、成ㇾ墟候、於ㇾ時宜ㇾ者可ㇾ心安ㇾ候、扨亦、其表之儀者、少切ニ候條差置、本庄（繁長）令ㇾ同心ㇾ參陣、於ㇾ眼前ㇾ粉骨肝要候、猶期ㇾ面候、謹言、

追而、會津（蘆名氏）も加勢先衆者昨日漸著陣候、此時者其元遲々、自他之覺如何候條、本庄同心頓速參陣待入候、以上、

九月一日　蘆名氏ノ援軍到ル

（天正十）九月二日　　景勝

色部修理大夫（長眞）殿

四日、己未、景勝、信濃仁科織部助ニ同國池田鄕等ヲ、耳塚元直ニ同小宮等ノ地ヲ宛行フ、

〔歷代古案〕七○羽前

今度於其地可抽忠信之由候間、任望之旨、尤本領之儀者勿論、

一池田郷（信濃下同ジ）

一瀧澤

一荻原

一細野

一松川

一小鹽

右出置之候也、以上、

天正十年

九月四日　（景勝）（朱印）

仁科織部助殿

信濃平定ヲ待チテ先判ノ領地ヲ安堵セシムベシ

信州一變之上、先判之處不可有相違者也、仍如件、

天正十年

十二月十二日　景勝

仁科織部佐（助カ）殿

〔志賀槇太郎氏所藏文書〕○羽前

於今般其地可抽忠信之由候間、任望、一小宮、一岩岡口、一野口出置之候、彌、粉骨肝要候也、以上、

岩岡口

野口

天正十年

九月四日　（景勝）（朱印）

耳塚作左衞門尉（元直）殿　○信濃日岐城將

加賀一向宗徒蜷川新七郎等、本願寺光佐ヲ擁シテ越中國境ニ在リ、景勝ニ來援ヲ請フ、是日、景勝、當月中ニ出馬センコトヲ答フ、

〔別本〕歷代古案〕十五

去月八日之書狀、今月三日到來、慥見屆候、皆々越中境堪忍、門跡手前相守之由、心地能感入候、仍、當方出馬之儀、初秋相定之處、越中相殘侍共樣々申寄子細共候間、其旨趣首尾調之間、與于今延引之樣候、近日時宜可相調候間、當月中必可令出馬候、其間之儀、如何ニも堅固之仕置肝心ニ候、將又、當方之義無心元存間敷候、縱、如何樣之儀候共、前代以來賀國入魂之儀候間、見放儀有間敷候、此段有疑心者、不可有曲候、兎角越中之者共

越中ノコトニ依リテ出馬延引ス

加賀衆ハ

天正十年九月四日

前代以來入魂

申寄様子、有首尾も、爲不亦相調も、於出馬者令必然候間、彼刻火先次第手合專用候、恐恐謹言、

九月四日　景勝

蜷川新七郎殿
廣瀨四郎二郎殿
奥彦四郎殿
長谷川兵十郎殿
高桑孫右衞門尉殿
山本若狹守殿
高橋新左衞門尉殿

○新七郎等、景勝ニ來援ヲ請フコト、年次詳ナラズ、今姑ク玆ニ掲グ、

五日、庚申、直江兼續、借金及ビ諸年貢減免ノコトニツキテ、山田喜右衞門ニ差圖シ、且ツ、本年中ニ越後安國寺後住決定ノ旨ヲ告グ、

〔上杉古文書〕十六　○羽前

爲音信鮭壹尺到來、令祝著候、

一於此方黃金借候衆如申越候、可申付候事、　黃金貸付ノコト

一信州酒役・麴役之儀、越後幷ニ、窪田令相談可申付候事、　信濃酒麴稅ノコト

一町年貢之以下、其所之様子次第、或者半納、或者三ヶ二可取置候、一圓用捨之儀者、諸事御用之前、不成義ニ候事、　町年貢以下ノコト

一所々ヨリ雁菱喰以下取候もの役義之儀、其元ニテ談合候テ、可申付候事、　狩獵稅ノコト

一素作知行之儀者、作步所江可申越候事、　素作知行ノコト

一安國寺屋敷廻之年貢以下、去年分者御藏納ヘ可申付候、當年者住寺相定被爲下候條、無申事候、一花院ニ不被下候事、　安國寺屋敷廻年貢ノコト

一其方預置候御料所穿鑿之様子、聞屆尤候事、　安國寺後住一花院ノコト

一府中館廻之年貢具申付尤候事、　御料所穿鑿ノコト

一其方下候有原中間足輕以下、用濟次第可相遣候事、　府中館廻年貢ノコト

直江兼續（花押）

九月五日

山田喜右衞門殿

○右書、年次詳ナラザルモ、姑ク玆ニ掲グ、景勝、僧桂天ニ、安國寺塔頭一花院ヲ給シ、尋デ、先住是鑑ノ時ノ如ク、安國寺ニ寺領幷ニ諸末寺ノ諸役ヲ免除スルコト、

天正十年九月五日

十一年二月四日ノ條ニ見ユ、

前田利家、景勝ノ能登ニ兵ヲ出サントスルヲ聞キテ、家臣三輪吉宗ヲ警メ、マタ、同國珠洲・鳳至兩郡沿海ヲ警戒ス、

〔加能越古文叢〕三十八

景勝出兵ノ風聞

敵船討拂

書狀令披見候、仍、其表相替儀無之由、祝著候、然者越後より喜平（景勝）二被罷出之由候、何とて書狀ニハ不申越候や、彌慥之儀相尋可申越候、若海きハへ舟子ふとこて出事候ハハ、地下人としており合可討留之由、在々へ可申付候、此節若きもの共の望有之事候、無油斷可申付候、次松茸到來、令祝著候、其表之様子、細々可申越候、謹言、

（天正十）九月五日　利家（前田）印

三輪藤兵衛（吉宗）殿

右拾遺温故雜帖載之、自越前府中之親書乎、原書金澤士族三輪氏所藏、按、天正十年九月之親簡乎、喜平二者景勝也、

珠洲鳳至兩郡ノ計議者ヲ檢索ス

急度申遣候、能州珠洲・鳳至兩郡之内、緣者親類さりと云共、若計（議）義之者於有之者、急キ可注進候、是ハ士使指下し、からめ取可申候、萬事あ（粟）ゝくら（藏）分別肝要候、以上、

天正十年　利家朱印

粟倉彦丞

（粟藏）あゝくら彦丞

右粟藏彦丞傳書載之、

彦丞ヲシテ船舶ヲ掌ラシム

按ニ、此親書も九月五日の親簡と同時ふらんか、

一貞享二年由緒云、奥兩御郡船之裁許、彦丞へ被仰付、御印被成下、相守浦方廻申候所ニ、越後兵船著岸之段、珠洲郡蛸島浦ニ而見屆、早速御注進申上、鹿島郡之内笠師村之者、并豐田村一向坊主、越後勢と一味仕候を承付、致言上候處、右之者共曲事被仰付候、其砌無心許者於在之者、早々搦捕言上可仕旨被成下御書頂戴仕候由承傳申候、

越後兵船蛸島浦ニ著ス

一向坊主越後勢ト一味ス

一按ゝ、右無心許者於在之者、早々搦捕言上可仕との御書ハ、卽天正十年の印書なるへし、

十九日、甲戌、景勝、士庶棟別ニ米ヲ課シ、行軍中兵士ニ供給スル食汁ヲ規定シ、且ツ、饗酒ヲ禁ズ、

〔志賀槇太郎氏所藏文書〕○羽前

棟別三升　兵士ヲ舍スモノハ免除ス　兵食一汁一菜

一棟別出米、家一間ニ三升ほゝさるへき事、

付、とまり（泊）〳〵まて、まろふひ（賄）いさし候いゑ（家）をも、一間よるさ（許）るへき事、

一まろふひハ、一汁一さいさるへき事、

付、さけ（酒）むよう（無用）ニ候事、

一棟やくニ候間、侍地下之事者もちろん（勿論）、寺庵社家その不ろいろやうのいゑをも、日記ニまるし申さるゑき事、

以上

右所ノ定如ノ件、

天正十年九月十九日　（景勝）朱印

二十一日、（丙子）景勝、築地資豐ヲシテ、堅ク居城ヲ守ラシメ、且ツ、本庄繁長ニ命ジテ、加勢ノ兵及ビ兵糧ヲ築地城ニ送ラシム、

〔築地文書〕○羽前

繁長出陣ナクトモ加勢兵粮ハ調フベシ

其地加勢、兵粮之儀ハ付而、本庄へ遣飛脚候、彌次郎（本庄繁長）重而於出陣者勿論、縱、左様ニ無之候共、右之兩條堅可相調間、可心安候、此表仕置之儀候條、新發田落居之間、堅固ニ申付不叶儀候、其上吾分今般無二之忠信、爭無差與可成置候、此旨分別尤候、次、當表近日思之儘之吉事、重而可申屆候、謹言、

（天正十）九月廿一日　（資豐）築地修理亮殿　景勝（花押）

○繁長、景勝ニ、築地城ノ援助ヲ諾スルコト、十月五日ノ條ニ見ユ、

是ヨリ先、景勝、景虎ト戰フヤ、色部長眞、景勝ニ告ゲズシテ其邑越後平林ニ還ル、長眞、常ニ嫌疑ヲ恐ル、景勝、新發田城ヲ擊ツニ方リ、長眞、本庄繁長ト共ニ參陣ノ途ヨリ歸邑シ、コレヲ辯疏ス、是日、景勝コレヲ聽シ、更ニ其出陣ヲ促ス、

〔色部文書〕○前

在所仕置ノ爲ニ歸邑セルモノニシテ他意ナシ

先日、本庄（繁長）一統出陣、已ニ可有參陣之處、先年（六年）不被及暇、在所不著（誤アルカ）、此所奥意如何之由候、早速歸陣之由、驚入候、在所爲仕置下向、毛頭別之子細無之通聞屆候上者、更不可有疑心候、此段有分別、彌本庄同前、忠信肝要候、巨碎直江可申候、謹言、

（天正十）九月廿一日　（長眞）色部修理大夫殿　景勝

家中騷擾

〔別本〕歷代古案〕十三

先達家中造意付而、早速歸陣、雖然依無指義、重而出陣、所々放火、一段心地存（好脫カ）候、○下略、全文ハ、